

鬼灯の冷徹かと思った
が……………

超高校級の切望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生＋クロスオーバー

目次

地獄の柳	1
座敷トリプル?	7
聖剣使いの神父	13
悪魔祓いの霊	18
転生の実態	22
ファミレスに集う和洋	27
コカビエル	33
地獄の兎	42
勢力会談開始	48
三大勢力会議の襲撃者	54
旧魔王の血筋	62
情報開示	70

地獄のリゼヴィム	75
日本の夏	81
新しい任務	88
新任先生アザゼル	96
冥界行き列車	101
TPO	108
グラシヤラボラスの災難	114
オーフィスの所在	122
閑話1	129
平獄卒ゼファードル	138
銀髪仮面	144
駒王の七不思議	150
浄玻璃の鏡(レプリカ)	157

ルシファーの任命	163
ロキとヘルスの地獄見学	171
猫親子の再会	185
夏場の心霊スポット	196
神話とは	207
祭り	213
運動会準備	221
体育祭	227
北欧の主神の来訪	232
家族	239
英雄派	245
地獄に住む母親	253
地獄式運動会	260

柳の日曜日	268
閑話2	277
目指せ京都	284
京都到着	291
今代の九尾	300
露天風呂	308
自首する聖女	315
ヘラクレス対アルケイデス	323
ハーデスの隠れ兜	331
ハーデス	337
人十	344
日本の呪いの執念深さ	353
吸血鬼の国	362

闇の獣

魔王の怒り

最強の邪竜



387 378 369

地獄の柳

地獄。

それは死後、人が落ちる場所。現世での罪の、その罰を受ける場所。そこは獄卒と呼ばれる鬼達が亡者に罰を与える場所故に、人間の獄卒は僅かしかない。その僅かも補佐官などにつき、現場に行くことは殆どない。

ない、筈なんだがなあ……………

「何で俺は地獄で働いてるのかね？」

「うおおお！どけえ！」

「亡者の脱走だあ！」

「よつと……………」

取り敢えず突っ込んできた亡者の腹を蹴る。吹き飛ぶ亡者。

うん、強いね俺。

地獄での生活長いし、妖怪の肉とか食ってたからかね？

「あ、これは柳様、ありがとうございます」

「気いつけろよ」

「……………なあ、あの人人間だよな？」

「何だお前知らんのか？あの人、天国にも地獄にも行けないから閻魔殿で保護することになった人なんだってよ」

「天国にも地獄にも？」

「記録がないんだと。善行も悪行もいつさい不明。それどころか出生の記録すらない。扱いに困って保護」

「何だそれ。あれ、でも何で働いてんの？」

「『暇すぎて辛い。仕事くれ』と鬼灯様に直談判したらしい…………」

「ホントになー。境遇変わって欲しいわー」

和服姿の二人の男が煙管の煙を吐き出し、細目の男が赤目の男に羨ましそうに言葉を投げかけた。

「あんさん本当は働かなくても良かったんじゃろ？なしてそのまんま惰眠貪らなかつたのよー」

「俺は一週間以上やりたいたいことだけしてると逆に何かしたくなるんだよ。それに、金ねーと姐己様の時間を借りれねーからなあ」

「何だい兄さん。あんた九尾の狐に御執心なのかい？折角の給料を妓楼に使つちまうのはどうかと思うがね」

と、二人の座る長椅子の上にトンと服を着た猫が上る。

「止めといた方がよいぜー。あんた妖怪の肉とか食つて変異しちまつてるが、元は人間。大妖怪様からしちや珍味だ。いつか食われちまう」

「そうなたらなつたで……まあ姐己様なら構わねーよ。俺もだいぶ気持ちいい思いさせてもらつてるしな」

「あら、私も気持ちいい思いさせて貰つてるからおあいこね」

と、不意に後ろから声が聞こえた。細目の男と猫がビクリと震え恐る恐る振り返る中柳は笑みを浮かべ振り返った。

「早いね姐己様。時間には、まだあると思つたけど」

「私も楽しみだつたものねえ。それより檜、あなた最近成績良くないのに、良く平気で休めるわね」

「あ、あー！ワシ仕事思いましたー！」

檜と呼ばれた細目の男は脱兎のごとく駆け出した。狐のくせに脱兎のごとくとはこ

れ以下に。

「それじゃあ柳、行きましよう?」

「……………ん」

柳の指が背中を撫でると姐己は気持ちよさそうに目を細める。

指が同じ場所を往復し、擦ったがるように身を震わせる姐己。柳は姐己を撫でていた手を止め、反対の手を近付ける。その手に握られているのは……………ブラシ。

「ん、ふあ……………やっぱり柳は毛繕い上手ねえ」

巨大な九尾の狐の姿になり柳にブラツシングされる姐己ははあ、とため息を吐く。

柳が金を払い姐己に頼み込んでいることは、毛繕いだったのだ。

「んー、今日もモフモフ……………シロや芥子ちゃんのも気持ちいいんだけど、やっぱり姐己のは格別だな」

「あー酷い。私以外にもやつてるの? 私は貴方にしか毛並みに触れるのは許してないのに」

もう何年も前だが、あれを忘れはしない。

人間でありながら現場に赴く獄卒が居ると、その頃の地獄では有名になったものだ。

特に、肉体を持ったままというのが大きい。それ故に肉体が妖気を浴び変異して、どのような味になっているのか想像していた。

そんな折りに、フラリとやってきた。

飯にも獄卒だ。食うのはマズいだろう。味が気になる餌を前に、少し苦しかったが別のやり方で味わうのも悪くない、そう考え直そうとしていたら、いきなり本性に戻るように頼まれた。そう言う趣味なのかと思つたら毛繕いされただけだったのは忘れるに忘れられない。

絶世の美女に化けたというのに其方は無視なのだ。実に腹が立った。

「……………ねえ柳、さっきの言葉は本当？」

「さっきの？」

「私に食べられていいって言うのよ……………」

姐己の大きな口が柳を包む。牙が喉に触れる寸前で止まり姐己と柳の目が合う。

「本当だ。死を恐れるのは一度だけで十分。二度目は好きなように命を使う」

「ふうん……………なら、このまま食いちぎっても良いの？」

「好きなように生きる事を否定する気はねーよ。それがいい女なら」

「……………」

スツと口を離す姐己。人の姿に戻り一糸纏わぬ美女の姿になると服を着る。

「それじゃあね柳。またのご指名、お願いねえ」

「あ、柳さーん！ご飯行こー！」

柳が閻魔庁を歩いているとトテトテと白い犬が柳の足下に寄ってくる。

「シロか、悪いな。鬼灯様に呼ばれてるんだ」

「そっかー」

「鬼灯様、来ましたー」

柳が部屋に入ると書類を整理する一本角の鬼がいた。

「ああ、良く来ましたね柳さん」

「仕事ですか？」

「ええ。日本に墮天使の幹部コカビエルが侵入したようですね。しかも、まだまだ若輩の悪魔の領地に……一般人が犠牲にならないように監視に行くのでついてきてくだ

さい」

「了か——ん？あの、鬼灯様。それ、何処？」

「駒王町です」

座敷トリプル？

「はい傷薬。聞いたよ柳君、現世に行くんだってね？それも墮天使幹部が居る……気をつけてね」

ケラケラ陽気に笑う細目の男の名は白澤。中国妖怪の総大将であり、天界で薬屋をしている薬剤師でもある。あと女好き。

「ま、今の君なら大抵の敵は大丈夫だろうけどね」

「え？柳って人間ですよ？墮天使幹部は流石に危険なんじゃ」

そう言つて白澤の言葉に首を傾げる男は桃太郎。昔話に出てくる桃太郎本人だ。色々あつてここで働いている。

「人間と言えば人間だけど、変異してきてるからね。実際何十年も経つてのに柳君見た目変わつてないでしょ？」

「え？それ普通じゃ」

「柳君は肉体持ちだよ？本来なら肉体は成長するよ」

白澤の言うように、柳は数十年前から地獄に住んでいた。しかも肉体を持ったまま。それでも彼は年を取っていない。

「桃^{タオ}タロー君みたいにな生まれが特殊だったり金太郎みたい特別な肉体持ちなら話は違
うけど、人間つてのは靈的に未熟だからね。染まりやすいんだよ」

「染まりやすい?」

「人が鬼になることでも有名だし、あまりの怨念に恐れられ、鎮めるために神にされた靈
だっている」

「でもそれなら地獄は妖怪だらけになるんじゃない?」

「彼等は魂だよ?だから、受ける影響は感情だけ。神や悪靈にはなれても妖怪になれる
のは希だね。たまに自分の中の恨みだけで妖怪になるのもいるけど。これは清姫ちゃ
んなんかが有名じゃない?」

「因みに柳には妖怪化するほどの恨み辛みは存在しない。と、本人は言い張っている。
それでも柳は変質を始めている。」

「肉体に妖気が溜まると肉体が変異して、次に魂が引つ張られる。ほら、あの野郎だつて
肉体に妖気……鬼火が宿つて変異したでしょ?柳君は地獄料理に入ってる蛇とか怪鳥
とか三途の川の魚とか食べてるから、そこから妖気が溜まったんだね」

「それで変異したのか。あれ、じゃあ柳はどんな妖怪になるんです?鬼灯様は鬼火だか
ら鬼だけど、柳は魚とか蟹とか鳥とか蛇とか食ってますけど」

「妖気そのものが溜まつてる訳だしね。生者が成ると言ったら順当に鬼かなあ……」

やったね柳君、地獄にすみやすくなるよ」

「へえ……………」

「あ、でも童気を感じる……ひよつとしたらご先祖様に竜が居て、妖気を浴びて先祖帰りしてるのかも」

「マジですか」

俺は転生者である。名前は柳。

死んだら神に会うこともなく、何時の間にか鬼灯の冷徹の世界に転生した……が、死んで地獄に落ちたと最近まで思っていたがハイスクールD×Dが混じってた。

しかし、俺は鬼になるのか。あんま想像がつかないな。鬼灯様に聞いてみるか？

「「柳様〜」」

「ん?」

ふと聞こえてきた声に振り向くとやってきたのは三人の少女。白い髪に白い和服の少女と黒い髪に黒い和服の少女と黒い髪に蛇の模様が描かれた黒い着物の少女。

「現世行くんでしょ?」

「お土産欲しい」

「美味しいモノが良い」

名前は一子、二子、三子^{みこ}だ。最初は二人だったのだが何時の間にか三人目が増えてた。三子は鬼灯様より俺に懐き良く料理をせがんでくる。

「……………」

あれ、こいつひよつとしてオーフィスじゃね？

いや、うん。鬼灯の冷徹の世界だとずっと思ってたからあんま気にしなかったけど、ここがハイスクールD×Dの世界と混じってんならこいつ間違いないくオーフィスだよ。

「……ん、面白いや白澤様竜気が云々って、まさか」

「……………」

思い返すと此奴、良く蛇持つてきてたな。それでスープとかハンバーグとか唐揚げ作ってやったならなんか懐かれて……………あれが原因？面白いや姐己様んとこ通うのに節約したいからって、蛇料理ばっか食ってたな。

「……………」一応聞くけど、三子……………お前ってオーフィス？」

「？我は三子」

「あー、そうじゃなくて……………」

「無限の龍神、三子」

えっへんと胸を張る三子。三子が来たのは数年前だから、俺の妖怪化には関与してないと思うが、三子の力をここ数年ずっと食ってた訳か……………あれ、これ大丈夫？

てかおかしい、だって原作じゃオーフィスがロリツ娘になったの割と最近って言われてたじゃん。

「なあ、禍カオス・ブリケードの団って知ってるか？」

「?知らない」

そうか、少なくともこの世界にはないのか。良かった良かった。

「……………あ」

「今あつて言ったか」

三子はすーっと目を逸らす。

「我知らない。もう関係ない。我地獄の座敷わらし三号」

「誤魔化されると思ってたのかおい……………」

「え?柳さん知らなかったんですか?」

「鬼灯様知ってたの!?!」

「ええ、まあ……………あのあ——閻魔大王ですら気づいてましたが…まあ柳さんは初めて見ますからね。日本神話は基本的に寛容なんですよ。地獄と天国が分かれたのも外国を真似してですし、悪鬼である茶吉尼を神である宇迦御魂の側面として利用しましたからね。それに、他の神話が自分達が実は世界作ってないって事バレるの恐れて消し去った

恐竜の魂も普通に地獄で利用してますし」

「あー。言われてみれば……あれ、でも昔はキリスト教迫害とかしてたんですよね?」

「あれは信者達の暴走です。うちは余所と、特にキリスト教と違って勢力広げようとは思ってませんからね……で、信徒虐殺の負い目もあって領地を一部貸しているんですが……そろそろ本気で返却してもらわないとマジ面倒くせえ」

聖劍使いの神父

「なんかここ妙に浮遊霊多くないですか？」

本来日本神話において、幽霊はいない。一応怨霊などもいるがあれは妖怪に片足を突っ込んでいるので除外する。

幽霊がいないのは、地獄ができる前は死後魂はあの世に送られ、そこで何かを口にするのと黄泉から帰れなくなる。つまり黄泉戸契が行われるから。

地獄が出来てからはお迎え課が迎えに行くから。まあ、人材不足で回収できず、現世で幽霊が増えているのは事実だがそれにしたって多すぎる。

「妙ですね。この辺りで殺害による死者の報告はそれ程ないんですが……仕事してんのか悪魔共」

「あー……ひよつとしてあれじゃないですか？ほら、悪魔達は此方側が管理したことをバレないようにしてて、この世界から居なかつたことにしたから報告しなくて良いやーって……」

寿命や病死による死はお迎え課の茶吉尼が気づく。が、殺害、事故など健康状態からの死は感知できないらしい。だからかそういった死者の霊がチラホラ見かけたのだろ

う。そして、その割には失踪者や凶悪犯の注意がされた様子がない。

「困ったものですね。せめて事故死か失踪に見せていただかないと」

「それはまた何で？」

「実はこの街にはなかなか子を授かれなかった夫婦がいます。夫が身ごもった妻を見て死産、流産しないように祈ったんです。今時珍しいお百度参りで……祈られれば全てに応えるわけではありませんが、その夫婦は既に数回絶望を味わった。よって、その願いを叶えたのです」

「良い話ですね」

「さて、そんな夫婦がようやく授かった子供の記憶を、それも数年分を無かったことにされたら、本当に忘れられると思いますか？」

「……………」

鬼灯の言葉に固まる柳。

人の感情というのは、思いの外強い。時には呪いを生むほどに。人を化生に変化させるほどに。

「実は過去、似た事例がありましたね。その夫婦は自分の子供らしき年齢の子を攫い続けたんですよ。あの時の裁判は荒れました……情状酌量の余地ではありませんんですが、誘拐は裁かれるべきですし」

「そういうや転生悪魔の問題とかは？」

「そこも困るところなんですよね。日本人であっても、悪魔となると十字教の領分。オマケに、知られたくないことを知られたからか魂の所有権を絶対に譲ってきません」

「知られたくないこと？」

「転生の強制ですよ。とある猫の妖怪の霊曰く、娘達がまさにそれだったようです。保護を頼まりましたが片方は主殺し、片方は魔王の身内の眷属やってたんですよね」

はあ、とため息を吐く鬼灯。主、つまり貴族殺しの悪魔となれば保護するのは国際問題、魔王の身内の眷属もまたしかりだ。

「サタン様の頃は良かった。扱いやすいバカで……今はただのバカですからね」

「サタン？あれ、でも悪魔のトップって……」

「現在はルシファー、ベルゼブブ、レヴィアタン、アスモデウスの四人です。サタン様の死後、ベルゼブブがトップになろうとしたんですがまあ、色々あって……」

柳はその色々とやらが気になったが、不意に足を止める。鬼灯もまた足を止め扉を覗む。

「おやおやおんやあ？気づかれちゃいましたねえ。あ、こりや大変だ」

ヘラヘラ笑って現れたのは神父服姿の少年。その手には神々しい力を放つ剣が握られていた。

「見たところそちらの亀みたいな目のお兄さん、鬼いさんだね？俺には解っちゃうんだなあれが。つーわけでちよつと聖剣に切られよやあ！」

と、男はいきなり切りかかってきた。が、鬼灯はその剣を右手の人差し指と中指で挟んで止める。

「……………あれ？」

「ああ、一つ勘違いしてるようですが地獄の鬼は現世で悪さをする鬼と違い罪人を裁く存在で、聖なる力は効きませんよ。つまりこれはただの剣でしかありません」

そう言つてポキリと聖剣を折つた鬼灯は男の腹を殴りつけた。吹っ飛んだ男は塀にぶち当たり気絶した。

「……………あの、あれ捕まえときますか？」

「見たところ教会の人間、あるいははぐれか……………まあ取り敢えず神官なので大焼処（「殺生をすることで天に転生することができるといふ邪見を述べた者が落ちる）にでも送つておきましょう。キリスト教隣人^此全^等く愛さず異教徒なら何しても良いつて考える奴らだらけですし」

「この剣は？」

「ん？これ……………ああ、エクスカリバー（偽）ですね。アーサー王が妖精郷に返還した聖剣を真似て作られたあげく大戦の際折られた安物ですよ。とはいえ信仰を集めるのに

利用している一品でもありませんし、取り敢えず天界に送っておきましょう。いや、この気配は……この街にはどうやら教会の人間が居るようです。もしあつたならその時お渡ししましょう」

悪魔祓いの霊

「鬼灯様、見てください悪魔祓いの霊ですよ」

「これは珍しい。殉職すれば天界に連れて行かれるのに」

と、浮遊霊を見て眩く柳と鬼灯。

「どうやら日本人らしく、長い黒髪をしている。」

『——っ。君達は、僕が見えるのか？』

「ええ職業柄。見たところ幽霊歴数年目と言ったところのようですが、天界に連絡しましょうか？ウチでは大焼処に送らなくてはいけなくなりますし」

『天界？無理だ、僕は魂が消滅したことになるからね』

「……………詳しくお聞きしても？」

話を纏めるとこの幽霊、八重垣正臣は元々教会所属の正規の悪魔祓いだったらしい。が、悪魔と恋に落ち、悪魔と教会に肅正された。

「妙ですね。数年前、確かに大規模な聖力と魔力のぶつかり合いが確認されましたが……………」

「聖力と魔力？それってつまり、お互い同族の相手を殺そうとしたって事ですか？同じ日に？」

「手を組んでいたんでしょうね。珍しい」

『……………そうだ。僕は、彼女を守るために悪魔と教会と戦った』

領地を任されていた悪魔と言うことは貴族悪魔なのだろう。その悪魔を肅正するなら間違いなく同じ貴族。プライドの高い貴族が人間と協力したとは意外だったのか鬼灯がふむ、と顎に手を当てる。

「彼女の名は？」

『クレーリア・ベリアルです。相手は、違うみたいでした』

「ベリアル……………それ程名を気にする家ではありませんね。それに、他の家に命令できるほど、ましてや教会と組ませることが出来るほどの人望があるわけでもない」

「鬼灯様？」

「これは、下手したら魔王……………あるいは貴族派筆頭が関わっているかもしれないですね」
『なんだって？』

「……………」

鬼灯の見解は、クレーリア・ベリアルは貴族派にとつて知られたくない何かを知つてしまい肅正にかこつけ殺されたのではないかと言うものだ。

「とやうわけで、何か知りませんか柳さん」

「うえい!? 何で俺?」

「知ってそうですから。知ってますよね?」

「……………ハイ、シツテマス」

鬼灯に睨まれ目を逸らしながら返す柳。鬼灯としては睨んでいるつもりはないのだからが地獄最強の鬼神の威圧感は半端ない。

「実は、クレーリア・ベリアルは王の駒の存在について知ってしまいました」

「王の駒? それは悪魔の駒のことですか? しかし、悪魔の駒に王は…………」

「存在したんですよ。人によっては暴走するから、隠された。効果は使用者の力を何倍にも引き上げる。悪魔の行うレーティング・ゲーム…………その上位者の殆どが使用者です」

『つまりクレーリアは、貴族達の見栄のために殺されたって言うのか!?!』

「柳さんの言葉の通りならそうでしょうね」

『何で、そんなに冷静なんだ!』

「え、だって私クレーリアさんについて知りませんし」

『……………』

確かにその通りだけでも。

淡々と語る鬼灯に叫んだ八重垣は何とも言えぬ顔をする。

『……いや、すまない。君達に当たっても意味のないことだったな』

「お気になさらず。しかし、困りましたね証拠がない」

『彼は知っているのでは?』

「知っているだけでしよう。どうして知ってるかは、聞くつもりはありませんよ。柳さんも隠したいことはあるでしょう」

「……………ありがとうございます」

「いえ。それで、八重垣さんはどうします?生前が生前なので、地獄で保護しましょうか?」

「そういや十字教って、魂の送り迎えどうなってるんですか?」

「昔は善質な人間を天使が、悪人を悪魔がそれぞれの世界に連れて行っていました。時が経ち自動化され、死んだら即冥界に行つてエネルギー化したり天界に行つたりしてたんですが神の死後狂いが生じて現世は幽霊で溢れ始めました。八重垣さんはそのバグに巻き込まれたわけですね」

「『……………今さらつと神死んだって言わなかった?』」

転生の実態

「あ、しまったこれ一応機密だった」

『軽！神の死って、ええ！?!いや、そんな秘密を………ええー!』

鬼灯の言葉に叫ぶ八重垣。

そりやそうだ、生前信じ込まされたモノが、実は偽りだったと言われたのだから。

『それじゃあ、クレーリアどころか僕も、意味もなく殺されたのか!』

「まあ意味はあると思いますよ。聖書の神って術式作ることに關しては天才的で、最高傑作であるシステムっていうのは信仰心を動力源にしているので。悪魔と聖職者が結ばれて何も起きなかつたら神の存在を疑われますからね。まあ、悪魔と悪魔祓いが組んでいたなら上には内緒かもしれませんが」

『あの、ていうか本当に死んだの?』

「ええ。千年ほど前に。ほら、ジャンヌ・ダルクだつて天使と話してたでしょう?あれ、信仰心を集めるためにミカエル様が行った事なんですよ。その後ジャンヌ・ダルクに色々ばれるの恐れて魂をちやっちやつと回収してちやっちやつと転生させてました」

『知りたくなかつたそんな事実』

「あれでは死ぬ少し前の期間の記憶が、転生後も残りそうでしたね。火に焼かれる記憶……性格歪まなきや良いけど。まあ六百年も経てば代を経て精々自覚程度になつていくでしょうが性格が歪んだままかもしれませんね」

「……………彼奴本物だったのか」

鬼灯の言葉に遠い目をする柳。八重垣はジャンヌ・ダルクの転生者を名乗る知り合いでもいるのだろうかと思つたが、気にしないことにした。

「まあそれはどうでも良いので」

『良いんだ!?!』

「気にして口出ししてもややこしくなるだけなので」

「あー、で……………八重垣さんはどうします?」

『……………クレériaは……………』

「たぶんもう魂は消滅してるかと。聖剣で切られたんですよね? 残留思念ぐらいならあるかもしれませんが、さすがに其方は専門外なので」

『そう、か……………』

柳の言葉に八重垣は弱々しく笑みを浮かべる。疲れたような、諦めたような笑み。

その後鬼灯の紹介状を受け取り地獄に向かった八重垣。

「本当に聞かないんですか？俺が知ってる理由」

「柳さんが私に恩義を感じ、手伝ってくれているのは知っています。それに……」

「それに？」

「知ろうと思えば簡単に知れますからね。特に悪魔の連中は、最近霊を視る力の使い方を忘れて行っている。バレない密偵の作りたい放題です」

「視る力？」

鬼灯の言葉に首を傾げる柳。悪魔とはそもそもがオカルトだ、ならば普通に見えるのでは？と思ったが、確かに原作でも幽霊っぽいのがあまり視たことがない。あつて先ほどの八重垣か邪竜の霊だ。

「ええ。転生があることから解るように、魂の総量は変わりません。昨今の人口爆発は地獄に住んでいた古代生物、人間の都市開発による伐採された森林、そこに住んでいた小動物、大型動物、汚染された水に住んでた魚や微生物の魂ですね」

「虫にも五分の魂と言いますが微生物まで……てか、人間が自然を壊せば壊すほど人間が多く生まれるんですね。いやなサイクル。あれ？でもそれと悪魔に何の関係が？」
「悪魔も元は罪を犯した魂の転生体なんですよ。さっきの説明の通り、冥界にてエネルギー化し妊婦に宿り新たな命になる。しかしトップが四大魔王に代わってからは、魂の

回収が行われなくなっただんです」

「それはまた、何で？」

「面倒くさいから」

「真面目に働いてる日本の地獄のお迎え課の前で一週間土下座させたいですね」

「それに、彼等は無能な四人のせいであがっちゃいまして人間が悪魔の前世というのを認めたくないんですよ。そのせいで悪魔の冥界は今エネルギーがやたら不安定で……きつと魔力を持たない悪魔とか逆に異常な量の魔力を持った子供とか生まれますよ」

「あー……………」

鬼灯は全く、とため息を吐く。

「オマケに本来の歴史を結構ゆがめてますからね。サタン様を含めた悪魔って基本的に墮天使、神籍を失った土着神が主な幹部してたんですが、追い出したり闇討ちで封印したりして後からただの悪魔達が名乗りだしたんですよ。嫌気がさして出て行ったのが殆ですが、おかげでだいぶ弱体化したんですよ……何がしたかったんでしょう始まりの現悪魔世代」

「さあ？」

「こればかりは本当に解らない。光や聖書、聖水が効かなかった癖にわざわざ弱点にし

て、本当に何がしたいのだろうか？そのくせ自分達は至高の種族だなどと言っているようだし。

「まあ、それは向こうの問題ですしね。私達は私達の仕事をしましょう」

「どうする？こうなったら異教徒を脅してお金もらう？主も異教徒相手なら許してくれ
そうなの」

「寺を襲撃するか？それとも寶錢箱とやらを奪うか？」

「鬼灯様、十字教の言う「隣人」って、何ですかね？」

『同じ神を信仰する者達』ですよ。異教徒は人間じゃないから何をしても許されるのです。それと、彼女達は取り敢えず十一焰処（仏像、仏塔、寺舎などを破壊したり燃やしたりした者が落ちる地獄）にでも送ってやろうか」

「まあ流石に国際問題になりそうですが……」

「取り敢えずエクスカリバー（偽）の残骸を渡すとしましょう。すいま——」

「なあ、少し良いか」

「……………ん？」

フアミレスに集う和洋

「……………」

「……………」

兵藤一誠と匙元士郎は前の席に座る五人を見る。ウチ二人は、イツセーが探していた人物、つまりは教会のエクソシストなのだがウチ二人は知らない人だ。ゼノヴィア・クアルタと紫藤イリナを発見し、声をかけたタイミングで向こうも同様に彼女達に声をかけた。

その後背の高い男がイツセーを凝視し、なるほどというど何故か共に飯を食べることに。

「にや、にやふ……………はう……………」

そして何故か小猫はもう一人の男の膝の上で髪をとかされている。すごく気持ちよさそうで、イツセーは鼻血が出そうになるのを我慢している。

「うまいですね……………」

「柳さんは動物のブラッシングが趣味なんですよ。癒されるんだとか……………動物達も癖になつてせがむ子達が多くて」

「小猫ちゃんを動物扱い!？」

「動物園の人ですか？」

様々な動物に囲まれているらしい彼の日常を聞いて真っ先に動物園の飼育員を思い浮かべた小猫。残念ながら違うと返された。

「さりげなく皮膚をマッサージして皮膚の下の血行良くしてましたね……：獣医さん？」

「それもはずれ」

「そんな事してたんですか。やたら動物に人気だと思つたら……：今度教えてください」

「もちろん。痛覚が五倍になるツボとか教えましょうか？」

「良いですね。今度使ってみましょう」

「誰に?とは生憎聞ける者は居なかつた。」

「ああ、お気になさらず。我々も、こういつた靈的、宗教的な関係者です。申し遅れました、私、閻魔大王第一補佐官鬼灯と申します」

と、帽子を少しあげ角を見せる鬼灯にギョツとする一同。

「え、エンマ!?!閻魔ってあの閻魔か!?!」

「……………鬼」

「マジか……」

「……イリナ、エンマとは何だ？」

「え？ゼノヴィア知らないの？まあ、世界規模で見れば日本の地獄つてそこそこマイナーなものね」

その日本の地獄に住む鬼を前にマイナーとほざく脳天気な方がイリナだ。

「簡単に言うると地獄に住んでて人を虐める悪い妖怪よ」

「成る程。日本版の悪魔か」

「失礼ですね。我々は罪人の罪を罰する仕事について、現世にさまよう霊を連れて行くどちらかと言うと天使よりの存在ですよ」

「神々とも普通に仲良くやってるぜ」

「ふん。神々と言っても異教の神だろ」

「俺達からすりやそつちが異教……」

柳の言葉にピクリと眉根を寄せるゼノヴィア。布にくるまれた聖剣に触れようとした瞬間、鬼灯がパンと手を叩く。

「狂信者は気が短くていけない。まずは冷静に、話し合いはそれからです。兵藤さん、先にどうぞで」

「え？あ、はい……あれ、俺名乗りましたっけ？」

「アナタは火車さんが担当することになったので。その年でそれが決定するのは大変珍しく、覚えてました」

「は、はあ……?」

「……火車?」

イツセーは困惑気味に、小猫はあれ?と思案げに首を傾げた。

ちなみに火車とは裁判を受けるまでもなく地獄行きと決定した亡者を地獄に連れて行くお迎え課の化け猫である。

イツセーの話を纏めると、聖剣を壊したがっている友人が居るので聖剣探しに協力させてほしい。見返りは力を貸すことだ。

「教会から派遣された二人もそうですけど、あなた方自分の力を過信しすぎではありませんか?正直今回の件に墮天使幹部が関わっている以上ここにいる全員が足手まといレベルなんです」

「どうかな、私には切り札がある。最悪、相打ちに持つて行くつもりだ」

「だからそれが過信ですよ。向こうは数千年生きた墮天使幹部。力も戦闘経験もあなた方とは格が違う。相打ち?決死の覚悟で挑んで傷を付けられたらまあ偉業ですね」

「さつきから、言ってくれるな。あまり私を見くびらないことだ、常世の鬼」

と、その時イツセーが呼んだ木場祐斗と言う名の悪魔が現れた。教会側の回答は、ドラゴンの力を借りるなどとは言われていないという屁理屈紛いの了承だったのだ。

木場からはフリード・セルゼンというはぐれ悪魔祓いの情報が、対価に教会側からバルパー・ガリレイの情報が渡された。

「それで、君達が我々に声をかけたのは？用件があつたんだろ？」

「ああ、はい。これをミカエル様に返しといてください」

ゴトリと置かれた袋の口から覗くのは、折れた聖剣。

「……は？」

「昨夜突然襲いかかってきた男を返り討ちにしたら持つてたんですよ。うっかり破壊してしまいました」

「ええええ!!これ、教会が保有するエクスカリバーよ!!欠片とは言え最強の聖剣なのよ！」

「うっかり？うっかりだつて……？はは、僕はそんなモノのために、同士を殺されて、そんなもの相手にあんな苦戦を……？」

「木場！しつかりしろ！あんた、良くこのタイミングで出せるな！」

「え、だって私にはその人のトラウマとか過去とか関係ありません」

イツセーの叫びに鬼灯は何故私が気を使わなくては？と言いたげに首を傾げたの

だった。

その頃。

「遅いなーフリードの奴。何処まで行ったんだ全く。もうワシが聖劍使っちゃうぞー
……………うっ！」

バルパー・ガリレイ、聖劍の因子に耐えられず死亡。

「……………ふむ。まあ術式の書き置きはある。俺一人で十分か」

コカビエル

悪魔や教会組と別れ、予約していたホテルにチェックインした鬼灯と柳。

「では柳さん。頼みますよ」

「はい」

鬼灯の言葉に柳は巻物を取り出す。そこには大量の鳥の絵が描かれており、柳はふう、と息で紙面を撫でる。

すると紙面の鳥達がまるで巻物から独立していたかのようにずれ落ち本物の鳥のよう羽ばたいた。

「……………居ました。駒王学園で、ライン引き使って魔法陣描いてます」

「墮天使の幹部が？ シュールな光景ですね」

柳の報告に鬼灯はライン引きを使うコカビエルを想像する。

うん、シュールだ。

「それと、グレモリー眷属達が来ました。シトリー眷属達は周囲を結界で覆っています」
「シトリー眷属ですか……………まあ、数秒でも足止めするのは良い判断ですね。普通に挑んだら一瞬で死ぬでしょうし」

「そうなんですか?」

「コカビエルがその気なら。ですので足止めして魔王を呼んだ方が確実です。まあ魔王は魔王でもレヴィアタンは妹のこととなると外交官という事を忘れるアホなので今回は呼ばない方が良いでしょうけど、今回はルシファアの身内も居ますからね」

「……………そのルシファアの手を煩わせるわけにはいかないとか言ってるんですけど」
「行きますよ柳さん」

「コカビエル! バルパーは何処だ!?!」

駒王学園につくなり木場の第一声はそれだった。紙を見ながらライン引きを動かし
ていたコカビエルは顔を上げニヤリと笑った。

「来たか。たつた今、魔法陣も完成したところだ。バルパーだったか? 奴なら、死んだよ。だからこうして俺が自分で書いている」

「……………え?」

彼奴、今なんてった? バルパーが、死んだ? おい、それってつまり木場の復讐が……

「そんな、嘘だ!」

「嘘などつくか。彼奴はポックリ逝った。年のくせに無茶をするから。魂は俺が責任を持つて冥界に送ってやった。最期なんか満足気だったし、怨霊になることなく冥界の工

ネルギーになつたらうな」

「……………」

その場でひぎを突く木場。ずっと果たそうとしていた復讐が果たせなくなつたのだ。それも、仕方ないかもしれない。

「あ、これ三本用だった。二本の時は……………ここを消すのか」

そんな木場を無視してコカビエルの野郎は魔法陣の修正してやがる！

「何だ？ 一人、明らかに戦う気がないな」

「僕は、今まで何のために……………ずっと、皆のために……………」

「……………ああ、成る程。貴様はバルパーの被害者か」

コカビエルは気付いたようにニヤリと笑う。

「下らん。何が皆のために、だ……………死者は嘆きも苦しみもしない。そんなモノのために戦うなど実に馬鹿らしい」

「つ！ てめえ……………てめえに木場の何が解るってんだ！ 此奴は、仲間を殺されたんだぞ！ 理不尽にだ……………それを恨んで、憎んで何が悪いってんだ！」

「死者が何か与えてくれるのか？ 何もしてくれまい。それに縛られるなど実に馬鹿らしい。それより生きている奴を見ろ。そいつ等の命を、摘むのを想像しろ。楽しいぞ、自分が強いと実感するのは。あれは生きている者しか与えてくれぬ快樂だ」

楽しそうに笑うコカビエル。此奴、人を殺すことが快樂だつて言うのか！そんな事の為に俺達の街を、部長の領地を襲ったのか！

「よし、今度こそ出来た。ああ、そう言えばバルパーがこんなモノを持つてたな。お前の同士とやらの成れの果てだ。くれてやる。それを持つたら少しは俺が楽しめるよう気張れよ？」

鬼灯は結界の前で止まる。

「既に始まりましたか。まあ、町を破壊するほどの力は感じませんが……」

「あなた方は？ もしや、日本の？」

「あ、アポ取つてたんですね。彼奴等の反応からてつきり……」

「一応は貸してる領地ですからね。すいませんが、結界に穴をあけてもらつても？ 無理なら自分で空けますがそれだと結界が壊れるかも」

「え、何この人要求と脅迫同時にしてきた。あ、失礼しました。どうぞお通りください」
眼鏡の女性が言うど結界の一部に穴があく。

「ありがとね眼鏡ちゃん」

柳が礼を言つて中に入ると聖なるオーラと魔力を纏つた剣を持つ木場と全身からあ

ふれる魔力を放つ紅髪の女。その他が揃っていた。

「あ、何気に教会組揃ってる………鬼灯様？」

と、そんな一同を前に不適に笑うコカビエル。一触即発の空気の中鬼灯は紅髪の悪魔、リアス・グレモリーに近づく。

「すいません。ここの現領主のリアス・グレモリーさんで間違いありませんか？あ、柳さん良い機会なんで妖力の使い方覚えてください。ほら、的もありますし」

「え、あれ墮天使幹部………」

「鬼神になるなら堕ちた天使如き倒せないと」

「スパルタ!?なるとか言ったことないし………ああ、もう………やりますよ!どうせやらせるんでしょ!」

柳は叫ぶと構えをとる。

「ほう?カンフーか………」

「あの人手加減とか出来ないし、教えるの下手だから見様見真似だけだな」

「さてリアス・グレモリーさん。まず貴方に言いたいことが」

「あの、それよりコカビエルが………」

「あれは柳さんに任せます。それより言いたいことが」

「あの、だから………」

「黙って聞け」

「……………はい」

「ふはは！やるな人間！いや、この感覚、半魔か？」

「うお、つと……………」

「ち、獄卒と共に……………日本の鬼の血か？妖怪どもの上位種のくせに光による効力は期待
できん。ならば、質より量か」

「我々はあなた方に言つたはずです。死者が出たら報告をしろと。それなのに何故はぐ
れ悪魔、はぐれ悪魔祓い、堕天使に殺された事件が13件もあつたのですか？報告にな
いんですがね」

「じ、事後処理は此方で行つたので。借り受けているとは言え自分の領地。お任せする
のもあれかと思ひまして」

「志は立派ですが我々の目的は魂の回収です。それと、むやみやたらと記憶を消さない
てください。裁判の時大変なんですよ、本人が覚えがない、捏造だと言ひ張るし本人か
らすれば嘘ではないし」

「そ、そんな事私達に言われても」

「はい？そんな事の原因は貴方達なんですが？」

「ふん。地を這う虫では、この程度か」

「攻撃当たって死ぬのが怖くて空に逃げたくせに何を偉そうに」

「やすい挑発だな。そんな言葉では降りんぞ」

「降りてこないとこの魔法陣消すぞ」

「貴様！ それを書くのにどれだけかかったと思っっている！」

「とにかく賠償を払えとは言いません。今後このようなことが無いようにしてもらいたい。それと、貴方は仮にもこの街の管理者を名乗っているのだからくだらない見栄だの家族愛なんて明後日に放ってください」

「え、えつと……」

「魔王を呼ばなかったそうですネ？ 迷惑になるとか何とか……それよりもまずこの街と、ついでに我々地獄にも迷惑をかけることを先に考えていただきたい」

「……………自分達は魔王より上だと言いたいのかしら？」

「少なくともここは我々の管轄。貸してもらっている分際で我々より上だと言いたいのですか？」

「貴様、何だそのオーラは……!?!」

「おお、出せた……………」

「何者だ、貴様は一体何処の誰だ！」

「さつきから五月蠅い！」

「ぐはー！」

「ええ!？」

鬼灯がぶん投げた金棒はスピンを描きながらコカビエルの顔面にぶち当たった。吹っ飛ばされるコカビエルを前に呆然とする柳。

「さあ、今回はもう帰りますよ。コカビエル持ってきてください」

「連れてくんですかこれ？」

「この街で大量殺戮を行おうとしたんですから、日本で裁いたとしても罰は当たらないでしょう」

「ああー……じゃあ……」

鬼灯の言葉に柳はコカビエルの足を掴み引きずる。

「取り敢えず焦熱地獄の炎で燃やしましょう」

「うわ、えげつないですね」

「ところで彼って何がしたかったですか？聖剣の復活？」

「ああ、単純に戦争を起こす口実作りですよ。教会の至宝を墮天使が奪って魔王の身内を殺すっていうシナリオで」

「居ますよねえ。雨とかで試合が中止になると特に勝ってた訳でもないのにあのままなら自分達が勝ってたとか熱くなる人」

「それでいいのかな？ いや、解りやすいけど」

と、柳がうーんと唸っていると空から白い閃光が降りてきて、鬼灯に吹っ飛ばされた。『ヴァーリ！おいヴァーリしつかりしろ！くそ、だから言つたんだ！そいつは容赦なく大焦熱地獄の炎（豆粒サイズで地上全てを焼き尽くす焦熱地獄の炎より熱い）を平然と使うし俺達の口の中に屎泥処の泥（苦くて臭いウンコ）を突っ込んで来たんだぞ！此奴には、容赦という言葉がない！その上実行するだけの力を持つてる！』

「ああ、白龍皇ですか。懐かしい……………まあ良いか。帰りますよ」

「え、あれ放置？」

「ええ」

「……………」

地獄の兎

「俺行く必要あったかな？そりゃ、少しは説明とかしたけど今回の事件に関しちゃ大した活躍してない気がする」

「そんな事より我お腹すいた。ご飯ご飯。材料ある」

「はいはい。うお、映画とかのアナコンダ級……これで調理しろと？」

「楽しみ」

柳ははあ、とため息を吐いて蛇の首を切り落とす。ビチビチと動き絡みついてくる蛇の体を引き剥がし頭を放り捨てる。

切れ込みを入れて靴下を脱がすように皮を剥がし腹に切れ込みをいれ内臓を取り出し（以下省略

「出来たぞ」

「わーい、わーい」

無表情で万歳する三子。この辺りはあの座敷童子達に似てきた。

「ハンバーグに唐揚げ、生姜焼き、蛇カツ、蛇肉コロツケ………保存すりや暫く食い

つなげそうだが、これ全部今夜のぶんなんだろう？」

「とーぜん」

机を覆い尽くす量の料理を前に無表情のまま胸を張る三子。柳が肩をすくめながら両手を会わせると三子も真似をする。

「いただきます」

「……………柳様。命、肉をいただくというなら我言う必要ない気がする」

「調味料も野菜も水もガス代も俺だ」

「そうだった」

三子はそういうとまず唐揚げの皿に手を伸ばし、小さな口を大きく開けて皿を傾け中身を全部入れる。物理法則が仕事してない気がする。

そのまま口をモゴモゴ動かしゴクリと飲み込むと次の料理を手を伸ばす。柳も自分の分が無くならないウチに食べ始めることにした。

「むぐむぐ……………そういうや三子って普段何して過ごしてるんだ？ たまーに一子達と一緒にいないことあるよな？」

「お香姐さんのところ。ちっちゃいドラゴンになると鱗撫でてくれる」

「あー、あの人蛇好きだもんな」

「柳様は？」

「動物全般好きだよ。ただ、艶々よりモフモフが好きなんだ。たまーに恐竜や蛇を撫でに行くけど基本等活地獄で犬猫とか猿とかゴリラとかイエティとかの毛繕いしてる。一番気持ちいいのは姐己様。気い使ってくれてんのか毛繕いに行く時、香水つけないでくれるんだよ。ま、それでも良い匂いなんだが」

「二番は？」

「フレミツシユジャイアント。今度三子ももふりに行くか？」

「「行きたい行きたい」」

「増えた!」

食器を片付けようとしていた柳は何時の間にか部屋に侵入した一子と二子の姿に思わずギョツとする柳。落ちた皿は全て三子がキャッチした。

「ここだ。おーい、芥子ちゃん」

「おやこれは柳様。毛繕いは明後日では？」

「そうだよ。今日は別の用件、この前連れてきた新人は役に立ってるー？」

大叫喚地獄の一角で真っ白な体に耳の先端だけが黒く、櫛を持った兎が柳達を出迎えた。

「ええ、ハッピーちゃんいい子ですよ。飲み込みも早い。何処で見つけてきたんです？」

「元々は等活地獄の獄卒だったんだけど。人の良い主人が騙され金を貸し続けて到頭食うに困り預かってくれると言った友人に預けられ、そのまま国外に売られそうになった子だよ。名前の割にだいぶアンハッピーな子だけど芥子ちゃんと同じく嘘をつく政治家とか大つ嫌いみたいだね。呼べる？」

「はいはい。ハッピーちゃん！」

芥子が叫ぶとノソノソと大きな兎が現れた。人間の幼児ぐらいはある巨大な兎だ。

「世界最大の兎、フレミツシユジャイアントのハッピーだ。まず高い。すごく高い。餌代だって通常の倍以上。ぶっちゃけ何で飼うことにしたのか本兎も疑問に思っ——

——聞いてねーし」

「でかい」

「フワフワ」

「モフモフ」

三人仲良くハッピーを持ち上げる一子、二子、三子。

「くすぐったいですよ〜」

と、ホンワカ返すハッピー。とても獄卒とは思えない。

「この子ホンワカ」

「本当に獄卒？」

「罪人罰せる?」

「罰せるぞ、ほら例えば——」

一 子達の言葉に柳は地面を這う亡者を指さす。

「た、助けてくれ……私は確かに横領したけど、金は全て国民に——」

「渡すことなく私欲に使った。しかも高校時代に友人から預かった三毛猫が雄だと知ると売っぱらって友人には逃げられたと嘘の報告をした狸だ」

「おらあああ!このクソ狸があああ!」

「ペットにだつて意志はあるんだよド畜生めが!」

と、柳の言葉と同時に櫂で叩き体重を乗せたキツクを喰らわせる芥子とハッピー。亡者はあつと言う間にボロボロになった。

「ほら、地獄らしいだろ?」

「「うん」」

「向こうの主張なんて聞く必要ないしな。きつちり判決を受け、必要な期間罰を受けることが決まったんだし。そうだ、少し体験していいこう。鬼灯様からもらったモーニングハンマーは持ってきてるよな?」

「あ、柳さんここにいたんですか」

「鬼灯様。ご用で？」

「ええ。何でもあの後三大勢力が会談を開くらしいので、我々日本側からも使者を出すことにしました。絶対何か起きるので」

「使者？」

「まあ日本の神々も忙しいですし、取り敢えずニニギ様が行くことに………成ったんですがあのへタレだと不穏なので五道転輪王様に代わっていただきました……」

「仮にも天照大神の天孫に……いや、気持ちに分かりますけど」

神をも恐れぬとはきつと鬼灯の為にある言葉だろう。素直にそう思った。

「そこで護衛として私と柳さんが」

「俺必要ですかね？」

「必要になると思います。特に、三子さんとアナタは……」

「ああ、納得」

勢力会談開始

「久しぶりチュンさん」

「ん、ちゃんと頑張ってるか？」

少しカタコトの喋り方をするのは五道転輪王の第一補佐官で柳に格闘技、剪紙成兵術を教えた師匠でもある。

軽い気持ちで、その頃は中国拳法つて強そうだよなー、と年頃らしい感覚で教えを乞い弟子になった。結果は、まあ。怪力かつ加減を知らない僵尸が師匠なのだ。想像に難くない。

そもそも彼女は動きがそれらしいだけで実体は怪力任せのバーサーカー。そんなのと組み手してれば嫌でも体の動かし方を学ぶ。しかも当時はただの人間だったのだから。

「聞いたよ。墮天使幹部倒したて。干得好カンデハオ（えらいえらい）」

と、柳の頭を撫でるチュン。何気に近づく者が居ない中、こうして関わってくれた柳を何かと弟のように可愛がっている。まあ、投げ出さなかつた主な理由は投げ出したことで僵尸と、鬼神に狙われる可能性があつたからだ。何せ原作で、彼女から逃げ続け

ている神獣を知ってたし途中で投げ出したら鬼神に恐ろしい目にあわされるのが原作知識、此方に来てからの交友関係で知っていた。

「やお久しぶりです柳殿。そうしてみてもと本当に姉弟のようですね？」

「弟？柳弟か？なら一緒にあの浮気者せいばいするよ」

「いや、あの人一応薬剤の師匠だしなあ……ああ、でもうん。懲らしめた方がいいのは確かかも」

チユンの言葉に薬剤の先生の日常を思い出しうーんと唸る柳。鬼灯の日程があわず、自分の獄卒としての仕事の合間に習いに行ったが大抵女と話して殴られたり蹴られたり投げ飛ばされたり上手くいたりしていている人だ。

「まあ彼奴のことは置いておいて、そろそろ現世に向かいますよ」

「はい。あれ、鬼灯様何ですその書類」

「ああ、現世で紅髪の悪魔が神社の神聖なる気を押しのけてお参りしてきたと苦情があります。取り敢えず署名を纏めたものです」

「向こうからすりや敬意を払ってるつもりかもしれませんが当事者の神から迷惑ってますか」

「ええ。神仕達は怯えるし、本来神社に近づけぬ神籍を狙った良くないモノがよつてきたりしますからね」

原作じゃ軽い感じにかかれてたけど確かに神社側からすれば迷惑な話だ。

「仮にも余所に来るなら皮膚を刺すような痛み程度我慢して欲しいものです。どうせ魔王なんだからそこらの神社が放つ神聖なる気なんて芥子味噌塗ったくられた程度にしか感じないでしょうに」

「そういうのスルーする許可証とかないんすか?」

柳の原作知識によると、確か京都に行く際イツセー達が使っていたはずだが。

「ありますが使用許可を求める手紙はありませんでした」

「……………」

鬼灯の言葉に柳が呆れているとトテトテ足音が聞こえた。振り返ると和服に着替えた三子が居た。

三子はそのまま柳の背をよじ登り肩に足をかける。鬼灯の背には何時の間にか一子と二子が引っ付いていた。

「さて、行きますよ」

「やばいやばい彼奴が来る。マジヤバい」

「ああ、ルシファー……………サタン、何で死んだんだ。誰が勝手に殺しにいった私が殺される」

「ふ、2人ともどうしたんだい？」

「けっ！お前は良いよな彼奴の恐ろしさを知らねーんだから！」

「悪魔達は過去無かったことにしてますからねえ。ハゲろ畜生」

何故かサーゼクス様に文句を言う墮天使総督アザゼルと天使長ミカエル様。なんか2人ともすごい暗い。

《まあ、彼奴が来るからな》

ドライブが俺の脳内に話しかけてきた。彼奴って、前に来た鬼のことだよな？確か名前は鬼灯。

《彼奴は恐ろしい！いきなり地獄の黒い炎（滅茶苦茶熱い）を人の舌目掛けて飛ばしてくるし金剛鳥（嘴がダイヤ）の嘴を爪と指の隙間に入れてくるし！俺と白いのは終いには屎泥処の実験とか言われて鼻の穴に試作品突っ込まれたんだぞ！壺が割れた瞬間、鼻が……俺の鼻が！》

うおおおん！と泣き叫ぶドライブ。その人、そんなにヤバい人だったのか。

「ま、まあ落ち着いてくれよ2人とも。どうしたんだい本当に……」

「ふふふ。いつそ神の死と一緒に現悪魔の真相も話してしまおうか」

「やめとけ。悪魔と敵対してた俺らが言えば、それはそれで戦争になるぞ……ああ、でも彼奴が言ってくれりゃあ別かもな」

「……………ん？今なんかさりと凄いいこと言わなかったか？」

「あ、あの……………今、主が亡くなったと仰りませんでしたか？」

恐る恐る手を挙げるアーシア。ミカエル様はあ、と口を押さえアザゼルは肩を竦めた。

「どうせこの会談で言う内容だったんだろ？なら話しちまえよ。そっちの2人も知ってるみてーだしな」

そう言つてゼノヴィアとイリナを見ると2人とも目を閉じ俯いていた。悲痛そうな顔で、僅かに震えている。

「……………はい。先の大戦では、魔王の他に神も、亡くなっていたのです」

「そ、そんな……………」

アーシアは口元を押さえ、ペタンと膝を突く。今にも失神してしまいそうな程動揺して、その時だった

「いやーすいません、お待たせしてしまいましたかね？」

あははー、と軽い感じで入ってくる着物の男。イケメンだ！隣には何か綺麗な顔の女の子いるし。くそ、爆発しろ！

と、そのイケメンに続いて前回の鬼とその連れが現れる。鬼の方には2人、連れの方には1人女の子がくっついていた。娘か妹かな？大事な会議に連れてくるってどうな

んだ？

「あれ？何か取り込み中でした？」

「……………いえ、座ってください」

ミカエル様の言葉に座るイケメン。残りのメンツは後ろに控えた。

ヴァーリの奴が鬼をギラギラした目で見てる。しかし、あの女の子可愛いな。お友達になりたい。胸は部長長達に比べると無いけど……

「……………」

すんごい顔で睨まれた!?

三大勢力会議の襲撃者

会議はまずリアス・グレモリーの事件の説明から入った。

「ありがとうございますリマス・グレモリー殿。柳殿達の報告とも相違ないですね」

「ええ本当に。日本神話にいつさい連絡がなかったことまで忠実に話してくれてありがとうございます」

「——！」

鬼灯の言葉に、というか鬼灯が喋った事にビクリと震える天使長と墮天使総督。

「そういえばその件で日本神話からの抗議があつたんですよ」

と、五道転輪王が手を挙げる。ホンワカした五道転輪王にサーゼクスはどこかホツとしたような顔をした。睨んでくる鬼灯と違い、彼は優しそうだ。

「まず、リアス・グレモリーさんからコカビエル侵入の報告が無かつたことですね。墮天使側は報告してくれましたが悪魔からはありませんでしたよ？」

「それは、ここは我々悪魔の領地ですから。我々で解決するのが筋ですから」

「成る程責任感が強い方ですね」

「ありがとうございます」

「まあ責任感があるのと責任を果たせるのは別ですが」

鬼灯がボソリと呟くと五道転輪王の言葉に誇らしげにしていたリアスはピシリと固まる。

「そうですね。鬼灯殿の言うとおりで。責任感があるのは良いことですが、あくまで賃貸領地。大規模な事件はきちんと報告してください」

「まあまあ五道転輪王殿。リアスはまだ若い。大目に見てあげましょうよ、これから実績を積み成長するのですから」

「若い芽が育つのは嬉しいですよ」

「はい。リアた……リアスが成長し、悪魔の未来を支えてくれると思うと魔王として喜ばしく思います」

「ですけどその結果大勢の無辜の民が犠牲になるなら、成長の機会は別の機会にしたいだけだ」

五道転輪王がはつきり言い切るとリアスが再び固まる。

「それは……いや、すまない。貴方の言うとおりで。墮天使幹部と対峙して、生きていくれたことばかり喜んでいた。申し訳ない」

「いえいえ。家族が生きていればうれしいのは当然です。次からは兄としてではなく王として会談に望みましょう」

「ああ」

素直にうなづくサーゼクスにウンウンと微笑む五道転輪王。その様子にアザゼルとミカエルはホツとする。良かった、本気で良かった。悪魔と地獄に亀裂が入ったら巻き込まれる可能性も大いにあった。

「それとサーゼクス殿。実は神社から、貴方が魔力を放つて神域を汚したと苦情がありました。貴方自身も報告、連絡、相談はきっちりしていただきたい。言ってくれば許可証も出したのに」

「す、すまない……」

「それと悪魔の一人が山を吹き飛ばしたと報告も。日本の山は未だ神秘の隠れ家。動物や妖怪、木霊さん達から今後悪魔を日本の山で修行させるなど」

その言葉にイツセーは修行の際山一つ吹き飛ばしたのを思い出す。山は生命の宝庫だ。小動物、大型動物、そして植物と多くの命がある。それを跡形もなく吹き飛ばしたのは他でもない彼だ。そして山には多くの命があると同時に、神の持ち物。八百万の神々の家。そこを破壊したのだからそりや怒る。

「幸い貸してた場所ですから、定期的に環境を調整しに来る神は居なかったようですが……」

いたらイツセーは下手したら神殺しになっていたわけだ。神によっては跳ね返され

てたかもしれないが。

「それではそろそろ賠償の方に移りましょう。アザゼル殿からどうぞ」

「あ、ああ……俺は各勢力に神器研究の資料を……それと無理矢理転生させられた転生悪魔から悪魔の駒を抜く研究もしてたから殺さないでください勘弁してください」

と、鬼灯を見ながら震えるアザゼル。悪魔の駒を抜くという言葉にリアスが反応したが銀髪のメイドに睨まれ大人しく座る。今の彼女に発言権はない。

「それは助かります。此方で保護していた神器所有者達も、取り敢えず暴れたら気絶させる程度の対応しかできてなかったんですよね。それに家族に捨てられたとか力を利用されてるとかなら保護しやすいですね、キチンと家族として過ごしていると説明して同意をもらわなければ行けませんでしたし」

「同意してから連れて行くんですか？」

「人間には悪いですが、危険な神器だった場合は無理矢理の時もあります」

「きちんと管理されていればこんなことも起きないんですがね」

「う……」

「まあ確かに。神の死後システムの管理は大変でしょう」

「え、ええ！それはもう、私も頑張っているつもりなのですが……！」

「墮天使側と協力すれば上手いききそうではありますね。少なくとも神器システムに

関してなら何とかなるんじゃないかと」

ミカエルがアザゼルを見ると目を逸らされる。どうも神器の機能ばかり研究していたようだ。しかし、神器を抜き取る術式を始めて完成させたのは墮天使だったりする。

「まあ墮天使側は神器研究。天使側は、墮天使と協力して神器転移システムの解析もしくは神器を抜き取る際の危険の排除をお願いします」

「あの、墮天使と協力したら謀反が起きそうなんですが」

「そこはあなたの方が何とかしてください。人との恋に落ちただけの墮天使とかも神を裏切り欲にまみれた俗物という認識を刷り込んだのは貴方でしょう？ 下々の説得は上の責任ですよ」

「……………五道転輪王様って言う時って言いますよね」

「昔サタン様を前にして、『可愛い僵尸くれ』と言う頼みを普通に断ったお人ですからね。と言うかあの地獄の裁判官の一人ですし」

「そりゃ肝も据わってますか」

天使、墮天使とくれば最後は悪魔だ。今回は悪魔の領地で起こった事件だし、悪魔達は墮天使のように神器研究など、日本の地獄に役に立ちそうな成果はない。どんな内容が来るのだろうとゴクリと唾を飲む。

「駒王町の現領主リアス・グレモリーの領地剥奪ですかね」

「……………え、それだけで良いんですか？」

「彼女とその眷属は学生ですからね。卒業ぐらいはさせますよ」

「いや、てつきり悪魔を日本から追い出すのかと……………」

「しませんよ。キチンと管理してる方だっというらっしゃるんですから」

リアスの評価はリアスの評価。悪魔全体の評価ではない。流石人事の鬼、その辺りはきつちりしている。が、納得できない者も居たらしい。

「おい待てよ！それじゃあ部長がキチンと管理してないみたいじゃないか！」

「え、いやだっけ出来てませんよね？」

叫ぶのはイツセー。その言葉に鬼灯は何言っただ此奴と言いたげな顔をした。

「聞けば教会側からコカビエルの存在を聞いておきながら魔王を呼ばなかったとか。民を守る気がない領主に日本の地を管理されたくありませんし」

「部長がんな人の訳あるか！キチンとこの町を守ろうとしてた！何も知らない奴が勝手なこと言うんじゃないよ！」

「何も知らないからこそ客観的に。大戦を生き抜いた墮天使の幹部を自分達だけで倒せるところだったんですか？思ったとしたら過信しすぎで、思っただけなら町の住人巻き込んで心中するなと言いたいですね」

ギン、と音が聞こえてきそうな鬼灯の眼光にアザゼルとミカエルはあわわ、と抱き合

い震える。対面したイツセーとリアスは震えることすら出来ず顔を青くする。と、その時……………

「……………」

「鬼灯様？」

不意に鬼灯が窓の外を睨んだ。同時に、グレモリー眷属とシトリー眷属達の呼吸の音が止まる。

「これは、時間が止まっている？」

「俺達は平気ですけど……………」

「貴方は曲がりなりにも三子さんの眷属とも言える。私や五道転輪王様は神格持ちですし、チュンさんは五道転輪王様の最高傑作。一子さんと二子さんは建物の中では絶対的なルールを持つ座敷童子ですからね」

「成る程」

「しかし時間を止めるなんて、いったい何者でしょう」

「ツ！まさか、ギヤスパー!?!」

と、リアスが叫んだ。何気に彼女と彼女の騎士は動いていた。因みに教会側は2人そろって固まっている。

「ギヤスパーとは？」

「私の眷属よ。『フォービトウン・パロール・ビュ停止世界の邪眼』の所有者で、ハーフ吸血鬼」

「護衛は付けなかつたんですか？」

「まさか魔王と天使長、墮天使総督が居る場に攻める無謀な奴らがいるなんて思わなくて」

「あ、この人自分を客観視出来てない」

相手が自分より強いというのに挑みに行った者が、強者が揃う場が攻められるはずがないと思いきんでいるのを見て鬼灯は悪魔の将来が心配になった。

「あれ、何か魔法使いっぽい連中が来ましたよ」

「あれは現代のならず魔法使いですね。昔は悪魔と契約することで魔力を得ていたのですがその昔一人の天才が人のまま再現する術式を編み出したのです。因みにマリンスさんは旧魔法使いに属します」

「成る程。で、何で彼奴等既に捕まってるんですか？」

「入り口以外からはいると捕まるように晴明さんと道満法師にお願いしてたんです。絶対襲撃あるから」

旧魔王の血筋

「晴明さん達来てたんですか。言ってくれば挨拶したのに」

「ああ。そういえば柳さんあの人達に呪術学んでましたね。色々手を出して中々器用貧乏ですよ」

「まあ鬼灯様の手伝いするなら色々出来た方が良いでしょう……」

上空の魔法陣から現れ捕まり、新たに現れ捕まるを繰り返す魔法使い達を尻目に会話する柳と鬼灯。と、不意に鬼灯の携帯が鳴った。

「はい、もしもし……ああ。解りました」

鬼灯は携帯をしまうと外を見る。

「どうやら予想していたより数が多いようです。術式を編み直すのに時間がかかるようなので、少し時間を稼いで来ます。それと、件の吸血鬼は何処に？」

「あの旧校舎だ」

「成る程」

鬼灯は窓を開けると縁を蹴り旧校舎に突っ込んだ。

旧校舎から人が数人程吹っ飛ばされてきて、暫くすると女子制服を着込んだ少年を抱

えて戻ってきた。

「……………」

「それでは私は外の掃除を。此方に来たらお願いしますよチュンさん、柳さん」

「はい」

「あいなー。私達師弟に任せるよ」

鬼灯はチュンの言葉に頷くと外の魔法使い達をボコボコにし始めた。普通に捕縛されてた方が天国だったかもしれない。

「……………あれ？」

「あ、動いた」

と、漸く動き出したイツセー。曲がりなりにも赤龍帝と言う事だろう。

「あ、あれ……………ギヤスパー？何でここに……………」

「きゆう……………」

「お、おいしつかりしろギヤスパー！」

「ああ、成る程。気絶させた方が早いというあれか……………」

鬼灯が神器の暴走を止めた手段が解った柳は肩を竦める。と、その言葉に反応してイツセーが柳を睨んだ。

「てめえら、ギヤスパーに何しやがった！」

「いやだから気絶させたんだって。鬼灯様が」

「私の可愛い下僕に、よくもやってくれたわね」

「可愛いなら近くに置いてとけ。それが今回の事件の原因だろ」

「だからって傷つけて良いと思ってるのか！」

「え？うん、思ってるけど……」

イツセーの言葉に柳が困惑したように返すとイツセーは柳に掴みかかろうとして、
チュンに蹴り飛ばされた。

「イツセー！よくも——！」

「イツセー君！」

「やめないかリアス！」

魔力を迸らせたリアスと聖魔剣を生み出した木場は魔王の言葉に止まる。

「今は味方同士で争っている場合じゃない」

「ですが！」

「柳様……」

魔王の言葉に食い下がり、自分への敵意を収めようとしないうリアスを無視していると、三子が袖をクイクイ引つ張ってきた。しゃがむと耳の周りを手で隠し口を近づける。

「これ禍カオス・ブリケードの団？」

「間違いなく。まあ、頑張れ……」

「柳様知ってたの黙ってたこと言う」

「……………」

柳は三子の目をジッとみる。三子もその目を見返す。

「……………手柄を立てよう」

「ん」

「ここに今回の件の首謀者が現れる。せーの、で倒すぞ」

「解った」

三子はコクリと頷く。

「いきげ——」

「せー——」

「え？ぐはー！」

「——の」

会議室の床に魔法陣が浮かび上がった瞬間、柳と三子は駆け出す。そしてどや顔で現れた女性に向かって『せ』の時点で殴りかかった。息ぴったりの二つの拳は女性の腹に一瞬の差もなく当たり女性を校庭に吹っ飛ばした。

「おや?」

地面に頭からめり込んだ女性を見て鬼灯は首を傾げる。その手には今回最後の魔法使いの首が握られており、その魔法使いも次の瞬間光の縄に拘束された。

「ああ、術式を書き換え終えたのか。しかしこの女性には必要なかつたろうに……」

もはや動ける状態ではなさそうな女性を見て、もう少し角度を変えてみるかと足を掴む鬼灯。と、そこへ柳と三子がやってきた。

「鬼灯様。今回の襲撃の主犯です。俺と三子で倒しました。三子は抜け駆けしようとしたけど」

「我と柳様でワンパンだった。柳様抜け駆けしようとしたけど」

「ふむ……」

なら取り敢えずもう少し嚴重に縛り付けておこうとした時、カランと何かが落ちる。

「——!」

それは蛇の入った小瓶だ。柳と三子はソーツとその場から去ろうとする。小瓶を拾った鬼灯がそれを三子に向かって投げると中の蛇はガラスをすり抜け三子に吸収された。

「三子さん、柳さん。フンコロガシ屎泥課一週間勤務……おつと」

鬼灯の言葉に柳と三子が同時にうなだれるとその頭上を通過して魔力の固まりが飛

んでくる。鬼灯がそれを撃ち返すと上空にいたヴァーリが弾く。

「流石だな。死角を突いたのに、反応するか」

「どういうつもりですかヴァーリさん」

『やめろヴァーリ！地獄に落ちるぞ！本物の地獄はなあ、地獄じゃなくて彼奴を相手にすることだぞ！』

「ふっ。地獄、か……二天龍のお前がそこまで言う相手だ。挑まぬ訳には行かないな」

と、その瞬間には鬼灯が目の前にいた。

「くっ！」

『Divide!!!』

半減した瞬間鎧の宝玉が全て砕け散りエネルギーを排出する翼が暴発し、鬼灯がヴァーリを吹っ飛ばした。

そしてそこに中華風の鎧を着た男が現れた。

「ヴァーリ、迎えに来たぜい………っておいどうした!？」

「おや新しい人が。まあとっつかまえば同じか」

「ツ！まさか此奴、爺の言ってた敵に回しちゃ行けねー常世の鬼神か!？」

と、男はヴァーリを抱えると逃げようとする。当然追おうとする鬼灯。が……

「こ、の……なめるなあああ！」

三子と柳の拳を食らい気絶していた女が目を覚まし大量の水を放つ。鬼灯が拳を振るった拳圧で水を吹き飛ばす。ヴァーリ達はその間に逃げた。

「つく、拘束を解きなさい！私は真なる魔王、レヴィアタンの末え……ぐげ！」

何か訴えようとした女性の顔面に鬼灯の金棒の先端がめり込む。

「何が真なる魔王ですか！貴方達、ベルゼブブさんが一人では纏めきれないと選んだ四天王の末裔でしょう。ああ、そういえばあなた方の祖先は彼奴が過労死した途端魔王を名乗り始めたんですつけ」

「な、何を言ってる……ぐへ！」

「しかもマモンがサタン様の旧名を名乗って自分はサタン様と同等などと言い出す始末。そのくせやったことは過去の改竄と我々への迷惑」

「いたーやめ、ちょ……助け——！」

ズンズンと何度も金棒の先端を顔に叩き付ける鬼灯。三子は無表情で柳の後ろに隠れグイグイ柳を前に押し出した。

「魔王を名乗るなら王らしく、統治をして欲しかったものです」

「ぐべえ！」

トドメに腹を踏みつけ気絶させる鬼灯。そのままクルリと振り返り柳達と三大勢力を見る。

「では我々はここで帰ります。墮天使は裏切り者を出した責任。悪魔は騒動の元凶を監視もせず放置していた責任。キツチリ取ってもらいますからね」

「では皆さん。また何時か」

五道転輪王が優しい笑みを浮かべるが、誰一人安心できた者は居ない。チュンは五道転輪王を担ぐと窓から飛び降りて鬼灯達の後を追った。

「おれ、会談から戻ったら総督辞めるわ」

「殺すぞ。逃げるのは、返って逆効果かと」

「お前今めっちゃドスの利いた声で殺すとか言わなかった？」

情報開示

「や、やっと一週間……終わった」

「鼻が死んだ」

ヨロヨロと閻魔殿を歩く三子と柳。ついさつきまでフンコロガシ屎泥課に居たのだ。フンコロガシ達が何気に優しい虫達だったのがさらに心を削った。何せ本人達はさつさと出て行きたいと思っていたのだから。

「大丈夫？俺臭くないよね？」

「お風呂行く」

「だな……」

2人仲良く閻魔殿の中にある温泉に行き、柳は肌が少し痛くなるまで洗った。三子は三子で何度か脱皮して皮を捨てていた。

「ずっ……」

「柳様も覚えればいい」

「俺そこまで人間やめてんの？」

「………まだ無理」

無理なのか、と呟き温泉に浸かる柳。三子もその膝の上に座り背を柳の胸に預ける。

「…………ふー」

やはり温泉は最高だな、と思いつながら柳はため息を吐いた。しかし、これは暫く姐己の下に通えそうにないな。やはり早急に脱皮を覚えるべきだろうか？

「そういや三子、お前はやった蛇の回収とか出来ねーの？」

「無理。あれ我から離れてほしいぶ経ってる。繋がりが薄い」

「そうか……………」

ある程度近づかないと回収できないと。まあ三子が現れた年代から考えても、確かに仕方ないのかもしれない。と言うかそもそも、無限たる三子は切り離れた一部を戻そうとかいっさい考えてなかった可能性大だ。適当に触れば勝手に戻るとかそういうった仕組みだったのかもしれない。

「一週間お疲れさまでした」

鬼灯の劳いの言葉に本当にな、と内心想う2人。が、顔には出さない。三子は元々顔に出ない。

「さて、早速で悪いんですが禍の団の構成メンバーについて教えてください。お二人はご存じですよね？」

「ええ、まあ」

「我忘れた。いちいち覚えてない」

「……………禍の団は魔法使い派、英雄派、ヴァーリチーム……………それと前回の旧魔王派。本人達曰く真魔王派に分かれています」

とはいえ柳からすればもう何十年も前の記憶だ。そもそも友人の居なかつた柳は家庭環境もあれだった為、家に帰らないために図書館や古本屋などで時間つぶしに読んでいただけ。そこまで興味があつた訳でもないし、主要人物とどんな組織があつた、程度しか覚えていない。名前を聞いたり見たりすれば思い出せるだろうが。

「取り敢えず旧魔王の血筋は全部入つてた気がします」

「成る程。魔法使い派は？」

「すいません。詳しくなくて……………取り敢えず良い年して喋り方がぶりっこぶってるゴスロリ女が居たような……………」

「……………ああ。ヴァルプルガさんですなそれ」

「そーいやそんな名前だった。と言うかそれで伝わると言うことはそう思っている者も居ると言うことか。」

「英雄派は確かりーダーが……………曹操？」

「ん。そう……………両親に変な組織に売られて、その組織が我のところ来た。でも我、その辺

から地獄に來たから詳しく知らない」

「柳さんは？」

「ジャンヌ・ダルクと……ええつと、メガネとマッチョと三刀流が居たような気が」

「ロロノア・ゾロでも居るんですか？それで、その英雄派の目的は？」

「英雄の魂受け継いでたり血を引いてたりするから人外の悪魔、天使、墮天使、神々を倒して俺達も英雄になろうって思ってる奴らだったような……」

「その人達魂の輪廻のシステム壊す気満々じゃないですか。生と死の入り混じった混沌の世を作った大魔王にでもなりたいんじゃないか？」

確かに、こうして死後の世界がある以上、死んだ後の魂は現世にはいけないという事だ。實際悪さをする悪霊とか居るし。そのあの世に住む悪魔、死神、鬼などを絶滅させれば当然世界は混沌となる。

「あ、いや……まさかそこに神として君臨する気でしょうか？」

「そういえば曹操、神滅具の槍もつてた。あれ、中に聖書の神の意志ある」

「となれば要注意ですね」

と、英雄派の危険度を上方修正する鬼灯。仮に考えなしの馬鹿だとしても、どのみち世界を壊そうとしているのだから危険度は魔王に返り咲きたいだけの四天王の子孫より高い。

「ヴァーリチームについては、三子さんは流石に知りませんか？」

「ん。知らない」

「確かヴァーリ・ルシファア、孫悟空の子孫、メガネ、魔女、猫……あ、そうだ。その猫藤舞さんの娘さんですよ」

「そうですか。テロリストに……解りました。覚えているのは以上ですか？」

「えっと、あ……あ、そういやリゼヴィム・リヴァン・ルシファアも居たかな。旧魔王派とは別派閥で」

「え、彼なら今地獄に居ますよ？」

「……………え？」

地獄のリゼヴィム

リリスという悪魔がいる。

元々は聖書における原初の女であり、騎乗位どっちが上か下かかで原初の男アダムと喧嘩して、神に悪とされ楽園から追い出され、悪魔となった女。

その後数々の悪魔と交わり多くの悪魔を生み出した女の大悪魔だ。ここまでが本来のリリス。

そしてその後、浮気を許すという条件の下ベルゼブブと婚約し、ハデスと食事したり魔女から変なクスリ貰ったりする。これが鬼灯の冷徹の設定。

息子を生んだ後、前ルシファーによる術式と儀式で「初代」と呼ばれる上級悪魔たちを産み出したが、無茶な実験の副作用で醜悪な肉塊の状態になってしまう。

これがハイスクールD×Dの設定だったような気がする。

柳は記憶を何とか絞り出し、鬼灯に尋ねる。

「因みにリリス様と誰の子ですか？」

「ルシファーを名乗り始めたマモンの子です。彼奴とは結局子が出来なかったんですよ……」

「ん？じゃあ旧ベルゼブブって……？」

「リリスさんと夫婦関係だったことを知っているんですか。旧魔王のベルゼブブは養子ですよ。仕事が増え、プライベートも減り、しかしまた上を失うことを恐れた周りに催促され養子を取ったんです」

「……………」

何かもう、旧魔王派、何というか……………うん。

まあそれでも、一応高い力を持つ悪魔の血は引いているのだろう。柳は取り敢えず魔王の血筋であると思うことにした。負けてるけどね。

「因みに現在フンコロガシ屎泥課で働いています。まあ、お二人が行った材料集めの場ではなくその奥、より臭いを追求した研究所ですが」

「何でそんなところに!?!」

「元々は息子に『子供の才能が怖くて付き合い方が解らない？夕日の中殴り合え』と、暴力を促したとして刑罰を与えようと思ったのですが何分悪魔の王の一人の血族。取り敢えずフンコロガシ屎泥課に送ったのですが、自分の作ったウ○コの出来で苦しむ亡者を見るのが楽しかったらしくてそこに就職しました。一部の獄卒達からは畏怖と敬意を持って『ウ○コ潜り』と呼ばれています」

それ絶対畏怖と軽蔑だ、と三子と柳は思った。

「おーい鬼灯様、俺を呼ぶなんてめつずらしい事もあつたもんだねえ！見てくれこれ最新版の屎泥！ふたを開ければこころ一带が無人になること間ちが——！！」

ドゴオ！と鬼灯の金棒が銀髪 of 男の顔面を捉え、男は吹っ飛ばされていった。持っていた瓶は割れないように配慮されているのかゴムに包まれておりポトツと虚しく落ちた。

「持つてくるなど何時も言っているでしょう！」

「さーせん。俺アンタに怒られるのが大好きなもんで。何つって、本当は人を怒らせるのが好きなのさ！死なない程度でだけどね！」

ケラケラ笑った男は三子と柳に気付き、ん？と2人を見る。2人はそつと距離を取る。

「おやおやおやまあまあ！まさか噂の生きた人間君かい？めつずらしいねえ！たか君以来じゃね？あ、たか君つてのは篁の事ね。彼奴も一応地獄の飯食つてたけど短期間かつ本人自身生成りの才能ないから妖怪にならんかったけどね。あ、俺つちりゼヴィム！ルシファアの子だよん。ま、ママンから聞いた話によると本当はマモンらしいけどね。いやしかしあのクソおやじ強欲だよなあ。本物の魔王の昔の名を欲しがるんだもんよ！」

「早い早い！情報量が多すぎる！笹さんが何だつて？」

「そうそうたか君と言えば美人の嫁さん持つててさあ？俺も誰か嫁見つけたいんだけど
仕事先のせいで出会いがなく——ぐへ！」

リゼヴィムは鬼灯のビンタに吹き飛んだ。

「失敬失敬。ここじゃ俺ちゃんを魔王の子として崇める奴とかいないからさあ。普通に
接してくれる奴らが多くてついお喋りになっちまって」

パンパンと埃を払いながら立ち上がるリゼヴィム。ニヤリと笑った後、鏡を取り出し
少し違う表情でニヤリと笑う。

「俺はリゼヴィム・リヴァン・ルシファー！フンコロガシ屎泥課の「ウ○コ潜り」たあ俺
の事よ！」

「……………臭い」

「ああ、消臭剤ぶちまけたみたいなお臭いがする」

三子は鼻を押さええ柳の後ろに隠れる。リゼヴィムからは、くどいほどのフローラルな
臭いがする。くどすぎて最早悪臭の域だ。

「ん？でもウ○コの臭いよりはましだろ？俺毎回出る時に消臭剤で満たした浴槽に五分
は浸かるのよね」

そりゃここまで臭くなるわけだ。まあ確かに糞尿の臭いよりはマシかもしれない。

「ところで、何で地獄に？」

「ああ。俺っち戦争終わると同時にクソおやじに肉塊にされたママンを連れて地獄に来たんよ。ママンが言ってたからねえ、日本の地獄は世界中の神話が不可侵にする程って聞いてたからさ」

「その辺はハイDなのか……」

「ママンは今治療中だぜ」

「まあ、旧魔王派の襲撃の責任として魔王の地位と財産で集められるだけフェニックスの涙と血を受け取ったので、これも試してみしよう」

「……お、マジで!?もう人型には戻ってるしそれで目覚めるかもなー!」

「……………」

嬉しそうにするリゼヴィムを横に、柳はん?と首を傾げる。母親が目覚めない、何か似たようなキャラが居たような。

「目覚めたらお前にも紹介するぜ。ママン男が好きだからなあ……あの偏屈なハーデスとも食事したことあるんだぜ、すごくね?」

「まあハーデスさんって逸話的に考えて面食いでしようからね」

「会ったことは無いんですか?」

「ありますがその特別に女性を連れていたわけでは無いので」

会いはしたのか。やっぱりこの人凄いな、と思った柳。

「あとなんか極東の鬼の力を見せてみよとか言って模擬戦をすることになったんですが、時間もなかったので死神全員同時に相手にしました。しかし数も数なので手加減忘れて全員全治一ヶ月ほどの怪我をさせてしまいました、あれは苦い思い出です」

鬼灯の言葉にリゼヴィムは腹を抱えてゲラゲラ大笑いしていた。

日本の夏

チリリーンと風鈴が涼しげになる。

ミーンミーンと響く蟬の音が、日本の夏を感じさせる。

「あー……………ん」

シヤクリシヤクリと瑞々しい西瓜を咀嚼する音が鳴る。

本殿の縁側に座る黒い着物を着た幼女と、黒い洋装に背中に鬼灯のマークを付けた男性。柳と三子だ。

「……………夏」

「夏だなあ」

「こゝは現世の駒王町。さて、時間を少し巻き戻そう。

「と言うわけでお前等の監視者兼顧問になった鬼火^{きび}柳だ。よろしく」

「訳が解らないのだけど」

「ん？だから、お前領主から外されたろ？でも卒業までは通う……………だからその監視。あ

あ、ちなみに領主は神社に戻ってきた土地神がやるから安心してくれ」

オカルト研究部に突然やってきた柳の言葉にリアス・グレモリーは眉根を寄せる。確かに会談中そんな事を言っていたが、本気だったとは。しかも事前の打ち合わせもなく。

「いきなりすぎないかしら？」

「とは言ってもな。そちらも何の報告もなしにこの町の住民を金で引つ越させたあげく無断で魔力の使用を行ったろ？土地神のイチヨウさんカンカンだったぞ。あ、ちなみにイチヨウさんつてのは安産の神ね」

「いえ、だから……」

「本来は神社に住んでいた姫島朱乃に話を通すはずが引つ越したことに關して何の報告もなかったしな。しかも調べてみれば男の家に入り浸つて神社の管理もしてない始末。俺と三子と土地神の最初の仕事は神社の掃除だった。こんなこと初めてだと文句言われた」

イチヨウのグチグチした文句は耳に残っている。しかも相手が安産の加護を与えた夫婦の息子で、さらにその息子の歩んだ人生に頭を悩ませる始末。しばらく一人でいたいと社に閉じこもってしまった。

「まあそう言うわけで今あそこは神聖な場だ。お前等は近づかん方がいいよ。あ、一応私物は送つとした」

鞭とか鞭とか鞭とか。三子の教育に悪そうなモノは全て送った。イチヨウが首を傾げていたので説明せずにダンボールにつめた。

「しっかし教師つてのは大変だな。保護者の相手……原因はあの三人だけど……」

思い出すのはメガネとハゲと赤い龍。

女子更衣室を覗こうと木を登っているのが見えたので木から蹴り落とした。その後親御さん呼び出したら校長が大事にするのはあまり、とか言ってきたので被害者の女子生徒達に軽くすませて良いか聞いたらそれが保護者に伝わりどういいう教育を云々言われた。新任だから柳には関係ないと言いたかったが、言ったところでさらにキーキー騒ぐことだろう。

因みに変態三人の家にも親が文句を言いに来て、変態三人が親を巻き込むじゃねー！と叫んだが目撃者全員がじゃあ迷惑かけるような事するなよと思つた。あれ以来、覗きなどの変態行為は行っていない。

校長が文句を言つてクビにしようとしてきたが、イチヨウが土地神パワーで不運を届けた。と言うか保身で性犯罪を放置してたのだから教育委員会にバラせば普通にクビになった。

「頑張り頑張り」

「ありがとよ……ていうかお前、学校に付いてくるな。俺子持ちセンサーとか呼ばれてんだぞ。後あのメガネがお前を見る目はヤバイ。学校は危険だ」

「まあまあ柳殿。三子殿を害せる者などそうはいまいよ……」

「お、サンキュー」

奥から塩を持ってやってきた銀髪に銀杏の葉の髪飾りをした女性の名はイチヨウ。八百万の神の一柱にして本来は木の神だったのだが木霊憑き故に多くの実を落とす銀杏を何時しか子宝を与える神として崇め、安産祈願の神になった女神だ。

因みに柳が弁当忘れると持ってきてくれる。

「確かに三子は強いけど、純粹だからなあ。それにつけ込んで妙な事しそうな奴が居るんだよ。既に衆合地獄行き決定してるけど、その中でも悪見処に落ちる可能性が高いな。でも彼奴絶対将来独身だよな？その辺はどうなるんだろ」

悪見処。他人の子供を犯した者が落ちる地獄。自分自身の子供が陰部から串刺しになる様子を見せられ、その上で罪人の肛門に熱した銅を注いで肉体的苦痛も与える。もちろんこの子どもは幻覚だが子供が居なかった場合はどうなるのだろうか？

「この辺りは鬼灯様に報告しておくか。もしもの可能性で結婚できる可能性も、まあ0ではないし……限りなく0ではあるけど」

その頃の墮天使。

「良いですか皆さん。一日でも早く完成させるのです！解りましたね！」

シエムハザがアザゼルから随時送られてくるシステムの神器定着システムを研究者達と共同で解析していき、神器をリスクなしに抜き取る術式の完成を急いでいた。

「よく聞いてください。私は鬼灯殿に会ったのは、一度だけ。しかし忘れもしない。私はあの人を敵に回さないためならアザゼルの死なない程度に痛めつけられる！」

顔を青くして震えるシエムハザ。それが鬼灯なる人物を知らぬ一同にも恐怖を与え、その三日後術式は完成した。

アザゼルは即座に駒王学園で先生してくると逃げ出し墮天使達の怒りを買った。

「……………んー……………こかな？」

「チュン、先程から何をしていますのですか？」

五道転輪王は最後の裁判官だけあり、基本的に亡者が来ることは少ない。その空いた時間、チュンはブーツとしていることが多かったのだが今は本を読みながら何やら体を動かしている。

「私氣づいたよ。柳の師匠なのに拳法柳より下手。力任せね」

「はあ、なる程?」

「だから一から学び直すよ」

チユンが読んでいるのは格闘技の指南書だった。八極拳、螻蛄拳、虎牙拳、少林拳など様々な。

「……あの浮気者で威力試してくるよ」

「晩ご飯までには帰るんですよ」

その日天国では人型のまま空を舞う神獣の姿が目撃されたとか。

「——っ!何か悪寒が……」

現世にて悪寒を感じ跳ね起きる柳。周囲を見渡す、特に何も無い。クーラーでもかけ過ぎたのだろうか? いや、これは何というか、嫌な予感がする。例えるなら魔王が魔王を倒せるだけの力を持つ聖剣の所有者に選ばれたような、既に強い何かさらさらに強くなつてしかもそれが自分に実害を及ぼすような悪寒。

「柳殿、電話だ」

「ん、電話?」

と、そこへやってきたイチョウが柳に電話を渡す。

『鬼火先生!部長とアジアがちっちゃ——』

ガチャン

「良いのか？お主の生徒だろ？」

「間違い電話だった」

「そうなのか？」

「ちよつと仕事ができた」

「仕事？」

「無許可でリバウンドもありえる術使ったあげく失敗したバカ共にや、反省文と術をキチンと使えるように練習させる。とりあえずこの『好きな相手がこむら返り／自分がこむら返り』になる術と、『昨晚同じ布団で寝た相手が便意はないのに腹痛／一日数回唐突に便意が訪れるも何も出ない』とかをやらせるか『虫歯になる／虫歯のような痛みが丸一日続く』もありだな」

「成功しても失敗しても嫌じゃな……しかし、子供になつて、とか言っておつたぞ？」
「だから？」

「…………お主は立派な鬼灯殿の部下だよ」

新しい任務

「イチヨウ、墮天使総督から町の滞在許可願いが来てるぞ」

柳は各方面から来る手紙の整理をしていると、一つだけ他のと異なる封筒を見つけた。

他のは余所の土地神から来る手紙なので和風だが、それだけは洋風。しかも黒い。そして墮天使のマーク。中身を確認すると駒王学園で教師をやりたいと言うものだった。

「柳が決めるのではないのか？」

「俺はあくまで監視だからな。土地神はイチヨウ……俺としては来てくれると助かる。ほら、うち爆弾が二つもあるから」

神殺しの神器持ちに、潜在能力故に三勢力のトップ程度なら、暴走し、時間をかければ停止できる神器持ちの吸血鬼。正直言うところの2人はさっさと追い出したかったが、余所で暴走されるのも困りものだ。アザゼルなら神器について詳しいし適任であるだろう。

「ふむ。余計な発明をしないなら、確かに受け入れた方がいいかもしれない……」

「んじゃ、そこらも含めて鬼灯様に現状を報告、相談してくる。後帰り遅くなるかも」

「何だ？そこまで話すのか？」

「いや、会いたい人が居るんでね」

「成る程。まあ暴走されたり、殺して別の誰かに転移して、そいつに敵対されるよりはマシですね。解りました。天照大神には私から。許可が下りたら連絡します」

「はい」

「しかし……………」

報告書をみた鬼灯は眉根を寄せる。

「無断で術使うとか何考えてるんでしょうねこの人達。しかも失敗した際暴走付き。これ、周囲に影響出るタイプだった場合どうするつもりだったんでしょう？」

「記憶消して終わりでしょ。日本神話は隠れてはいるけどバレても特に気にしないし」

実際に、お盆時は百鬼夜行が目撃されたりしているし。

「ああ、それと。今度冥界に行ってきたください」

「え、俺がですか？」

と、首を傾げる柳。

「こういうのはつきり鬼灯とかが行くものだと思っていた。

「仕事がありますからね。私は」

「……………そのために俺を現世に送りましたか？」

「はい。これで何時でも仕事できるでしょう？今回も五道転輪王様が出ます」

「最後の裁判官ですものね」

「大国主様も行くかと仰ってましたが、あの人連れてくと魔王と関係持ちそうで」

「日本の浮気王セウクスですもんね」

まあギリシャと違い、被害が出てないだけ良いのか？いや、しかしギリシャの主神と
言い日本の国作りの王と言ひ、浮気者多いな神話。

「そういえばチュンさん、何やら張り切ってましたよ。新しい技教えるんだって」

「新しい技？チュンさん基本的に怪力にものを言わせたなんちゃって拳法じゃないですか」

「三子く、俺ちよつと衆合花街に行ってくるけど、どうする？ヤカンカンに行くか？」

「ううん。我、一子と二子と遊ぶ」

「鬼ゴツコ」

「その後隠れん坊。久し振りだから三子鬼」

「逃ニゲげろー」

「待てー」

三人は仲良く壁を走りながらあつと言う間に見えなくなった。子供たちが居なくなったので柳は懐から煙管を取り出し火をつける。

煙を吸い口の中に溜め、味わい、吐き出す。

「さて、今日は都合がつくかね？」

「お、よお(い)……ん？」

姐己の店に向かうと何やら落ち込んでいる檜を見つけた。普段飄々としている檜が落ち込むなど珍しい。隣で小判が毛繕いしているのは……何時も通りか。

「はー、食い逃げかあ………どないしよ」

理由は解った。放置しよう。

「待ってえ！何か知恵かしてえや！」

「知るかよ。てめーに何かしてやるメリツトがない。俺は久し振りに姐己様を堪能してーんだ」

「そう言わんで、な？姐己様も今回の件苛立つとるのよ」

「………まあ、食い逃げされたとあつちやな。しかしお前の店から食い逃げたなあ」

「ただの鬼や亡者じゃニヤーンじゃねーの？例えば滑瓢とか」

ぬらりひよんねえ。確かH S D Dにも居たはずだ。よく覚えてないが妖怪の総大将。鬼灯の冷徹ではどうだったか?と記憶を探る柳。と、その時。

「そうです。私が滑瓢です」

と、ちっこい爺さんが柳達に話しかけてきて。しかし不思議なことに檜と小判は気づいていない。

「よお爺さん。どうかしたのか?」

「あ、実は狐カフエのお会計……あ、あれ……?何処連れてくんですか?」

「なあんだ、滑瓢だったの。食い逃げされた訳じゃなかったのね」

「……………」

「何だ無駄足か」

大妖怪九尾を前に青くふるえる滑瓢。

「しかしぬらりひよんといやあ、もつとでつかくなかったか?」

「現世に残った方で居るらしいけど、地獄に移り住んだのはねえ。弱いから追われてきたんでしょ」

「私も何時かあなりたいとは思ってますけどねえ」

「無理だろ」

「無理ね」

「無理ですか」

2人の否定に落ち込む滑瓢。威厳がこれっぽっちもない。無さ過ぎてふとした拍子に見失つてしまいそうだ。

「ところで柳、今日は私に会いに来てくれたのかしら？」

「そのつもりだよ。金もきちんと用意してる」

「そ、じゃあもう行つて良いわよ。次からは書き置きでもおいておくのね。行きましょ、柳……」

姐己はスルリと柳に腕を絡め歩き出す。滑瓢は良いなあ、と呟いたがそれは大妖怪たる威厳を持った姐己になのか、美女と共に歩く柳なのかは解らないが。

「あら、そういうえば居たわね」

「えへへ、幸せだなあ……」

部屋に行くと酒に酔いつぶれた白澤が居た。姐己はそれを窓から捨てると指を鳴らす。部屋は一瞬で綺麗になった。

「……………良いのかあれ、上客だろ？」

「良いのよ。それより、少し高い香油買って見たの。塗つてくれない?」

「姐己様の少し高いって俺じやあ数年貯めても買えねーな。むしろ俺なんかで良いの? 専門の丁とか居るんだろ?」

「柳程上手くないもの」

「そう言つて貰えるとやる気出るね」

巨大な九尾の狐の姿になった姐己はその場に伏せる。

「その櫛はやるよ。今回は中々来れなくて金が貯まったからな。いつそ鼈甲の櫛でも買おうと思つてたんだ」

毛繕いが終わり、柳は店を出る時姐己に櫛を渡す。ブラシとは使い分けているためまだまだ全然使えそうだし、これも中々の高級品だ。

「本当に良いの?」

「取つとも意味ないしな」

「……………ああ、そう。まあ面白いし良いか。また来てね。今度は安くしてあげる」

「おう。香油代は請求しないでくださいよ」

「あら柳ちゃん」

「あ、お香姐さん。ども……」

櫛屋に行くとお香と出くわした。

「まあ、もしかして誰かに櫛をプレゼントするの？」

「ん？ いや、新しい櫛を買いに来ただけだよ。古い方は姐己様に上げた」

「……………へえ」

江戸時代辺りでは櫛を女性に送るのってプロポーズみたいなものなんだが、面白そうだし黙ってよう。

新任先生アザゼル

「ようこそアザゼル総督。これ許可証です、契約事項読んでからサインしろ」

「お、おう……」

アザゼルは柳の前に引きつった顔で許可証を受け取る。天照大神の署印は既にある。後はアザゼルがサインをするだけだ。

「つて、なんだこりや!?!何で実験、発明が禁止なんだよ!」

「そりや、アザゼル総督の破天荒ぶりは良く聞いてますからね。グリゴリの電力をバラキエルの雷光で補おうとバラキエル強化計画を立案。冥界の墮天使領で山二つが消し飛ぶ。神器の実験と言いだらゴン系の神器、各々のパーツを繋ぎ合わせ人工ドラゴンの作成、暴走。山一つ崩壊。痛々しい名前の人工神器の作成中暴走、山三つ崩壊。山に何か恨みでも?そして、天界にいるガブリエルの胸をもんでやると墮天使の翼を白くして天界の防衛システムに感知されないようになる改造を施そうとして、幹部、自分を含めた多くの墮天使が体調不良……その実験をここでやろうとしたら、そりや止めるさ」

「別にいいだろ。そこまで危険なのはやらねーからさ!な?」

「信用できないので。もしやると言うなら前歯を折つても止める」

「何でダメージが具体的になんだよ!? 普通力尽くとか、良くても殴ってでもとかだろ!」
「ああ、鼻の骨の方が良かったですか?」

「……………」

アザゼルは柳の後ろに一角の鬼の幻影を見た。が、すぐに首を横に振る。目の前の相手はあの鬼ではない。

「上等だ! 俺は実験をやめる気はない! どうしても止めたきや力尽くでやつぺ——!」
パキョツと遠慮のない本気の拳が柔らかい鼻の骨を砕く音が響く。吹っ飛ばされたアザゼルはそのまま壁に激突した。

「ほ、本気でやりやがった!」

「え、ひよつとして墮天使ジョークでしたか? すいません、やめなと言ってたので」
「……………」

アザゼルは思った。間違いなく同類だ。逆らわないでおこう、と。

「まあ実験自体はきちんと企画書とその結果起こる被害をキチンと事前に報告してくれば、それ次第では許可出しますから。ただし無断でやったらそれ壊して弁償もしない」

「おおう、お前本当に鬼灯に似てるな」

「ははは。鬼灯様だったら前歯も鼻の骨もついでに腰の骨もへし折ってますって」

「……………」

「と言うわけで、今日からお前等の神器監督官になったアザゼルだ。よろしくな」

鼻にガーゼを張ったアザゼルが挨拶するとリアス達は思わず身構える。何せ相手は墮天使総督なのだ。

「赤龍帝と邪眼持ちは爆弾抱えてるからな。扱えるようにならなきゃ、最悪禍の団の活動中封印って事もあり得る」

「ていうかその吸血鬼は本来封印予定だったんだけどな。魔王ルシファアの懇願で許可したけど次暴走したら即封印だからな」

「ふええ!？」

柳の視線に女子制服を着た男子生徒が震える。彼が停止世界フオルビトウン・パロール・ピユの邪眼の所有者にして前回敵に捕まり暴走状態にさせられたハーフ吸血鬼の転生悪魔だ。

「前回の件は、ギヤスパアのせいじゃないわ」

「そうだな。強いて言うなら各勢力のトップが集まる場所に、力が制御できないという理由で連れて来れないという状態で放置して、しかもそんな危険な状態の奴を護衛も付せず、利用しやすい境界内に放置した主のせいとも言える」

「何ですって……………」

「封印している間何もしてなかったんだろ？ 私達には教えることが出来ない、とても言つて。良く封印解く許可出たな。日本神話だったら暴走に巻き込まれないように人気がない場所で、使えるようになるまで鬼灯様にしごかれるぞ……使えるようになるまで地獄に来るか？」

「い、いやですううう！」

鬼灯の文字通りの地獄の特訓はお気に召さなかったらしい。

「そもそも主がどんだけ強くなるうとRPGじゃねーんだ。パーティーメンバーが強くなるかよ。なのに今なら大丈夫とか訳解らん」

ふう、と肩を竦める柳。事実を淡々と言っただけだがお気に召さないのキャリアスは顔をしかめている。

「つまり、俺達がキチンと力を使いこなせれば、封印云々の話は出ないんですね？」

「まあな」

「やってやりますよ！強くなって、力を使いこなして、認めさせてやります！」

「……………熱いな。まあ期待してやるよ……………」とところで何で寝そべてんの？」

「こむら返りと腹痛です」

「ごめんなさいイツセーさん。ちっちゃい私が未熟なばかりに……」

「次勝手に妙な術使ったら失敗した際に特急列車の中で下痢になる系の尊厳を失うこと

になる術使わせてやる」

「はい、気をつけます」

しょんぼり落ち込むアーシア。反省しているのなら何よりだ。

「ああ、それと今度冥界に帰る時は近場の悪魔の領地に移動しろよ」

「そんな事しなくても駒王町の地下には冥界行きの列車が来る駅があるわよ」

「ああ。ここもう日本神話の領地だしな。取り壊して地獄の入り口に変えさせてもらった。連絡行っていないのか？」

「な!?聞いてないわよ!」

「来た報告は全部読むようにな。どうせ夜は男の部屋、朝も男の部屋。金髪元シスターに抜け駆けされないように付きつきりか……領主じゃなくなって良かったな。仕事しなくても連絡が遅れるだけだし」

眉根を寄せるリアスに対して柳は指を鳴らし大量の本を出す。

「見下されたくないなら少しは知恵を付けて見せろ」

「なめないでくれるかしら」

と、渡された参考書を滅びの魔力で消し去る。

「15200円＋税、今すぐ払え」

冥界行き列車

「柳様、準備出来た」

三子がキャリアバッグを転がしながら柳の元にやってくる。柳も着替えや冥界の金に両替した財布を持って行く。

「さて、行くか。イチヨウ、留守は任せた」

「当然。私はここの土地神だぞ？言われずともやるさ……」

イチヨウは笑うと柳達を見送る。

「そういえばお前、収納系の術を持っていたのではないのか？」

「三子のお菓子で容量超えた」

「はくはく………」

「三子、俺の頭の上で菓子食うな。食べかすが落ちる」

「もぐもぐ………」

「成る程さては聞いてないな」

柳はそう言うのと三子の足をつかみ引きずり下ろす。三子が無表情で柳を睨んでくるが柳は取り合わない。忠告を聞かなかった三子が悪い。

「……………」

お菓子をしまい口の周りを拭くとトテテと柳を追い背中に張り付いた。

「いめんさいご」

「よう」

「……………」

許しが出たので背中を上り再び肩車の体勢になった。

「お二人は相変わらず仲が良いですね。鬼灯殿と座敷童子達のように」

と、五道転輪王が微笑ましそうに2人を見つめる。

「まるで兄妹か親子のようです」

「五道転輪王様、それ前にも似たようなこと俺とチュンさんに言ってますでした?」

「柳の妹か娘?なら私も姉と思うと良いよ」

「チュンさんも何気に乗り気だし」

「チュンは若くして亡くなったし、それにあの時代に墓も作られていたし、それなりに余裕のある家庭に生まれたんでしょう。ひよつとしたら弟や妹が居たか、あるいは生まれる前だったのかもしれない」

「その辺を俺に求めているって事ですか？」

「おそらくは」

生前の記憶はないようだが、喋り歩けたのだ。感覚的には覚えているだろう。その感覚を補おうと柳を弟扱いするのもかもしれないというのが五道転輪王の予想だ。

「柳殿も異例の形とは言え若くして地獄に來た身。家族を恋しく思ったりはしなかったのかい？」

「んー。俺は高校の頃親父を今まで叩かれた分だけ仕返しに親父のバットで叩きまくって追い出しましたし、母親はその後薬に溺れて何かと喚くし……また会いたいと思っただけではないですね」

「ああ、地獄の優秀な獄卒って、鬼以外の場合皆何かしら怨みを抱えてたりしますよね」
と、黄昏る五道転輪王。具体例としては芥子や瓜子姫。鬼ではあるが元人間の鬼灯。今は隠居しているがイザナミなどが当たるだろう。

「兄妹は居なかったか？」

「姉が居ただけ就職した日から見えてない」

「友達は？」

「近所で噂の問題家族だったからなあ。親が仲良くするなと言うと子は仲良くせず、その内特定の子を下げて自分達を上げる遊びをします。要するに虐められてた。やり返

したら家で親に殴られるだろうし取り敢えず我慢して、高校になって親父追い出した後は普通にやり返したら保護者が来て「年頃の子はそういうこともしちゃうから仕方ないでしょ!」とかほざきやがったので「てめー等の言う青春の過ちに巻き込まれても迷惑なんだよ」と言ったらキーキー喚いて……………その様子を動画投稿サイトにアップしてやった。そしたら懲りるところか悪質化して……………彼奴等が地獄に来たら確実に何らかの制裁を加える」

「……………貴方が鬼灯殿に鍛えられている理由が解った気がします」
「……………?」

鬼灯と柳、この2人は、似ているのだ。どちらも自分のせいではない、自分ではどうしようも出来ない環境を理由に虐げられ、その恨みをバネに力を付けた。柳は鬼灯より生きていたが、時代が時代ならば彼も鬼火をその身に取り込み鬼と化してたかもしれない。

「その点動物は良いですよ。可愛がってやれば裏切らない。小さい頃は虫とか鳥とか取ってきてくれて。親父のライター使ってあぶって食ってました」
「中々ハードな人生ですね」

ポワンとしている五道転輪王もこれには流石に苦笑いしていた。
「それより三子、そろそろ降りろ」

「……………ん」

柳の言葉に三子がトン、と飛び降りる。ここは悪魔に貸している日本の土地。そのとある地下。

「お待ちしております」

頭を下げで迎えたのは銀髪の女悪魔。魔王の妻にしてメイドという不思議な立位置の悪魔、グレイフィア・ルキフグス。彼女に関して鬼灯は、魔王つてのは皆こうか？と呟いたとかいらないとか。

「五道転輪王様、チュン様、柳様。中で魔王様方がお待ちです。どうぞこちらに」

そう言つて案内するのは高級車両。現世と悪魔の住む冥界を行き来する列車だ。グレイフィアの案内の下、まず荷物を置きに車両部屋に向かう。

「三子はここでゲームとかしてて良いぞ」

「……………平気？魔王四人、こっち三人」

「平気平気。不意打ちだの騙し討ちだの考える人じゃねーよ」

三子を部屋においていこうとすると服の裾を掴んできたので頭を撫でて落ち着かせ
てやる。

「解った。待ってる」

「いい子だな」

「此方です」

この列車は広く。中にはプールやゲーセンまである。その複数の車両の一つ、食堂車に入ると四人の男女が居た。

机に突っ伏して眠る男と何やら浮かび上がった画面を前に術式を刻んでいる男。この2人の男は客人に見向きもしない。反応したのは2人だけ。

「ようこそ。会談ぶりです。ね五道転輪王様」

「お久しぶりで。魔王ルシファー殿」

魔王の衣装に着替えたサーゼクスと……

「久しぶり、五道転輪王様☆そっちの子達も久しぶり振りね♪」

「どうもお久しぶりで。魔王レヴィアタン殿」

「もう。そんな堅苦しい呼び方じゃなくて、レヴィアたんって呼んでいいんですよ?」

「……………発言よろしいでしょうか」

と、柳が挙手するがやはり男2人は我関せず。

「君は、確か柳君だったね。前回はカテレアの討伐、心から感謝しよう。発言を許可する」

「では、レヴィアタン様以下二名のルシファー様を除いた魔王様方。TPOってご存じですか？」

TPO

「……………ん？もしや私にようかい？」

と、漸く作成中の術式から顔を上げるのはアジユカ・ベルゼブブ。現魔王の一人だ。服装こそキチンとしているがついさっきまで国賓を無視していた。

「すまないね。今少しゲームのシステムの調整をしていたんだ。これが思いの外楽しくてね。用が終わったなら続きをして良いかい？」

「んん？ふあく……………何々、どうしたの？あ、日本の人じゃん。挨拶しなきゃ、おやすみなやん」

「五道転輪王様、此奴等殴り飛ばして良いですか？」

「駄目ですよ。外交先で魔王を殴り飛ばすなんて醜聞立てては」

「じゃあこつちで我慢します」

ドゴン！と柳の踵が机を真つ二つに割った。机に突つ伏してスーツが乱れていた魔王の一人ファルビウム・アスモデウスは床に転がりサーゼクス、セラフォルー、アジユカはポカんと呆ける。

「魔王様方。これ以上の対応は我々日本神話を下に見た、侮辱行為と受け取って良いの

でしようか?」

「ま、まあまあ落ち着いてよ柳ちゃん☆」

「私は直属の上司に、なめた真似されたら「たとえ王でも金魚草の餌にしろ」と教わっているの。下に見られるのはなれていきますし、自分の立場や身分も弁えているつもりです。が、身分のみ弁えて立場を理解していない輩には些か不快感を覚えてしまいます。これは私個人の見解ですので、どうぞ気に入らなければこの場で処断ください。此方も全力で応える所存ですので」

「ミシミシと周囲の壁が軋む。魔王達は柳の後ろに黒い巨大なドラゴンを幻視し思わず構える。と、柳から放たれていたドラゴンの気配が霧散する。」

「さて、ベルゼブブ様、アスモデウス様、どうもお二人は個人の趣味を優先したいご様子。ならば、部屋に戻って貰えないでしょうか?」

「い、いや。すまない……親睦を深めるための外交の席だというのに。失礼が過ぎた。謝罪する」

「そ、そうだね。僕だって、昨晩寝てなかったわけじゃないのに……ごめんなさい」

「お気になさらず。と、言うのは駄目でしょうね。まあ、次からは部下ではなく自分で言うようにしますよ」

と、五道転輪王が言うとホッとする二人。今度は寝たり術式を操作したりはしなかつ

た。

「二人とも駄目だよ？ こういう場ではキチンとしなきゃ☆」

「ちよつと待て何さも自分は含まれてないみたいに言ってるんだ」

セラフオールが「もう☆」と頬を膨らませると柳は反射的に敬語を忘れ突っ込む。

「まず貴方が一番TPOを意識してないって自覚ありますか？ 前回の会談では普通の服でしたよね？」

「……………」

柳の言葉にセラフオールはキョトンと首を傾げ自分の格好をみる。魔法少女のよう
なヒラヒラした格好を。

「これ私の正装だもん。何の問題も無いわ♪」

ズドン！とセラフオールの真横を何かが通過し壁に突き刺さった。

「……………」

「失礼。つい手が…………」

ツインテールが片方解け、サラリと舞う数本の髪の毛を横目にソツと後ろに振り返ると壁の一部が凹んでおりその中央にシルバーナイフが深々と沈んでいた。

「考えてみれば我々は日本の、貴方はEUの者。親睦会中に相手を無視するのは有り得ないとしても、その様なキャピキャピした態度もそちらの文化では当たり前なのかもし

れませんね。是非今までの行動を振り返った上で私の目を見て正しい対応をしていると言つてくれませんか？」

「……………ご、ごめんなさい」

「おやどうして謝るのですか？その格好は正装なのでしよう？その態度も悪魔にとっては当たり前なのでは？謝ることなんてありませんよ。むしろ謝るのは此方かもしれないですね……………貴方はただ一言、その格好、その態度は悪魔にとって良識に則ったものですよと言つてください。言つてくださいれば納得しますので」

「ごめんなさい！許してください……………！」

「……………何を？」

涙目になり叫ぶセラフオルーだが、柳は首を傾け尋ね返すだけだった。

「私の服装や態度は親睦会とはいえ、国賓を相手にするのに不相応なモノでした！」

「そうでしたか。ではどうするべきか解りますね？」

「着替えてきます」

セラフオルーはそう言うのとボトボと食堂車から出て行った。

「失礼をいたしました。五道転輪王様は地獄にて罪人を裁く十王の一人、その王にあのような態度を取られ熱くなつてしまいました」

「いや、その忠義心は誇りこそすれ謝るべきものではない。私は許そう」

「先ほど言ったように、謝罪するのはこちらだ」

「立場逆だったら家のおじいちゃん達すぐ戦争だーとか言つてただろうし。この場で納められるようにわざわざ物を壊したりしてもらつて寧ろ札を言うよ」

「……………」

その辺見抜く目を持っているからこそ、優秀な人材を集めてさぼっているのだろう。文字通り自分の周りしか固めていないが。

「机は弁償します」

「いや良い。良い勉強になった……………片付けとセラフオルーの着替えに、10分ほど使おう。10分後に会食としようじゃないか」

アジュカの言葉にグレイフィアは机の破片を集め始める。

「私が居ては魔王様方も純粹に味を楽しめないでしょう。部屋に食事を運んでくだされば三子と二人で食べますよ」

「いやそんな……………いや。気を使つてもらつてすまない。食事は最高の物を用意しよう」

「申し訳ありませんでした。本来ならば、私達悪魔が事前に注意すべき事柄でしたのに」

車両部屋に向かう途中、グレイフィアが頭を下げる。

「魔王様方に過ぎた口を利いてしまったので、怒っているのかとばかり」

「本来は怒るべきなのかもしれませんが。あの場で咎めるのは忠誠心の否定。それは人に仕える身として言うべきではないかと思ひまして」

「そうですか」

「それと、気を使わせて申し訳ありません。セラフォル様には、私から言っておきます
……」

「柳様こつちでござ飯食べる？何で？」

「三子が寂しそうにしてたから。それに俺、テーブルマナーまだ習ってないし」

グラシヤラボラスの災難

「はい、あー」

「あー」

「いー」

「いー」

三子は柳に歯を磨いて貰い、柳が持つコップを受け取り口に含む。柳が洗面台まで抱えるとペッと吐き出した。

「よし、じゃあテレビでも見るか？」

「我『教えて！ミキちゃん&ブラザーズ』みたい」

「あれまだ冥界じゃ放送してないからな。外交結ぶんだしその内放送するかもだけど……」

「にゃーん」

「………それ、プライベートの時本人の前でやってやるなよ？あの子の暗黒面見ることになるから」

鬼灯と行動を共にしていると直接会う機会もあったが、あの闇は想像以上だ。セラ

フォルー辺りと会わせたら発狂する可能性すらある。

「ちなみに三子はどっち派？俺はミキ派。懸命な子つて良いよな……それにあの子野干やかん（地獄の狐）だし」

「ミキちゃん可愛いにやーん」

「ミキ派か……頼むからあのキャラを真似ないでくれよ。俺とミキさんの精神が死ぬ」

と、三子の頭を撫でながら言う柳。ミキ自身はいい子ではあるのだが、あのキャラ付けは正直痛い。本人の前では言わないが。

言ったら本人が可哀想なので言わないが。

「ついたー」

「着いたよー」

ルシファードの駅で仲良く両手をあげる三子とチュン。

「柳様、我あれ食べたい」

と、三子が袖を引っ張りながら店の一つを指さす。見ると満干全席大食いチャレンジがやっていて。一時間以内はその日一番の記録を出せればたらしい。

「さつき歯を磨いたばかりだろ」

「良いじゃないですか。子供はよく食べて、良く育つのです」

「此奴世界の誰よりも年上ですけど……まあ俺も小腹すいてましたしね。幸い、最大で四人で受けられるようですよ」

「私は良いです」

「私も良いよ」

「じゃあ二人ですね」

「御馳走様でした」

「我、お代わり所望する」

「駄目だ。この後は五道転輪王様の観光がある」

30分で食べ終わった三子はお代わりを要求するが柳が拒否する。店内がほっとした雰囲気にも包まれた。

「まあまあ。見て楽しむのも旅の一興ですよ……何か面白そうなのが目に留まったら言つてください。多少の寄り道は許します」

「鬼灯様のお土産に曰く付きのアイテムでも探してみますか」

「浮気神獣不能にする薬探してみるよ。それか呪い殺せる呪具」

「裏通りにでも行ってみますか」

ゼファードル・グラシヤラボラスは不機嫌に街中を歩く。新人悪魔の顔合わせ。同世代の次期当主候補の繋がりを作る為の行事。本来ゼファードルはこの行事に参加するはずではなかった。が、兄の不審死により次期当主にされた。正直面倒くさい。

周りの連中も、死んだ兄と比べてくる。

今の彼に寄ってくるのは彼の才能を認めたものではなく、魔王の血縁という部分に目を付けた奴らだけだ。

「つあー……面倒くせえ。どっかに良い女いねーかな」

彼はまあ、女好きではある。処女厨と言うわけではないが男を知らぬ女に男を教えるのは楽しい。と、曲がり角を曲がろうとした時人にぶつかる。

「對不起ドウイブツツイ（ごめんなさい）」

「気をつけやがれ！ん？」

「……………」

ぶつかった相手は異国風の衣装に身を包んだ小柄な少女。フェニックス家の眷属に似たような格好をした奴がいたのを雑誌で見たような気がする。が、目の前の少女は悪魔ではないようだ。

「どっかの眷属候補か？中々可愛い顔してんじゃねーか」

「……………」

腕を掴み顔を引き寄せるゼファードル。と、連れであろう男がゼファードルの手を掴む。

「やめた方が良いですよ。いや、ほんと……………」

「ああ？ なんだてめえ、俺がグラシャラボラス家次期当主と知つての狼藉か？」

家名を出し睨みつける。良く見ると男の顔は青くなつておりゼファードルはふんと鼻を鳴らす。

「我々は日本の地獄から来た使者。つまりは国寶です。それに無理矢理迫つたとなればむしろ家名に泥を塗ることになりますよ？」

「日本？ ああ……………はん、極東の島国の弱小勢力如きに何で遠慮しなくちやなんねー。殺すぞガキ、さっさと離せ」

「……………ああん？」

ボギリとゼファードルの腕が鳴る。関節が鳴つた音ではない。握りつぶされた音だ。

「あが！ て、てめえ！」

「もう一辺言つてみるクソガキ。弱小勢力？ 遠慮しなくちやなんねー？ なめた態度取つてると細かく切り刻んで金魚草の肥料にすんぞ」

「ハ、この！ ぶち殺せ！ そのガキの手足ちぎつて、目の前で女犯してやらあ！」

「……………此奴等やつて良いか？」

ゼファードルの言葉に反応した眷属達が爪や武器を構えると少女が何処か嬉しそうに尋ねる。それに対して残りの連れの一人の優男がはあ、と肩をすくめる。

「地獄が下に見られるようになってしまつては他の十王に合わせる顔がない。チュン、やつておしまい」

「あいなー。柳、良く見てるよ。これが——」

「死ね！」

「蠅螂拳」

足を低く開き両手を曲げ鎌に見立てた少女はその手を延ばし迫ってきた兵士二人を吹っ飛ばす。

「鷹爪拳」

僧侶二人が魔法を放つがトン、と高く跳び回避すると、落下の速度を利用した蹴りが片方を蹴り飛ばしもう片方に当たると壁まで吹き飛んだ。

「これが崩拳」

戦車の腹を殴り付けるとその衝撃は戦車の背後まで伝わり、咄嗟に仲間を盾にしたもう一人の戦車共々全身から血を吹き出す。

「まだまだ行くよー」

残りの兵士もあつという間に倒した。

「……………チュンさん拳法学んだんですね」

「柳にキチンと教えてあげたかったからね。また暇な時に教えるよ」

「……………頑張ります」

チュンの言葉に顔を青くする柳。善意からの言葉なので断ることも出来ない。

「うんうんちゃんと手加減していますね」

「これで…………」

まあ確かに誰も死んでいないが。

「……………な、なんだと……………」

「あ、忘れてた」

入れ墨をしたヤンキー風の男に漸く気づく柳。チュンの華麗かつ恐ろしすぎる動きに見とれ忘れていた。

「てめえら、こんな事してただですむと思ってるのか!!」

「はい」

「ええ」

「?」

ヤンキーの叫びに五道転輪王と柳が即答しチユンと三子は首を傾げる。

「先程言ったように、我らは国賓。それも私は王の一人ですからね。むしろ、あなたを地獄に引き渡せと言う要求すら出来る」

「辛いですよ日本の地獄は。死ねた方がマシと言われていきますから」

「な!?!お、俺は魔王の血縁だぞ! そんな事してただですむと……」

「魔王の血縁? お前自身なんか凄いの?」

と、首を傾げた三子の言葉にヤンキーは固まる。

「我々地獄はこの事態をなあなあで片付けるつもりはありません。抗議はさせてもらうので、己の身を心配しては?」

柳の言葉に顔を青くしたヤンキー。四人はその横を通り抜け、魔王達に呼ばれた建物に向かった。

オーフイスの所在

五道転輪王、ミカエル、アザゼル、四大魔王が揃った会議室。チュンと柳は壁際に立つ。

「皆さん集まりましたね。それでは会談を始めましょうか」

「おい、その前にセラフオルーなんだその喋り方。熱でもあるのか？」

「ここは外交の場ですので」

「……………サーゼクス、如何に重要な会談の場とは言え重病の者を出席させるのは感心しませんよ？」

セラフオルーの言葉にアザゼルが不気味がり、ミカエルがセラフオルーの体調を心配しサーゼクスを責めるように見る。が

「何なのよ2人して！私が真面目にしているのがそんなにおかしいの？そりや私だって明るく行きたいわ☆でも……………」

チラリと柳を見るセラフオルー。青くなつて直ぐにそらした。

「……………でも、ちゃんとやらないと」

「やはり熱が……………」

「成長したんじゃないの？ いや、ないか」

と、セラフオールの成長を全面否定する2人。セラフオールは泣きそうになるが何とか堪えた。

「まあ、話がスムーズに進むことは良いことです。でしよう？」

五道転輪王の言葉にまあそうか、と納得する2人。最初の議題は『禍の団』に関する情報交換。

「前回の襲撃時に捕らえた魔法使い達は皆トップの存在を知っているが、見たことがある奴はいないそうだ。トップってのは………：オーフィスだ」

「オーフィス!? まさか彼が……？ しかし、見たことがない？ 彼等は下っ端だったのでしようか？」

「いや、実はカテレアも数年前から姿を見ていないと言っている。残された蛇を利用していただけそうだ」

アザゼル、ミカエル、サーゼクスはそれぞれの意見、情報を交換する。それで解ったことと言えば禍の団のトップがオーフィスではあるが、その所在地を知る者がいないということだ。元より一枚岩でなかったが、そもそもオーフィス自体彼等は御輿として利用していただけらしいから、特に問題はないらしい。

「かー！せめてキチンとまとめてから離れてくれりや良いのになあ。そうすりや大混乱間違いなしだったろうに」

「好き勝手動くからこそ、動きも予想し難い……せめて彼が、オーフィスが何処で何をしているか解ればいいんですがね」

「悠久の時を生きる無限の龍神だ。何を考えているかなんて、誰にも解らないさ」

「？三子さんなら地獄にいますか？」

サーゼクスの言葉に五道転輪王は首を傾げながら尋ねる。その言葉に、その場の全員が首を傾げた。

「三子とは……柳君の娘のことでしたか？彼女が何か？」

「いえ、ですから彼女は無限の龍神ですよ。あ、そういえばオーフィスって彼女の昔の名前でしたね」

「「はあ!?!」」

無限の龍神オーフィスは昔、日本に暫く滞在したことがある。基本的に放浪していた彼、あるいは彼女が暫く同じ場所に止まっていた理由は、とある妖怪が関係している。

その妖怪の名は座敷童子。自己が希薄な彼女達に共感を覚えたオーフィスは彼女達の姿に近い幼女の姿となり、数日ほど同じ時を過ごした。

一度は別れたが久し振りに会ってみたくなり、座敷童子達を探し彼女達が住む地獄までやってきたのだ。

「以来、ずっと地獄に住んでいます。今では地獄の可愛らしいアイドルの一人ですよ」「マジか？」

「はい。マジです。すいません、ずっと三子さんで通していたから、オーフィスが三子さんの事だというの忘れてました」

あはは、と頭をかく五道転輪王。周りは本当に？と言いたげな視線を柳達に向ける。

「はい。事実です……自分も知ったのは最近ですが」

これは本当。今までずっと座敷童子だと思っていた。鬼灯の冷徹という作品の世界だとずっと思っていたからだ。

そんな事は知らない他の勢力はあれだけ仲良くしていて何で気づかないのだろうか
と柳を見た。

「あ……禍の団が御輿にしてる奴が解った時に教えとくべきだったな。ちなみに、オーフィ……三子は蛇を戻せたりしないのか？」

「以前から良く蛇を持ってきてくれてたので、正体を知った際聞いてみたのですが『じゃあ柳様は吐いた息を残らずそのまま吸える？』と言われました。直接触れば戻るようですが、そもそも三子は切り離れた一部が何処にあるのかどうするのか興味ないよう

す」

「あー、まあ無限の龍神様だもんな。俺らにとつてはやばい代物でも本人からすりや髪の毛の先やった程度の感覚なのかもな」

「処断しますか？」

「んなこととして龍神の怒りを買うのはごめんだ。おまえ等は？」

アザゼルは両手をあげお手上げのポーズを取るとミカエルと四大魔王を見る。

「……………私も同じ意見です」

「逆鱗に触れるのは怖いしね〜」

「見たところオー——三子は柳と仲が良いようだし、手綱を握っていてくれるなら」

「私も問題ありません」

「私もだ」

ミカエル、四大魔王も特に異論は無さそうだ。

「いやー、他の神話にも通達する前で良かった。危うく滅ぼされるとこだった」

「そんな事はしませんよ」

と、笑う五道転輪王だが正直鬼灯がいる時点で安心できない。敵と認識されたら終わる。

話は進み、次は若手悪魔についてだ。

レーティングゲームという悪魔の眷属を競わせるゲーム。その中で、今年から正式にデビューする一同をデビュー前に競わせるため、その観賞の誘いだ。

「……………あれ、この方……………」

と、若手悪魔の写真を見ていた五道転輪王は一枚の写真で手を止める。

「……………何処かで見たとかな？ チュン、解るかいい？」

「知ってるよ。私のこと犯すとか言ってた奴よ。名前は……………ゼブラ？」

「そう言えばシマシマの服を着ている。名は体を現すと言いますがここまでとは」

「あの、お二人とも。ここにゼファードルと書かれていますけど？」

三人の会話に魔王達がピシリと固まる。犯す、犯すとか言ったか今？ いや、言われたと言っていた。

「そう言えばこの件も後で報告するつもりだったんですが……………うーん。私裁判官ではありませんけど、罪状にあわせた罰を与えるための地獄を選ぶだけですしねえ。柳殿、どうするべきだと思います？」

「国賓に粗相はかなりの重罪ですが相手は貴族で、しかも魔王の血族。レーティングゲーム参加資格剥奪や、継承権剥奪は上級悪魔達が騒ぐでしょう。迷惑をかけられた五

道転輪王様への謝罪として五道転輪殿で一週間雑用させるのは？」

「それぐらいで良いのかい？」

「それでも貴族悪魔達は騒ぎそうではありませんが、これ以上断絶される家は減らしたくない。最終的には受け入れざるを得ませんよ」

「成る程。ではそれで……………」

「解った。手配しよう。此方の不手際で迷惑をかけてしまい申し訳ない」

「いえ。冥界は未だ混乱期、旧魔王派まで現れ大変でしょう。チュンや、一週間だけとはいえ後輩だ。しっかり面倒を見てやるんだよ？」

「でもこいつ絶対暴れるよー。監視しなきゃいけなくなったら柳に拳法教えられないね」

「一週間ぐらい直ぐでしょう？」

「……………解ったよ」

閑話 1

「オーフェイス、我ら真なる魔王が魔王に相応しき力を手に入れるため、蛇を出しなさい」
「オーフェイス、神器に移植する蛇を作ってくれないか？何時もとは違うだろうが、頼む」
女と、英雄を集めているという妙な組織の当時のリーダーは蛇を受け取ると何も言わずに去っていく。

久々に友に会いたくなくなった。

自分と唯一……唯二、数日の時を四六時中過ごした相手。座敷童子に。

自分と何処か似た雰囲気を持ち、しかし人の家で過ごす彼女達を知ればわざわざ静寂を求めずとも満足できるのかもしれない。そう思ったのだ。

姿を彼女達の年齢、性別にあわせ服装を着物に替え、蛇の模様を入れる。

二人の気配を追ったら地獄にいた。久し振りに三人で手鞠をして、初めて会う蛇を巻いた女性にお手玉を教わったりもした。

「あら三人目？なら三子ちゃんね」

そう言つて頭を撫でられ、以来ずっと三子と呼ばれ続けた。

「……………その蛇どうする?」

「ん? お前は…………」

「我、三子」

「ああ、三人目の…………」

ある日刑場の蛇を持つて帰る男を見つけた。この頃はまだ雑用係をしていた柳だ。

「この蛇は、食うんだよ」

「食う?」

「食費の節約。姐己様、高いからなあ…………狸の方は安いんだけど臭いつけたら暫く会つてくれないし」

「……………」

良く解らないが蛇を食べるらしい。自分の出した蛇も良く飲み込まれていたが、これはでかすぎないだろうか?

「口裂ける?」

「裂けないけど、何、急に…………」

「じゃあどう食べる?」

「切り刻んで調理する」

「斬り殺したら効果切れる」

「ん？」

「？」

「まあ良く解らんが、お前も食うか？」

「……………食べてみる」

「……………」

「うん。流石食いすぎで死んだだけある。中々脂がのってるな……………ハンバーグにして正解だった」

「もう一つ」

「はや!？」

空になった皿をつきだしお代わりを要求する。焼くから待ってると言われたが、待てず柳の皿のを取ったら怒られた。

もつと欲しかったがここまでだと言われた。

「柳様。今日は蛇ハンバーグ？」

「やー、死んでる蛇なんて早々居ないしな。蛇も獄卒だし死んでねーのは料理できねーよ」

「つまり獄卒じゃない蛇いけば良い？」

「まあそうだな」

「はい」

「でか!?!どっから出した!?!」

「我、満足」

「そうかい。そりや何よりだ……デザートにフオーチエでも食うか?」

「頂く」

ハンバーグ以外にも色々作って貰った。どれも美味しかった。

「堪能した。我、帰る」

「ああ、待て三子」

「?」

「ありがとな、これお礼だ」

柳はそう言つて飴を三子に渡す。

「……………ありがとな?」

「おう」

「お香姐さん。ありがとなつて、何？」

「どうしたの三子ちゃん？ありがとな？」

「それお礼」

「鬼灯様にも言われた事ある」

「二人で手伝った」

「??」

「ありがとうつて言うのは、お礼の言葉よ。嬉しいことをしてもらった時に言う、最近だとサンキューなんてのもあるわね」

「感謝？嬉しい？柳様、我に蛇貰つて嬉しかった？何で？」

「さあ、そこまでは……」

「……………感謝」

不思議と、胸がほんわりした。

「ん？またくれるのか、ありがとう」

「……………」

「お、でか……サンキュー」

「……………」

「何時もありがとな。食いたい料理あったら言ってくれ、作るから」

「……………」

「あの、頼むから教えてくれない？」

「何でも良い」

「作る側として一番困る注文を……カレーで良いか」

「ハヤシライスが良かった」

「食ってからその注文!？」

ほわほわする。

「最近よく飯強請りにくるな。いつそこにも歯ブラシ置くか？」

「歯ブラシ？」

「……………三子、お前歯を磨いたことあるか？」

「ない」

「……………」

「うー」

「うーじゃない。あーだ、あー」

「あー」

「よし、次いー」

「……………あ」

最近柳から自分の気配がする事に気付いた。切り刻んだとは言え自分の一部を食いつけたのから可笑しくはないのかもしれないが、大丈夫なのだろうか？

柳の師匠の一人で人間性は信用できないけど薬剤師としての腕だけは信用できると言っていた神獣に聞いてみることにした。

「平気平気ー。柳君、全く縁を持ってないからね」

「縁？」

「そ。縁は大切だよ。どんな形であれ、それは人と人を繋ぐ。特に人間なんて、縁に影響されやすい生き物だ。縁次第で聖人が悪の道に走ることで、悪人が自らの罪を懺悔

する事だつてある。恨みという縁を持つてしまひ鬼になつた人だつてゐるしね」

「柳様は？」

「さつき言つたように柳君に縁はない。家族も、友人も、それどころか隣人やクラスメー
トまでね。文字通り世界に突然現れたかのように縁がない。今の彼と縁があるのはあ
の鬼神や僕、君みたいに彼が現れてから触れ合つた者達だけだ。獄卒達ともそれなりの
縁は結ばれてるだろうけど君が一番だろうね。何せ文字通りその身を食べてゐる訳だ
から」

「柳様、これからどうなる？」

「ドーもコーもこれからどんな變質していくだろうね。ま、君と強い縁がある以上、君
に近づく分には問題ないはずだよ」

「縁故に？」

「縁故にさ」

「解つた。お前みたいな性格にならないようここでお前を消去する」

「ちよま、何で!？」

「鬼灯様言つてた。あんなのが増えたら大変ですよと」

「あんのクソ鬼神!!」

「柳様ー、料理作ってー」

「おう。じゃあまたな姐己様」

「またねー」

今日も今日とて三子は柳に蛇を与える。

「あの二人親子みたいじゃね」

「んー、あつしとしちやああの年齢差の恋とか面白かったんだがにやー。ぐふ!？」

「檜、その猫に次ふざけたら三味線にすると言つといてくれ」

平獄卒ゼファードル

会談の後は若手悪魔達の顔合わせ。これは悪魔の行事だ。他の種族はでない。

「……………レーティングゲームは無しか。レヴィアタンが私情を出さなかったか?」

悪魔からのレーティングゲーム見学の誘いは本来予定通りだった。そして、一端地獄に戻る事になった。ゼファードルを連れて。

「くそー！何で俺が雑用なんてしなけりゃなんねーんだよ!」

「はいー!」

「げふう!?!」

ついていくことを嫌がり帰ろうとするゼファードルはチュンの頭突きで吹っ飛んだ。気絶したゼファードルを連れて一同は地獄に戻った。

「事情は解りました。一週間よろしくお願いします。ゼファードルさん」

「はん。最初っからそうやって下手に出てりや良いんだ——へぶら!?!」

ゼファードルは鬼灯に対して偉そうに鼻を鳴らし金棒で壁まで吹き飛ばされた。

「て、てめえ！俺にこんなことしてただですむと思つて——!」

「黙れ」

「——!?!」

「ここではお前はただの悪魔だ。ようこそ、権力の通じない地獄へ。歓迎しますよ平獄卒として」

ギロリと睨まれひい！と後ずさるゼファードル。

「本来は処刑されても可笑しくない国賓、それも他国の王への無礼をたかが雑用ですませているんです。裏を返せば死なない程度ならどんな罰を与えても良いと言うこと。それがいやならキチンと働け」

「五道転輪王庁は最後の裁判所よ。ここに来る前に裁判終わる事が多いから暇と言えば暇ね。そういう時は他の庁の手伝いしたりするね」

つまり基本的には他の庁の雑用みたいなもの。

「でも運いいね。今日は裁判あるよ」

「地獄はいやだあああああ！」

「ほら、早く追いかけるよ」

チュンが言うがゼファードルはふん、と鼻を鳴らし動こうとしない。

「行けって」

「ぬおおお!!」

チュンはゼファードルの襟を掴みぐるぐるぶん回し亡者に向かって投げつけた。

「どーもどーも。雑用頼める悪魔さんでーすね？私は芥子つていいいます」

「……………兎？」

「はい。かちかち山の兎です。あ、かちかち山についてはこの本を読んでください」

ゼファードルは絵本かよとぼやきながら、監視のチュンを見て大人しく読む。

かちかち山

昔々あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんの畑には、野菜を盗む狸がおりました。

「一粒の種は、一粒の種さ。芽えはでないよ実らないよ」

「なんだこいつ、いやな奴だな」

お爺さんは狸を捕まえました。可哀想に思ったお婆さんが縄を解いてしまいました。

「はっ。バカだろこの婆、また畑が荒らされるぞ」

狸はお婆さんを殺し皮を剥ぎ被り、お婆さんの肉で汁を作りお爺さんに食わせました。

「……………は？」

兎は權で狸を何度も叩き、とうとう狸を殺しました。

「……………」

「懐かしいでーすね。でも安心してください。私はもうやりすぎたりしませーんよ」

「だ、だよな。悪いのはこの狸だし…………」

「……………ぬき、狸……………おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸いいー！」

兎どんは叫ぶと亡者達を權で叩きました。何度も、何度も。そして藁の上に寝かせカチカチカチカチ石を鳴らし亡者を灰にしました。

「……………」

ゼファードルは顔を青くして芥子の行いを見ていた。

「それはあっち、それは此方に」

「……………やっつてられっか!」

ゼファードルは巻物を地面に向かって投げつけ——ようとしてチュンの視線に気づき止める。

「そもそも彼奴は何もしねーんだよ!」

「チュン様はデスクワークが出来ませんから」

「俺だつて出来ねーよ! 出来ないからつてやらなくて良いんなら俺だつて何もしなくて良いだろう——がああ!」

チュンの蹴りで壁にめり込むゼファードル。チュンは引っこ抜くと地面に下ろした。

「出来ないとやらないは違うね。私は僵尸、細かい作業は向かないではなく出来ないね」

「チュン様も昔はやろうとしていたんですよ。どうしても出来ないのでやめました」

「は? 第一補佐官様がくだらねえ事やるな」

「くだらなくないね。私鬼じゃなくて僵尸。でも皆受け入れてくれたよ。役に立ってあげたい、でも私暴れるしかできないね。ならそれを貫いたまだよ」

柳は一週間、訪れるであろうチュンの地獄の特訓をどう切り抜けるか考える。とはいえチュンに交渉が通じるとは思えない。チュンと交際経験のある白澤に尋ねたら諦めろと言われた。

「ゼファードルには悪いこと——してないか。利用したとは言え本来なら極刑モノだしな」

これから鬼灯と出迎えに行く。絶対反発してるだろうし、人の形を保っていると良いのだが。

「ゼファードルさん、一週間お疲れさまでした」

「うつつす！一週間ぶりつつす鬼灯さん！」

「……………何でしょうこれ。一昔前のヤンキーみたいなノリ」

「何があったんすかねコイツに」

ヤンキーからヤンキー（舎弟）にシフトチェンジしたゼファードルを見て困惑する二人。

「あ、柳。丁度良いとこ来たね。さ、さっそく修行始めるよ」

「……………はい」

「柳さん。大丈夫ですよ、一度死んでも亡者になるだけなので」

「大丈夫な要素はどこに……………」

銀髮仮面

「さて、行きますよ」

「いやー、漸くだねえ。ワシ冥界行くの初めてだよ」

地獄の大王閻魔、そして閻魔大王第一補佐官は冥界行き列車の列車に向かう。

「大王、嘗められるわけには行かないので一言も喋らないでくださいね」

「君が一番ワシをなめてない？」

「うひゃひゃ！そりゃあ仕方ねーってもんよエンマ様。だってあんた威厳ねーもん」

「そんなことないわ。大王様のお髭と威厳たっぷりだと思えますわよ」

と、銀髪の男が爆笑し金髪の女性がたしなめる。どちらも仮面で顔を隠している。

「ところでその仮面は？」

「サプライズサプライズ。悪魔の連中がどんな反応するかお楽しみつてな！」

「私は息子に付き合ってるだけよ。親子らしいこと全然してこなかったしね」

二人の足下の執事服を着た二足歩行の山羊ははあ、とため息を吐いた。

「まあ、いざれあなた方の存在は報告しなくてはならないですし、あなた方が旧魔王派と通じてると思われても後々面倒ですしキチンと正体を明かすなら良いでしょう」

「良いんだ」

と、山羊が呟いた。

冥界のパーティー会場にやってきた鬼灯達。

異教の者達に不躰な視線が飛ぶが鬼灯の鋭い目つきと目が合うと慌てて逸らす。

「お初にお目にかかります閻魔王殿。私は魔王サーゼクスと申します」

「ああこんにちは。君が今の魔王だね？魔王と会うのはサタン王以来だよ」

「サタン……？」

「ああそうか君達は知らないんだっけ？サタン王って言うのはね——」

ドゴォー！とエンマが壁まで吹き飛んだ。隣にいた鬼灯は何時の間にか金棒を振り抜いていた。

魔王達ですら反応できない速度で、さらにあの巨体が吹っ飛ぶ一撃。死んだんじやないかあの人、と思っているとエンマはいたた、と立ち上がった。

「酷いよ鬼灯君……」

「その真実は隠せと言っているでしょう。今の所は、ですが……」

「でも何時かは教えるなら別に今でも」

「禍の団が動いている以上余計な混乱は無くすべきです。終えてから教えましょう。幸

い、貴族どもを潰す良い手は見つかりましたし」

「ああ、あれね。八重垣君とクレーリアさんの思い出の場所に隠されてたんだっけ？八重垣君、恥ずかしそうにしてたよね」

小声で会話するエンマと鬼灯だったが、割り込む者はいない。閻魔大王という異教の地獄の王とそれを吹き飛ばした部下に萎縮しているのだ。

「鬼灯様ー！見てみて、黒猫捕まえたー！これ配達員に教育しよーゼブラー！」

黒猫を掲げて走ってきた銀髪仮面（と、先程魔王達に名乗っていた男）は下から抉るような金棒に顎を打たれ天井近くまで飛び落下した。が、直ぐに立ち上がった。丈夫だ。

「捨ててきなさいー！どうせあなた仕事のせいで動物飼えないんだからー！」

「そんな事ねーって！この猫ちゃんだって懐いてるっすー！」

「にやにやにやー！ふしやー！」

思い切り引つかかれていた。

「あの……………」

「ん？何だい白髪チビ」

「チ、チビ!?その……………黒猫見せて貰って良いですか?」

と、奇行を公然の場で行う銀髪仮面に近づく猛者がいた。グレモリー眷属の塔城小猫

だ。

「その猫、見せて貰って良いですか？」

「良いけど返せよ？後で三味線にするんだから」

「ふにゃ!？」

「配達員にするんじゃ……………あ」

「あ……………」

猫は小猫の手からピョンと逃げ出すと会場の外に向かって走る。それはもう、全力で。

「逃がすか！捕まえて、どうしよう!？」

「知りませんよ!？」

「てか何で君までついてきてんの？みたところ化け猫だけ……………いくら男に相手にされない身体だからって雌猫に発情するのはおっと!？」

「ツチ」

銀髪仮面は小猫の拳を躲し猫を追いかけた。走っていく小猫の姿を見たイツセーも取り敢えず追いかけて、イツセーのストロー……………イツセーと相思相愛ながら未だつき合っているわけではないリアス・グレモリーもその後を追った。

そこで目にした光景は……………

「ヒヤツハー！食らえや猿！猿には猿にふさわしい攻撃をくれてやる！」

「うおお！くっせ、なんだこりゃ!!」

「うひひ！臭いの元を蒸留して濃縮した特製液だ！洗っても落ちねーその名も『これを投げれば服屋が儲かる』！ほら、猿ってウ○コ投げるじゃん？」

小さな壺を投げられ壺が割れると同時に茶色い液体が服にかかり鼻を押さえる美猴と、その美猴から距離をとる黒髪の美人。そして何ともいえない表情をした小猫だった。

「なんか変なのが……まあ良いにゃん。私は白音を連れて帰るわ。美猴と一緒に帰りたいくないから一人で帰ってきてね」

「おいふざけんな！」

「知らない。にゃ？何お前、邪魔する気？」

美猴の文句を無視して小猫に歩み寄ろうとした美人だが、その間に銀髪仮面が割り込む。

「ふっ。連れていかせーねぜ。この子は、俺ちゃんと漫才でトップを目指す約束をしたからな！」

「……………してませんけど」

「とか言ってるけど？」

「ふっ。さっそくボケたか！任せろ！突っ込んでやるぜ！」

「私がボケなんですか!？」

何だろ。この銀髪仮面。話しててすごく疲れる。

「っーかあんた黒歌だろ？知ってるぜ……」

「……………」

「藤舞さんが謝りたがってたぜ。キチンと育てられず、あんな男を優先したことを後悔してるって」

「母様が!？」

「……………母様?？」

銀髪仮面の言葉に黒歌が目を見開き叫び、小猫が反応する。慌てて口を押さえるも小猫は黒歌と銀髪仮面をじつとみていた。

「今なら取引次第で日本地獄が保護するぜ。お前の知る禍の団の構成員。詳しい情報はヤナギンが思い出してくれるだろうし」

「……………私に、ヴァーリ達を裏切れって言うの?？」

「ちなみに日本地獄には天龍より強い龍の因子を持つ雄が——」

「のった!」

駒王の七不思議

「んじゃー俺はこの子連れてくから後は任せませ」

銀髪仮面はそう言うのと黒歌を連れて行く。

「あ、おい待て！黒歌、ホントに裏切る気かよ!？」

「うん。ばいばーい」

美猴の言葉にあっさり手を振り去っていく黒歌。美猴はツチ、と舌打ちするとイツセーに向き直る。

「仕方ないねい。んじゃ、この苛立ち、アンタにぶつけさせて発散させてくれよい」

「くせえから近づくんじゃねえ！部長のおっぱいに臭いが移ったらどうすんだ！」

「はあ!?!んだと、ふざけんなもう臭くねーだろ！臭さ通り越して鼻が痛くなつて来たわ
！」

「末期じゃねーか帰れよお前！」

イツセーと美猴が言い合う中、空間に裂け目が現れ中から眼鏡をかけた男が現れる。男は鼻を押さえると無言で裂け目の中に戻った。

「あ、おい置いてくな！」

美猴は慌てて閉じようとしていた空間の裂け目に飛び込んだ。

「……………帰ろ」

「……………そうね」

「にやあ」

「失態ですね」

シエムハザが開口一番にそう言った。禍の団独立部隊ヴァーリチームの襲撃。しかも対処したのは地獄所属の銀髪仮面だということのだからふざけている。いや、銀髪仮面の名前ではなく悪魔が対処出来ていないという事がだ。

「過ぎたことを言っても仕方ないでしょう。今はどう落とし前つけさせるか話しましょう」

「まあまあ良いじゃない。テロリストが此方の事情を考えてくれるわけないんだし」

「そんな甘いこと言って！そもそも、向こうが此方の事情を考えないからこそ備えるべきでしょう！」

「……………」

鬼灯の言葉にばつが悪そうな顔をする魔王達。結局、悪魔の駒に関するデータ開示と賠償金で手を打った。

「それより、えつと………銀髪仮面君がはぐれ悪魔黒歌を捕らえたそうだけど」

「おうともよ！まあ捕らえたつーより司法取引を持ちかけたんだけどな」

「彼女は悪魔の世界に於て罪を犯した身。同盟相手とは言え勝手なことをされては困ります」

「えー、堅いこと言うなよー、そんなだから独身なんだよ」

「堅いことと言われましても主を、つまり貴族悪魔を殺したのです。そう簡単に――」

「あの、レヴィアタン様………」

と、不意に悪魔の上役の一人が拳手をする。

「体調が悪いのでしたら無理せずお休みになつてください」

「何なのよおじいちゃんまで！私がまじめにやったらそんなに変!?!」

「はい」

「まさかの余所から!?!」

即答した鬼灯にセラフォルが思わず叫ぶ。

「貴方今までマトモな格好してませんでしたし。いえ、別に嫌いというわけではありませんが」

「そ、そうだよね!?!別にあの格好だつて別に………」

「まあ、あの格好で会議に來られた日には嘗められていると判断して肌ごと脱がしてま

したが」

「……………鬼灯君つてひよつとして柳君のお父さん。いや、顔立ちはちよつと似てるぐらいいけど目つきが……………」

「親子ではありませんよ。ていうか、普通あんな格好している奴なんて居ませんし、あんな格好で来られたらきれますよ」

その頃現世の神社では、社の中でイチヨウと柳が隙間から客を見ていた。

二人は一度顔を放し、顔を見合わせる。

見た？と言うように外を指さすイチヨウ。柳は頷き、もう一度外を見る。

そこには巨漢がいた。

その大きな手に掴まれた鈴緒は縄というより紐のよう。ガランガランと本坪鈴を鳴らし、手を合わせる。

「神様仏様——」

仏がいるのは寺だがまあそこは突つ込まず外を眺め続ける2人。カツと目を見開く大男。

「——ミルたんを魔法少女にして欲しいによおおおおお!!!」

「——!?!」

「によ!?!」

その大声は衝撃波となり柳とイチヨウを吹っ飛ばし奥で遊んでいた三子がビクツと震え玩具箱をひっくり返しその中に隠れる。

「……………何だったのだ、今のは」

「駒王七不思議の一つだ。デートする鎧カップル、動くダンボール、深夜疾走する自転車、駒王の雪男、テニス部のデュラハン、町外れのN I N J A。そして、最後の七つ目、世紀末魔法少女ミルたん……………」

「妖怪か? 尋常ではない気配を感じたぞ、と言うかなんだあの格好……………」

「魔法少女の正装らしい……………」

先程来た大男は、猫耳付きのゴスロリ服を着ていた。テレビで見る魔法少女のような……………

黒歌の処遇について交渉する中、不意に一人の男が手を挙げた。

「ちようど私の僧侶枠が開いていて。この際、私の眷属にするのはどうだろう」

「ま、待て! それならば私だ!」

と、下心丸出しで監視役を立候補する上役達。

「まあまあここは俺に任せてくれよ。俺の顔に免じて、な?」

「何だと貴様!偉そうに、だいたいなんだその仮面は!?と言うか顔見えん!」

「おっと、忘れるところだったぜ」

「「——!?!」」

銀髪仮面がそういつてヒーロー風の仮面を取ると、その下から……ひよつとこが現れた。

「何つつて!引つかかったー!」

誰に対して引つ掛けたのかは解らないがさらにひよつとこの面をとる銀髪仮面。その下から現れた顔を見て、誰もが驚愕する。

「リゼヴィム・リヴァン・ルシファー」

「イエス!前魔王ルシファーの血族、地獄より舞い戻ってきたぜ!」

「あれつて死んだと思つたキャラが言う台詞ですが、彼の場合間違いじゃないんですねえ」

「そして此方が俺のママン!」

「はあい♪久し振りねゼクラムちゃん」

リゼヴィムが何処からか取り出した紙吹雪をまくと仮面をしていた金髪の女性も仮面を外す。

現れたのは赤い双眸を持つ誰をも魅了しそうな美女。彼女はリリス。聖書に於て神が生み出した男女の片割れ。アダムの肋から生まれたイヴとは異なるキリスト教に於て混じりつけないの完全な女。

そして、悪魔に身を墮とし数多の悪魔を生んだとされる女悪魔だ。

浄玻璃の鏡（レプリカ）

「リリン……………」

リゼヴィムの素顔を確認した途端、アザゼルは忌々しげに顔を歪ませる。

「てめえ、何で……………」

「閻魔大王殿。これは一体……………」

「大戦終結後暫くして、保護を求めてきたので保護しました」

と、狼狽する二人に鬼灯は淡々と応える。

「そゆこと。だから俺は禍の団にや所属してねーぜ。地獄で獄卒やってんの」

「事実です」

「そいつが実の孫に何したか知らねーのか？」

「存じてます。だから罰を与えました」

「な!? 貴様、高々小国のあの世風情が偉大なるルシファアの血ぞ——!?!」

叫んだ上役悪魔の顔面に金棒がめり込む。鬼灯はそれを引き抜くとついた鼻血を気絶した男の服で拭く。

「ケケケケ! そう言うことだよん。つ・ま・り! 俺は地獄所属の国賓なんだぜ? 手え出し

「ちゃ駄目よん。だが俺はルシファード。悪魔側からしたら無視できん言葉だよねん♪」
「「……………」」

確かにその通りだ。しかもほぼ全ての旧魔王が寝返った中禍の団に属さぬルシファードとか、ネームバリューが大きすぎる。

「つーわけで黒猫ちゃんは地獄で保護する。何なら地獄特製浄玻璃の鏡使う？ 変成王様からレプリカ借りてきたし」

そう言つて懐から取り出した手鏡を掲げるリゼヴィム。その中に、なにやら映像が映りだした。

『クレーリア・ベリアルは余計なことを知った。殺せ。幸い、理由はある』

『はっ。かしこまりましたゼクラム様』

「ありや？と首を傾げるリゼヴィム。うっかりスイッチを押してしまつたらしい。

「停止ボタンどれやったかなあ？」

と、適当に弄ると画面が変わる。

『貴様等に王の駒をやろう。これがあれば、貴様等は力を手にする。が、対価として勝敗は我等に従え』

『素晴らしいぞ！姉でこれなのだ、まだ幼いうちに育てればあの白猫も！』

『ああ、サーゼクス。どうして貴方はサーゼクスなの？』

『僕の手を取ってくれグレイフィア。そうすれば、僕は君に全てを捧げよう。君が好きだ、愛している』

『嬉しい。私も、愛しているわサーゼクス』

『ククク！出来たぞ、これぞ閃光フレイシャー・シャイニングと暗黒オア・ダークネス・ブレードの龍絶剣!!』

『ぷぷ！アザゼル、こんなモノを……ばらまいてやりましょう』

『儂、格好良すぎない？眼帯に髭とかマジしぶくね？しかも普段ふざけてるとか超強いじじいキャラまんまじゃね？』

『は、はあ……』

『こうか？いや、ここはこうして……ここで黄昏を行おうではないか。ふ、流石私。どんな台詞、姿勢でも格好良すぎる。む？何だフェンリル、その顔は……』

『ううう、彼氏欲しい……彼氏欲しいよう』

『ああ姉さん。今日も綺麗だよ姉さん。こんな抱き枕ではなく、何時か本物も抱きに――』

画面が次々変わり喧しいので鬼灯が奪い取りスイッチを切った。

「サンキューー鬼灯様！」

「待ってくれ。情報が多すぎて追いつかなかったが、今ゼラム殿がクレーリア・ベリア

ルを殺せと言つてなかったか？ いったいどういう……」

「え？ そりゃゼクラムおじちゃん王の駒の存在知られたから殺そうとしてた過去が映つただけじゃ……あ、やべ。今の無し」

と、慌てて口を押さえるも多くの視線がゼクラムに向き、またゼクラムから数人の者が視線を逸らす。それが何よりの証拠。ゼクラムが何かを叫ぼうとし魔王達が反応しようとした瞬間。

「おらあー！」

ベリアル家当主がゼクラムの顔面をぶん殴つた。

「殺す！ 覚悟しろゼクラム！」

「待て、貴様……余所の神話を信用するつもりか？」

「少なくともためーより信用出来らあー！」

「ぐふ!?」

滅びの力で応戦しようとするも「無価値」に変えられ何度も何度も殴られる。その形相に他の者達は止められないでいる。

「……………リリン、貴方何かしたの？」

「俺は事前に姪を殺した奴は貴族の中にいるって教えてあげただけだよん？ 誰かは言つてなかったけどどうっかりうっかり♪」

「お前が、泣くまで、殴るのをやめない！」

「……………魔王様方。この件については？」

鬼灯は頭を押さええはあ、とため息を吐きながら魔王達をジロリと見る。

「そ、そうだね。ゼクラム殿は、初代悪魔の生き残りで、地位もある。まずは事実と照らしあわせて検討し——」

「私は、検討すると言って何もしない輩をみると殴り飛ばしたくなるんですよ」
「今すぐ私の眷属に証拠を集めさせてこい！早急にだ！」

サーゼクスの言葉に控えていた兵士が動き部屋から飛び出した。ベリアル家当主はふう、と血に染まった拳で額の汗を拭いていた。

「彼、素質ありますね。受堅苦惱不可忍耐じゆけんくのうふかにんたいしよか十一じゆういちえんしよ炎処で働かせてみたいですが……………

「貴族はなあ」

「貴族じゃなかったら誘う気だったの鬼灯君？」

「ええ。あれは芥子さんタイプです」

「あー」

地獄はどこまで行ってもマイペース。

「……………ふむ。ワシ、もう入っても良いかのう？」

北欧の主神は嫌味の一つでも言ってもやろうとしたが、目の前に広がる混沌に顎髭を撫

で
た。

ルシファアの任命

「あらオーデイン様。お久しぶり、素敵なお髭ですな」

「む？リリスか……何じゃお主復活したのか？うむうむ相変わらず良い女じゃな。どうじゃ、今夜久しぶりに飯でも」

「あら嬉しい」

長い髭を撫でていた眼帯の老人、オーデインがリリスを確認するなり誘い、リリスもあつさり誘いに乗る。が、お付きの戦乙女ヴァルキリーが咎める。

「ご自重くださいオーデイン様。ヴァルハラの名が泣きます。それと貴方も、そう軽々しく男性を誘ってはいけません。恋愛は根気よく、一人の相手に絞るべきです」

「あら、私結婚経験あるわよ？」

「うえい!？」

「すまんのー。此奴は固くてな。こんなだから男も中々出来ん」

「ああ、それで酔いながら彼氏欲しいなんて……」

「何で知っているんですか!？」

リリスの言葉に叫ぶ戦乙女。リゼヴィムが玩具を見つけたみたいな顔をする。

「うひゃひゃ。残念だねえ、しかもママンはモテてモテて子沢山。未だに処女臭えアンタとは違うのさ」

「うう、うわーん！わ、私だって素敵な英雄とエッチなことしたいのにー！」

「ほほう。なら良い物件を紹介してやろう！銀髪って部分しか見てくれないあげく姉さん扱いしてくるシスコンの変態と家事が得意で面倒見も良く高収入な有能、どっちが良い？」

「後者で」

「即答wwwだよね！」

と、リゼヴィムは懐から写真を取り出す。

「オタクの神話にさく、アレいたじゃん？ほら、えつと……シグルドだっけ？……龍の心臓食って変な力得た奴」

「変て……」

「それと似たように龍の血肉食って龍の力を取り込んでる男がいるのよ。しかも数十年で閻魔大王補佐官補佐まで上り詰めた有能で高収入、オマケに独身で恋人もいない。あ、これ写真」

「わ。顔も中々……私って引くほどの美男子よりクラスに一人はいる人気者の方が好きなんですよね。親しみやすくして」

「まあバツイチだけどね。これ子供」

「あ、可愛い」

「……リゼヴィム君さあ、あれ解つててやつてるのかな？」

「でしようね」

と、閻魔と鬼灯がリゼヴィムの悪魔の誘惑を見ながら眩いた。

「おお、リリン。久しいな、何じや貴様は真なる血筋がくとはやらんのか？」

「興味ねーつすよ。普段おちやらけてる強そーなキャラでやつてくつす」

「……………ほう」

「あーけどなー！俺も眼帯＋長髭とかやってみよーかなー!? 渋くて素敵と思わねー？ 近くの人について聞いちゃうぐら——べへ!」

リゼヴィムの言葉にオーデインがピクリと反応した瞬間リゼヴィムが鬼灯の蹴りで

吹っ飛び壁に頭をめり込ませた。

「お久しぶりですオーデイン様」

「う、うむ。あれ、良いのか？」

「何か問題が？」

「あー……………うむ。昔のまんまじゃな」

鬼灯の対応に頭をポリポリかくオーデイン。取り敢えず怒らせないようにしよう。

そう心に誓った。

「して、儂はお主等の内乱には興味ないのでな。レーティングゲームを見にきたのでな」
「そうでしたね。ちょうど良かった、対戦カードを北歐、地獄のトップそれぞれで決めてみては？」

「ふん。出迎えにこなかった謝罪か？まあ良い、儂はグレモリーじゃな。赤龍帝に聖魔劍、墮天使幹部のハーフとついでにルシファーの妹。興味深い」

「あー、ならワシはゼファードル君かなあ。一週間だけとは言え地獄にいたし」

「チュンさんの扱きを受けて人の形を保っていた彼がどれだけ丈夫かパワータイプのグレモリー眷属に当たってみようと言うことですか」

「違うよ!?ワシ普通に応援してるだけだよー」

「で、結果はどうなったんですか？」

『初戦はゼファードルさんが戦車もかくやというタフネスさで戦車、元シスターの僧侶を倒し、騎士を眷属半数を巻き添えで撃破。吸血鬼は仲間ごと止めて、ルールに『仲間を止めることを禁じる』があったので失格。残った赤龍帝とグレモリーに対してゼファードルさんが魔力を込めた拳で殴り合い。しかし赤龍帝がグレモリーの胸を公然

の場でつつくという奇行に走った瞬間禁手に至り、さらに女性限定で胸の声を聞くという訳の分からない技を使用しゼファードルさんの眷属の一人の思考を読み、グレモリーへの不意打ちを止めました』

「……………胸を、つづいたんですか?」

『ええ、堂々と。あの淫獣よりも淫獣な生物がいるとは思いませんでした。衆合地獄の予定でしたが、あれは女性獄卒が危険ですね。まあそれで、ゼファードルさんが余計なことするなと叫び懲りずに殴り合い。ポロポロになりながらも赤龍帝を撃破したのですが、グレモリーの女王が絶対に許さないと突然きれ雷光を放ちました。そしてゼファードルさんの方が負けました』

「……………アザゼル総督の話では今代の赤龍帝つて歴代一才能無かったのでは?」

『アレは寧ろセンスの固まりですね。目覚めさせ方と編み出す技がおかしい』

全くだ、と同意し頷く柳。と、電話して手が休まっていたのに不満を覚えたのか姐己が身を振る。

「とと。すいません鬼灯様、姐己様がはやくしろつて促してきたので…………」

『いえ。長々とすいません。質問が一つだけあっただけなのですが』

「質問?」

『冥界の子供達の間で、アレ流行るんですか?』

「流行ります」

『地獄の娯楽を直ぐ流しましょう。テレビ局への通達お願いします』

それだけ言うと電話が切れた。

「終わったの〜？早く続きをして欲しいわあ」

「はいはい……………」

「……………」

柳が姐己の毛繕いを再開すると部屋の隅にいた三子がお手玉をやめジツと見つめる。

「我も後でやって」

「あら、貴方本性は龍でしょ？してもらえるのかしら？」

「髪の毛。この姿ならある」

「ああ、成る程ねえ……………」

冥界であるニュースが流れ冥界中が騒然とした。

それは、始祖悪魔リリスと初代ルシファーの子、リゼヴィムの存在。旧魔王派は敵対したと報道されたがルシファーだけは今の冥界に敵対しなかったというのだ。

まさに英雄的。利用しない者はいない。ゼクラムはある紙を渡していた。それは、リゼヴィムが魔王になるという意思表示のキャンペ。

どうせ何も考えるつもりはないガキだ。扱うのは容易い。現在屋敷から出ることを魔王から禁じられているが、リゼヴィムの口添えでどうとでもなる。

テレビを付け、リゼヴィムがカンペを開くのを見て笑う。が……………

『いらね』

リゼヴィムはカンペを魔力で燃やすとニヤリと笑い手招きする。現れたのはサーゼクス。

『俺はサーゼクスきゆんにルシファアの座を正式に渡すことをここに宣言するぜい！貴族共はこれを支え、手助けしろよお！それとママンを殺しかけた奴らの生き残りゼクラムは死ね！』

『私は別に怒ってないけどね』

「——！！」

その言葉にゼクラムは目を見開く。正当なルシファアの血縁からの、正式な委任。所詮本来の魔王ではないとサーゼクスを見下していた大王派は、サーゼクスに乗り換え。正当性がないという理由で日和見を決めていた貴族達も流れる。

何より最後のリゼヴィムとリリスの言葉。悪魔の始祖、それもリリスを害したとなれば、ゼクラムの発言力は減る。

「やられた、あのガキ——！！」

カンペを受け取り、笑顔で頷いておいて……！

北欧の悪神ロキ。彼は主神オーディンの命で面倒だと思いつながら娘のヘルを連れて日本の地獄に来ていた。

「ふん。極東のあの世など、何故いちいち視察せねばなんのか」

「……………眠い」

ロキは忌々しげに鼻を鳴らし地獄に入る。

「ようこそロキ様。今回案内役を勤めさせていただきますと柳と申します」

「ふん。案内なら、さっさと済ませろ」

「地獄めっちゃ怖い」

「パパ。私、また地獄来たい」

ロキとヘルの地獄見学

「ようこそロキ様。今回案内役を勤めさせていただく柳と申します」

娘と息子と共に来た地獄で、人の良さそうな閻魔大王を内心見下した後、案内役としてやってきた柳と名乗った男を見る。

日本の獄卒、鬼とは見えない細い身体。角も見えない。

「本当は鬼灯君に頼みたかったんだけど彼今日冥界のテレビ局に行ってまして。すいません、何分急だったので」

「突然明日行くから案内しろ、でしたからね」

「くら柳君！」

「ふん。案内なら、さっさと済ませろ」

柳の言葉に閻魔が叱るがロキは極東の者に礼儀など気にしていないと言いたげに鼻を鳴らす。

(……………しかし小さいな此奴。フェンリルなら一口で食べそうだ)

ロキの考えを読んだのかフェンリルがグルルと唸るが別に良いと止める。

「リル君は思ったより小さいですね」

「——っ」

突然放たれた言葉に内心驚くロキ。心でも読む能力を持つているのだろうか？

「今は魔法でサイズを変えている」

「ワフウ」

「成る程……」

「その程度のこといちいち聞くな」

「散歩したい時にしてくれないと」

「ワウ」

「ははは。それはそれは……ん？今何か言いました？」

フェンリルの鼻の上を撫でてやると気持ちよさそうに目を細めるフェンリル。柳は

思い出したようにロキを見た。

「貴様、フェンリルの言葉が解るのか？」

「はい。等活地獄に通っているうちに……」

「まずは地獄でも有名な釜茹で地獄に……」

と、柳が扉を開けると鍋の中で溺れる閻魔。柳ははあ、とため息を吐いた。

「あ、柳君助けて柳君！」

「ご覧くださいあれが閻魔大王です。現世では「閻魔は熱く溶けた銅を飲まされている」と記されているように、時に自ら苦行を……」

「助けてつてばあ！あれ、前にもこんなことあつたぞ!？」

「ツチ」

「!？」

舌打ちしたぞ此奴、と柳を見るロキ。柳はしかし気にせずヘルに話しかける。

「ヘル様。ああいうギザギザを見ると同じギザギザを合わせたくなりませんか？」

「なる」

鍋の縁を指さし尋ねる柳にヘルはコクリと頷く。

柳は鍋の一つを持ち上げる。片手で。

「ちよ!?!何する気柳君!ワシ君のボスだよね!？」

「私は鬼灯様の直属の部下ですので。バカがバカやつたら二度とバカやる気にならないようにお仕置きしろと」

「バカつていった今——」

ガン!と鍋を落とす柳。ギザギザの部分がちょうど噛み合い中からドンドン叩く音が聞こえる。

「あれ柳様、お客様ですか？」

「なげー髪」

と、そこにやってきた子供のような鬼達。柳はちょうど良いと蓋された鍋を指さす。

「あれ火力上げといて」

「え？あ、解りましたー」

小鬼達は返事をするそと薪を持って鍋に近付いていった。

「い、良いのかあれ……………」

「どうせもう死にませんし」

「……………」

日本の地獄は、部下も上司に厳しいのだな。決め台詞をメモしていたノートを捨てられたぐらいで部下をクビにするんじゃ無かった。

「ここは等活地獄。主に動物を虐めた者が落ちる地獄です。昔は色々あったんですが減らされました。象に酒飲ませて暴れさせた奴が落ちる地獄なんて一人しか居ませんでししたし」

「二人いたのか。何があったんだそいつの過去……………」

ロキが呆れている中白い犬が柳に駆け寄ってきた。

「柳様だー！ねーねーブラツシングしに来てくれたの？」

「こらシロ！お前事中だろ！すいません柳様」

その犬を追い現れた別の白い犬。その犬はフェンリルに気付くと暫く目を見る。

「……………ふつ。成る程、図体ばかりデカいが子犬か」

「え？うわでつけえ！新入り？」

「ヴウウ!!」

子犬扱いされて牙を剥き出しにするフェンリル。が、気にせず続ける犬。

「子犬だろう。尊敬できる相手を見つけていなければ、自分がボスだと思ってもいけない、そこらの野良だ。若造、強さだけが犬の全てではない」

「ねーねー何食ったらそんなデカくなるの？あ、ここ食い放題だよ。君も食べる？」

「夜叉一、シロ連れてけ」

「はい。行くぞシロ！」

夜叉一と呼ばれた犬はシロを引き連れ去っていった。フェンリルはその背中をジツと見つめる。

「ワフ？」

「まあ年齢ならリル君より上だな。あ、実際そこらの亡者は食い放題だよ」

「グオウ！」

フエンリルは尻尾を振るうと亡者を数人食い始めた。

「こちら最近新設された地獄になります。正式名称はまだなので食品サンプルの家と覚えてください」

「わ、パパ、すごい。見て、日本の技術」

リアルに作られた食品サンプルで出来た家を見てヘルがテンションをあげる。仮面をしていて顔が見えないがきつと笑みを浮かべていることだろう。

「腹を空かせ寄ってきた亡者達を犬猫の獄卒が襲います。ちなみにこれお土産のストラップと目覚まし時計。いりますか？」

「欲しい」

「ストラップは500円。目覚まし時計は2300円になります」

「パパ買って」

「……………二つずつ貰おう」

「はい。お荷物になるので閻魔殿に届けておきますね」

柳がパンパンと手を叩くと何やらエンジン音のような物が聞こえてくる。そちらに振り向けば炎を吹き出す骨で出来たバイクのようなものに乗った着物の女性が迫ってきていた。

「いける！今なら、音速のその先に！」

「行くなっつーの」

そのまま通り過ぎようとした女性の首を掴んで止める柳。バイクは暴走して岩に突っ込み男が岩にめり込む。

「こちらお迎え課新人の藤舞さんです。火車さんの手伝いをさせてみたところ、見事にスピードの世界にはまりました。藤舞さん、これ閻魔殿に持つてといて」

「はいにやー。飛ばすぜ！」

「……………因みにあのバイクに引きずられる男は？」

「藤舞さんの元夫。娘を認知せず、どころかいざとなったら研究に利用しようと資料を残しておいて結果娘二人を不幸な目に遭わせた」

「……………そうか」

「パパ、あのバイク欲しい」

「すいませんヘル様。あれは量産化が出来なくて今はまだ二台しか」

「……………そう」

シヨンボリ落ち込むヘル。プラモならありますからと柳がプラモを渡すと喜んだ。

「ニヤツハー！」

「……………」

ロキは引きずられていく男を見て、今の光景を気にしないことにした。

「こちらは黒縄地獄。ここは特に目立ったモノはないですね。強いて言うなら良く藤舞さんが目撃されます」

「そ、そうか……」

「衆合地獄。邪淫を働いた者が落ちます。動物とやったりオス……もとい男同士でやったり」

「何故そこで私を見る。言っておくがスレイプニルは産みたくて産んだんじゃないからな！」

スレイプニル。北欧に登場する幻馬。雌馬に化けたロキが牡馬とやって産んだ。

「ここでは毎年恋の病で辞める者が多くいて……」

「まあ、こんな場所ではな」

「恋愛関係のいざこざもあって、俺も何度相手を半殺しにしたことか」

「……お兄さんモテるの？」

「これでも出世は早い方なので」

と、柳は肩をすくめた。

「ここは血の池地獄。昔は吸血鬼にも人気でした」

「昔？」

今は違うのか、と尋ねるロキ。吸血鬼にとっては夢のような池に見えるが。

「カーミラ派とツエペシユ派が互いに公開するなどか言い出して、仲良くするように言ったら人間風情がと言ってきたのでついあなた方の真祖だつて元々人間でお前等は真祖に喰われた人間の子孫だろ。何が貴族だ歴史しか価値無い癖にと言つてしまひ怒らせて襲われ、全員血の池に沈めました。今でも時折吸血鬼があがります。あ、ほら彼処……」

柳が指さした方向には血の池に浮かぶ吸血鬼らしき男が。

「くそ、人間の分際で……」

「後百年ほど沈めるか。国賓ではなくただの客人のくせして……」

柳はそう言つて手頃な岩を投げ吸血鬼を水底に沈めた。

「……………国賓で良かった」

「ごんの狸爺があああ！」

「人を騙す嘘つきめがあああ！」

「パパ、あの兎たち可愛い」

「可愛い、か？」

「あちらをご覧ください。そう、プテラノドンです」

「おお……」

「テイラノに乗ってみます？あらかじめ許可は取っておいたので」

柳の言葉にヘルは仮面の奥の瞳を輝かせた。

「そう言えばロキ様はミドガルズオルムを大量生産しているのですよね？」

「そ、それが何だ？」

「ウチに分けてもらえませんか？悲苦吼処、千の首を持つ龍にかみ砕かれるとされている地獄なのですが彼処は千匹の首長竜に働いて貰っているんです。しかし恐竜が絶滅した今、年々数が緩やかに減っていくので」

「ミドガルズオルムを代わりに、か。素直に言うことを聞くとでも？」

「聞かないなら聞かせるまでです」

「さて、一通り回りましたし夕餉に致しましょう。このままテイラノに乗って閻魔殿に戻ります」

「お兄さん、恐竜のグッズある？」

「ありますよ」

「ん？」

テイラノの上で寛いでいると不意に建設中の何かが目に入る。

「あれは何だ？」

「あれは私が提案した地獄です」

「ほう、どんな？」

「虐めや犯罪などを「若気の至り」で済ませる親や本人を落とす地獄で、虫や魚に変えられ若い頃の自分や自分が追いつめた者達に嘲笑され罵倒され踏みつけられる地獄です。まだ建設中で、数人しか入れてませんが………あ」

と、その時一人の女が飛び出てくる。亡者だ。獄卒に追われるも必死に走っている。が、柳が亡者に向かって跳び顔を踏みつけ着地した。

「裁判で決まったんだ大人しくしてろや」

「う、うぐぐ……な、何なのよ!? あんなの、ちよつとした悪ふざけじゃない! 殺す気なんて無かつたし、死んだのは向こうの勝手でしょ!? それも何年も前のことをグチグチと
!」

「黙れ」

「「——!?!」」

柳から放たれた殺気にその場の全員が固まる。

『皆やつてる』『自分だけじゃない』……これだけでお前等は直ぐ遊び感覚だ。相手の気持ちなんて考えもしない。しかも、相手に何かしら一つでも欠点があればそれを責め立て正義の味方気取り。お前は、何だったか……気持ち悪い顔で周りを不快にさせる女を学校から追い出したことを楽しそうに語ってた女だったか？会社ではそれを誇らしげに……」

「み、皆喜んでたじゃない！それが普通なのよ！」

「普通？皆？それで相手が自殺して責められても、可哀想な私をアピールするのがか？ああ、普通だろうな。それが一般的だ……カーストが高けりや罪着せられて可哀想ですむもんなあ」

女の髪をつかみ背中を踏みつけながら持ち上げる柳。背骨がミシミシ軋み髪がブチブチと抜ける。

「殺すぞハゲ」

ブチチ、ブチン！と女の髪の毛を一本残らず引き抜く柳。頭皮ごとごとそり抜けたそれを亡者の口の中につっこむ。

「そのハゲ、虫化の第一号にしておけ」

「は、はい！」

柳の言葉に獄卒は亡者を連れ大慌てで立ち去った。

「お見苦しい所をお見せしてすみません」

「い、いや……しかしあの地獄、私怨か？」

「現代に必要な地獄ではありませんがまあ作つた理由は十割がた私の私怨ですね」

ロキは、地獄の光景を思い出す。

元夫を引きずり回す猫又。

權を振り回す兎。

亡者を踏みつけるデカイ兎。

数十億の虫の群。

ウザすぎる女神。

その女神にとんでもない殺意を向けている植物生まれの人間。

とある鬼の私怨により建てられたという精神を削る顔の集合体の柱にくくりつけられた亡者。

夕餉の際漸く自分達の王を閉じこめていたことを思い出し助けにいく獄卒。

フエンリルが尊敬しついで行くことを決めた地獄犬。

先代魔王の息子をボコボコにしてから火で炙り火傷に塩を塗り込み油で揚げた幼女。

吸血鬼を血の池の底に沈める獄卒。

女の髪を頭皮ごと引き剥がす獄卒。

魚なのか植物なのか不明な何か。

結論

「地獄めっちゃ怖い」

「パパ。私、また地獄来たい」

ヘルは沢山のお土産を前に期待に満ちた視線を向けてくる。

「……………黄昏は、良いか。まだ全然先で。うん……………」

猫親子の再会

兵藤一誠の頭のおかしな変態性を目の当たりにして、さらに同等の変態が二名いると柳に聞いた鬼灯は、その学園の教師として監視役を担っている柳に、現世に戻る前の3日間休みを与えた。

よって柳は昼近くまで眠るつもりだったが、不意に気配を感じて目を覚ます。

ボンヤリとした思考で三子が起きたのかと思ったが重い。一子と二子も交じって遊んでいるのだろうか？あの二人の気配は読みにくいし。

とりあえずまだ寝ていたい柳は薄目をあけ布団をめくる。

裸の女がいた。

「……………」

「にゃん？起きたの？じゃあこっちもおつきしちゃうかしら？」

獲物を前にした猫のように目を細めペロリと唇を嘗める美女。プチン、と何かが切れる音が聞こえた。

「キャラメル、天国、フフフーン♪」

閻魔殿の廊下を歩く三匹の影。犬猿雉、何を隠そう桃太郎のお供だった三匹である。

「柳様もう起きてるかな？毛繕いしてくれるかな？」

「さあなー。つーか今更だけどあの人寝起き大丈夫なのか？」

お供の猿、名を柿助が本当に今更だが呟くと、お供の雉、ルリオがふむ、と顎に手を当て考える。

柳は基本的に、目上には敬語、礼儀を弁えその他は基本的に新米だろうと動物だろうと同じように親しげに接する。人当りは良いと言えよう。

ただ、時折鬼灯の影を幻視することがあるし私怨100%地獄を作ったりしていることから鬼灯に似ているとも言える。

「まああの人動物好きだし怒っても酷いことはされないでしょー！」

と、お供の犬、脳天気なシロが言った瞬間柳の部屋の扉が勢い良く開き、黒い着物を慌てて着ながら美女が飛び出してきた。そして柳が追うように飛び出してきた拳を振るう。

ギリギリで避けた美女は吹き飛んだ壁を見て顔を青くして、蝙蝠のような羽根を広げ空へと逃げる。

「ロケツト——」

「へ？」

「——ランチャー！」

「ルリオオオオオオオ！」

「うおお!!?うぐー！」

「にゃ!!」

ぶん投げられたルリオが美女の腰に見事にヒットし女性が落ちてくる。獄卒としてこういった仕事になれていたルリオは多少ふらつくも何とか持ちこたえた。

「柳様、こいつは？」

「殺す」

ルリオが尋ねるもそれを無視して美女に迫る柳。美女がビクリと怯えるように腕で顔を守ろうとすると、寸前で止まる。

「……………で、誰だっけお前」

シヨボシヨボした眠そうな目で美女を睨む柳。どうやら柳の寝起きは相当悪かったようだ。

「どうしたの？」

「テロ？」

「禍の団？」

と、騒ぎを聞きつけたのか一子と二子と三子がやってくる。

「私は黒歌、猫?にゃん。柳様の子が欲しくて」

「帰れ」

黒歌の求愛をバツサリ切り捨てる柳。三子と一緒に特大サイズの豚カツ丼を食べ始め、黒歌の存在を完全に無視し始めた。

「んにゃ!?こんな美人に迫られてそれはないにゃ!ねえねえ良いでしょー?子供なら私が育てるから!子育てしなくて良いから!」

「断る。つーか俺は薬でおかしくなったクソババアにクソオヤジと勘違いされて犯されそうになってから、女の裸見ても興奮しなくなっただよな」

「柳様の過去って知れば知るほど暗いのが出るな……」

柳の言葉にルリオが呆れながら言う。

「つーか何でお前地獄に居てオマケに俺の部屋に侵入しやがった」

「司法取引したにゃん。今は日本地獄の預かりで、柳様の事はリゼヴィム様から……」

「何処だあのおっさん!」

「我が揚げた」

「皿と食材を運んだ」

「盛り付けした」

と、三子、二子、一子の順番で手を挙げる。そう言えばなんか人型の揚げ物があったような。というか昨日三子がグリゼヴィムボコボコにしてみた。

「偉いな三子、二子、一子。ほら、飴ちゃん」

「わーい」

「え、偉いですむの？」

「魔王の息子なんだ。揚げたぐらいじや死なねーしここは地獄だぜ？」

「……………あー。納得……………していいのかにゃあ？」

結局まあ地獄だし、ということとで納得した。

「そーいや藤舞さんにはあったのか？」

「……………まだ。心の整理がつかなくてね、あの人、あれでもあの男の事を愛してたし、

あの男も地獄にいるんでしょ？」

「……………」

「ニヤハハハハ！飛ばすよー！」

「が、ぎーぐげー!!？」

「あはは！がぎぐげーだつてー♪」

炎に燃えた荒野を疾走する骨のバイク。それに楽しそうに跨がる母と引きずり回されるうろ覚えだが父親だと思ふ男。

「……………誰？」

「藤舞さん。お前の母親だろ？ほら、一応親父もいるぞ」

「私知らないよあんな人！絶対人違いにゃ！」

「ところがどっこい本人なんだなこれが。ついでによくぶつぶつ呟くので超越者の作り方を隠した髪飾りがあることを知つてさ。妖怪達に盗ませた。まあこれが一番の証拠かな？これ知ってるの本人だけだろうし」

と、黒猫の髪飾りを取り出す柳。

「中身はリゼヴィムが面白がつて完成させようとしてたから消去した」

「それ白音のじゃ……………」

「白音!？」

黒歌が呟くとバイクで疾走していた藤舞が前輪だけブレーキをかけると後輪が浮かび、激しく回転する後輪が亡者を巻き込みミンチに変える。

「うわあ、うわああ……………」

顔を青くする黒歌に対し、藤舞はキョロキョロ周囲をみた後黒歌に気づく。

「黒歌!?!黒歌なの!?!」

「え、あ、うん」

「黒歌ー！」

「あ痛ったー！」

バイクから降り黒歌に飛び付く藤舞。すつころんだ黒歌は岩に頭をぶつけた。

「ごめんねー。ダメなお母さんでごめんねー！」

「わ、解った！解ったから離れて母様！恥ずかしい！そこ、ほっこり見るなお供共！」

シロ、柿助、ルリオに向かってがー！と叫ぶ黒歌。

「さてお前等。親子水入らずだ、邪魔者は去るぞ」

柳がパンパン手を叩くと三子が頭に、一子と二子が背中にくつつき歩き出す。その後を歩いて行くのは犬猿雉。

「藤舞さんって柳様がスカウトしたんですって？」

「ああ。現世でたまたま、夫の魂に心当たりがあつたんで。ボコボコにして良い代わりに雇われないか尋ねてな」

「心眼あるな」

「どうせ呪術のせいで記憶とか壊れて扱いにくい魂だったしな。まあ、良いかなあつて

……」

柳はそこまで言つて不意に振り返る。ここからは見えませんが、あの親子は仲良くやつているのだろうか？

「そう言えば柳様。あの人の匂い強いですけど交尾したんですか？」

「してねーよ」

「柳様や鬼灯様つてそういう話聞きませんよね。モテるのに」

シロの言葉に疲れたように応える柳。と、不意にルリオが思い出したように言う。

「ていうかさ、裸つて人間や鬼にとつて交尾の準備できてますよつて事なんですよ？柳様何で無視したの？嫌いななの？」

「まあ今日初めて会つたし好きでも嫌いでも。つーか俺の中の理想の女性像つて穢さんだし」

「それ恋愛じゃなくて母親に向ける親愛じゃ」

「これがそうなのか。初めて知つた」

「そういやこの人家族に恵まれていなかったな、と心の中でつぶやくルリオ。柳は途中、大きな皿の上に転がっている人型の揚げ物を土に埋めてから閻魔殿に戻つた。

「そーういや好き云々で思い出したけど、鬼灯様にもタイプがあるらしいぞ。知つてるか？」

「はい。動物や昆虫に臆しない人でしたよね。あとアナコンダに締め上げられても笑つ

てる人」

「俺、これに該当する鬼一人知ってるんだよ」

「え？」

「お香さん……」

「……………あー」

確かに彼女はゴキブリ以外の虫は平気だ。それに毎日蛇を腰に巻き付けている。

「柳様のタイプはどんなんですか？」

「んー。気が強くて、かつ交際経験のある人かな」

「意外ですね。柳様Sなのに」

「誰がSだ失礼な。ただ、そういう女の方が屈伏させてみたくなるし」

「……………」

「ああ、あと鬼や人間じゃなくて野干や化け猫みたいに獣の姿があると良いな。毎日撫でてやりたい」

「なる程……………」

人間界に帰ってきたが。俺の心にはずっとあることが頭の中から離れなかった。

負けた。それも、殴り合いで。不死身でもない男と。

部長や朱乃さんは禁手に目覚めた時にはボロボロになってたからだと言ってくれたけど、正直言うとな俺は最初から禁手だったとしてもあの人に勝てたとは思えない。

魔力で拳を硬化して、身体能力を上げてただ殴ることだけに特化させた戦い方ってドライグは言っていた。数発で俺の鎧を砕く威力だ。でも俺の攻撃はあまり通じなかった。

避けるのと防ぐのに異様になれているらしい。きつとそれだけキツイ修行をしたんだらう。

そう言えば俺が禁手になったらキレてたけど、何でだろ？

「ん？」

もうすぐ家が見えてくるところで、魔法陣が地面に現れる。

「アスタロト家の紋章？」

部長が首を傾げると同時に魔法陣から一人の男が現れ——

「てめえ日本の領地に何アポもなく入ってやがる！」

突如現れた鬼火先生に蹴りつけられアスファルトを滑る。アスタロトが、アスファルト………。うん、無いな。

「よお、お帰り兵藤。本当は帰ってきたお前に変態行為をしないよう改めて注意したり、そのこの白猫に伝える事があって来たんだが、無断侵入したこいつをしょっぴいてから

な」

「くっ！離せ、下等な人間が！僕を誰だと思っている！」

「はいはい知らんよ。日本であんまりデカイ顔出来ると思うな」

「僕は現ベルゼブブを輩出した名家、アスタロトの者だぞ！」

「アスタロト？若手のか……それがこんな堂々と条約違反。レーティングゲームの参加資格は失うと思え……いや、そうすると北欧がうるせーか。仕方ない、取り敢えずはレーティングゲーム時以外監禁するよう言っとくか」

鬼火先生は暴れる男を引きずりながら去っていった。

夏場の心霊スポット

「イチヨウ、電話取つてくれ。冥界に電話する」

柳が言うといちヨウは黒電話を持つてくる。そして冥界へと繋げる。

『はい。外交担当のレヴィアタンです』

「どうも、レヴィアタン様。柳です」

『ひ!? 柳さ……君!? あ、ご……ごめんなさい………』

「何故いきなり謝るんですか? ああ、ひよつとして其方でも探してました?」

『へ?』

セラフオルーの声からは嫌な予感がする、と言いたげな気配を感じた。事実その通りだが。

「さつきアスタロト家を名乗るガキがアポなしで駒王に侵入した」

『へえええ!』

「侵入? アポ? 何故僕等悪魔がお前達下等な神話に従わなければならない!」

「………これは悪魔の総意か?」

『ち、違——!』

「しかも何だお前？人間か？ふん、悪魔以外の下等な存在で、とりわけ下等な人間が働いているなど——」

『お前黙れよ！本当もう黙ってくれよ！柳様違うんですこれ悪魔の総意じゃありません！だからどうかお仕置きは！』

「しませんて……………三子、取り敢えず黙らせろ」

「てい」

「おぶ!!」

柳の言葉に三子が腹を蹴るとくの字に折れ曲がり吹き飛ぶ悪魔。

「取り敢えずこれ受け取りにきてください。許可は出しますけど許可証は間に合いません」

『え、その状態で神社いくと凄く熱いんですけど…………』

「死にはしませんよ。実際この男も肌から煙出てますが元気で……………あ……………?」

柳が煙を出している男を見ると三子が男の口に手を突っ込んでいた。

「こらやめろ三子。変な黴菌持つてるかもしれない……………蛇出てきた」

「柳様、コイツ蛇持ち…………」

「どうやら禍の団と繋がりのある男らしいな」

『……………柳様、そいつ私の手でぶつ殺して良いですか?』

「いえ出来れば日本をなめくさったコイツは日本の地獄を骨の髄まで……………あと様付けやめてください」

『すいません御主人様』

「悪化してる……………」

その後神社の神聖なオーラに肌をチリチリ焼かれながらも蛇の恩恵を失い叫び声を上げる間もなく丸焦げになった男を回収しにきたセラフォル。魔王辞めようかなどと言っていたので全力で応援すると伝えたら泣きながら走り去っていった。

男は縄で縛られ引きずられ、階段あたりでゴンガンなっていたが気にしなくて良いだろう。後は鬼灯達に任せて柳は柳で別の仕事に移ることにした。

「あれ、鬼火先生?」

「……………ああ、桐生か。夏休みデビューか?」

「うんにゃ。変装です。深夜のお出かけなので……………先生に見つかつてる!」

「別に補導しねーよ。悪さささえしなれば……………いや、これも悪さの範疇ではあるんだろ

うが」

深夜一時。廃墟の前に集まった数人の男女に紛れていた柳に声をかける者がいた。眼鏡を外しお下げの髪を解いた桐生藍華だ。

「先生、心霊スポットとか来るんですね」

「んー、仕事柄な」

「仕事って、教師が？あ、そう言えば神社の神主でしたっけ？」

「違うけど、まあ神社の世話になってるな」

表向きには神社に住む教師となっている。地方の宮司の一族だったが長男ではないので神職を継がず、教師になり上京して親戚の世話になっているという設定だ。一応一族との繋がりもあるので時折有休を取ったりしている。と、表向きにはなっている。実際仕事を片してから行くので特に文句を言われた事はない。

「てことは出るの、ハハハ？」

「さあ？入ってみないと」

柳の仕事は、幽霊がいるかどうかの確認だ。夏は兎に角心霊動画や写真がテレビで放送され、その中に本物もあつたりする。穏便に過ごしたくても、心霊スポットに足を運ぶ者が多く現れるので見つかることもある。なのでいっそ団体に紛れようとなったのだ。

「お迎え課に連絡するだけとは言え、面倒な……どうせ殆どの奴が見えないくせに」

(……………あー。居るな。鬼灯様のお土産に写真撮つところ)

廃墟に来ると写真を撮るのが趣味の鬼灯の為にカメラを持参してきたが、予想以上に霊がいる。しかし、この霊達何か違和感がある。

嫌な予感がするな。と、目を細める柳。

「……………断ればよかった」

「ん？」

と、友人達とひとかたまりになって話していた桐生がボソリと呟くのを耳にする。

「つーか何この幽霊達、変な格好……………」

見えるタイプか。

「まあそこそこ居るって鬼灯様も言ってたしなあ」

霊はチラホラ見かけるが、そこまで霊力はないのか一般人には見えていないようだ。取り敢えずお迎え課にメールをしておく。

「シーンセ、もしかして視える人？」

「視えてる。けど、なんかここの霊変な奴らばかりだ」

「うん。なんか不気味だよね……………ここさ、昔火事あったんだって。その火元の部屋、行ってみない？」

「ふ。よく来たな生者べ!？」

火元の部屋に来た瞬間、柳は代表して喋った霊のボスと思われる男を蹴り飛ばした。

「先生!？」

「しまった。何故かムカついて……………」

眼帯、包帯、カラコンをした霊の群れに異様に腹が立ったのでつい足が出てしまった。

「どうしたのいきなり!?!そこ、幽霊居るよね?」

「……………変な尋ね方するな。一目瞭然だろ?」

「私幽霊の彼処の大きさ視てるだけだから男の幽霊が沢山居ることしか解んない」

「……………おかしな能力だ。ここにいる霊は皆眼帯ついたり包帯巻いたりカラコンしたりと珍妙な奴らばかりだ……………」

「……………センチ、ここの霊達中二病だよ。放火の原因、黒魔術とか言ってたし」

桐生の言葉に幽霊達はいやー、はははと陽気に笑う。

「結局失敗して火事になっちゃったけどな!」

「でも幸い死者出てねーし」

「ふつ。それは我が異能のおかげよ」

「…………お前等さ、家族やこの住人に迷惑かけた自覚あるか?」

「まあ若気の至りつてやつだろ」

「お迎え課のおぼろ車、到着で——何じやこりやあ!？」

沢山居るとのことでおぼろ車を連れやってきたお迎え課が見たのはポコポコにされた幽霊達と、幽霊の一人の首を掴み持ち上げる柳。その柳を観察する少女だった。

ちなみに柳は幽霊の血を浴び血だらけだ。

「もういつペン言ってみろ」

「か、へ…………何…………」

「もしくは今すぐ謝れととっても構わない」

「ご、ごめんなさ…………」

「謝る理由を明確に述べる首の骨へし折るぞ」

「沢山の他人や家族に迷惑かけて若気の至りで済ませてすいませんでしたあああ!」

「ねーねーセンサー。そこにも何か居るの? 明らかに人のサイズじゃないけど……………子犬?」

「小さいのか？いや、小鬼と子供残したこと考えると小さい方が自然か？地獄からの使者だよ」

「地獄！ついに来たか！我等が向かう煉獄が！」

「おもしろい！貴様等が我らに行う責め苦など、雨風にも劣ると知るが良い！」

と、地獄という単語を聞きやたら元気になった幽霊達は柳が指をゴキバキ鳴らすと大人しくおぼろ車の中に入っていた。

「先生って、祓い屋？」

「今回の仕事は死神にちけーかもな。あの世に送ったわけだし……ちなみに日本地獄で働いてるだけだ」

「十分凄い気もするけど……あれ、それ言つて良いの？」

「記憶消すつてのは基本的にしねーのが日本神話のやり方だからな。つーか桐生、お前アレ限定とはいえ幽霊視えるみたいだし、うちで巫女やらね？」

「巫女？」

「イチヨウが言うんだよ。神職が欲しいって……近いうちに祭り行いたいみたいだしな。ちなみにこれバイト代」

「うちバイト禁止されてないしね……こんなにももらえるなら良いよ」

「ディオドラ・アスタロトは日本の地獄に送るのは決定として……私が一度ぶち殺して良いですか？」

と、セラフオールが死んだ目で呟く。

「後にしてください」

「後なら良いのか!？」

鬼灯の言葉にアザゼルが目を見開く。

「ディオドラを拷問してみてもわかったことは殆どありませんでした。単なる下つ端……それ以下でしたね」

「そうですか……」

「取り敢えず火髻処か無間閻処かで迷いますね。天界の皆様が聖女としていた女性を多く騙しているわけです。僧侶の男はそちらに任せます、ディオドラの手引きをしていた元神父。あなた方は領地を広げるだけ広げて管理が杜撰すぎる」

「そ、それは……システムが、その」

「言い訳するな。あ、そうだ。天照大神様からの伝言です。天叢雲劍あまのむぐくものつるぎと天之尾羽張返あめのおほはりしてください」

と、鬼灯が言うとうと天使、墮天使の顔がひきつる。

「その……天叢雲劍は現在修復中でして……」

「は？折ったんですか？」

「天之尾羽張は神滅具と一体化しててよ……」

「知るか。その神滅具破壊してとつと返せ。最悪所有者も殺すぞ」

「うむ。似合っておるな」

「ありがとうございます。でもこれ、巫女服じゃないんじゃ……」

と、桐生は己の着た服をみてイチヨウに尋ねる。綺麗な着物だがどうみても巫女服ではない。

「ああ。祭りじゃ良くあるだろ？神に扮して踊る奴。その役」

「本人……本神居るのに？」

「神は寧ろ人に紛れて祭りに参加する方が好きなんだ。仮面をかぶるのは、正体を隠すため。どちらもな」

「にしても急だね。役所の許可とか平気なの？」

「日本政府の一部は神話と密接してるぞ。だから戸籍とか用意して仕事に就けるし……この町の役人も神の存在を知る側。快く許可くれた」

「………神って結構身近なんだねえ」

「何せ八百万もいるからな」

神話とは

「で、結局のところどうなったんですか？」

「三大勢力は日本から撤退。天叢雲剣と天之尾羽張の返還。元日本人の転生悪魔の現状調査後希望者の保護。転生悪魔内部の駒の破壊技術確立です」

「駒の破壊？抜き出すではなく？」

「それでは罰になりませんから。二度と新しい眷属を作れなくします」
なる程、確かにそちらのほうが罰になる。

「天界は日本神話由来の神器搜索、即時返還。日本における布教活動の禁止。日本に神器所有者が現れた場合手出し不可。これは堕天使も同様ですね」

「甘すぎませんか？」

「下手に縛って戦争になると困りますからね。禍の団に付け入る隙をくれてやるほど、阿呆ではありません」

「成る程」

「まあ全て終わった後にはシステムの開示とか現貴族悪魔の領地の見直しとかさせてもらいますが」

内政干渉しすぎと吠えてきた貴族も居たらしいが、だったら全て終わるまでにきっちり領地経営してみると言ってきたらしい。まあ大半が無理だろなあ、と思っていると目の前に金棒が迫る。

「——ツ!!」

「これで十五回。実戦ならあなたが死んだ数です」

「いやー、だつて話しながらとかは……」

「貴方は目の前の相手に集中しすぎる癖がある。実戦では常に1対1とは限らない。精進することです」

「……………はい」

鬼灯の言葉に耳が痛いと言いたげに顔を歪めた。

「まともな経営をしていた悪魔も撤退。きつと現魔王、貴族達は非難されているでしょう。これで反省すれば良いが」

「撤退と言つても元日本人の転生悪魔やその主は残っているんですよね？ 経営権失つてるけど」

「はい」

「つまり変わらず三人を相手にしろと」

「……………すいません。彼の両親は日本人ですから」

大切な一人息子が卒業前に高校辞めて就職しても心配だろう。仕事に就ける年齢になつてから就職したと偽つて冥界に引つ込んでもらった方が良い。

「いつそ全部バラしちまつても良いと思うんですけどね」

「確かに。別に虫や魚になるわけでもありませんし」

「それは地獄でしか起きない現象ですからね。現世で起きたら大事件ですよ」

「こういうこと普通に言うあたりやつぱりこの人どこかずれてんなーと思つている柳に、不意にタオルが飛んでくる。

「お疲れさま先生。てか今全然見えなかつただけど何してたの？」

「ん？今鬼灯様は見えてるだろ？」

「いや、動きがみえなくて。何、修行？地獄で戦闘訓練とか居るの？」

「まあ武蔵さんとか新撰組とか柴田勝家とか強い人はいるな。中国のあの世には呂布とか居るし」

「そういつた方々には減刑を条件に手解きなどをしてもらつています。柳さんが考えた案でこれがもう大成功」

「新撰組つて地獄に居るんだ」

「どの道、人斬り集団ですからね。元々減刑対象ではありませんが地獄行きは確定。ちなみに近藤勇さんに頼まれ悪魔になつた沖田総司をぶん殴つて来ました」

「悪魔ねえ……………」

まあ目の前に鬼が居るしなあと鬼灯を見つめる桐生。正確には鬼ではなく鬼神らしい。鬼神ってなんだ、鬼の神とか強そうすぎるだろと思わなくもない。

「ていうか悪魔居るなら天使も居るわけですよ？神話って、結局どれが本物なんですか？」

「ある意味では全部本物ですよ。日本神話の始まりは日本が大陸から分かれた頃。他の神話もまあ大陸が今の形に定まった頃です。形を整えたのは神々ですし。因みに神が人を作ったのは嘘です。聖書勢力圏だけは所謂聖書原人と原始人が交わってますが」

成る程。白澤が北京原人を観察していて、それなのにリリスという神に作られた元人間もいるのはそう言うわけか。

「何か、神様って思ってたより……………」

「信仰心は本来自制のためです。神が禁じたから、悪行を行ってはならない。そういう目的で……………強制でも義務でも無いので別に信仰心無くても巫女を続けてくださって構いませんよ」

「そういう意味じゃ唯一神教って怖いわねえ。神を信じないなら死ぬ、ですし。エジプトとか別の神を信仰してただけで聖書の神に溺れさせられたわけでしょ？」

「日本の異教徒狩りも、その考えが反乱につながる可能性ありとして禁止されただけで

すしね。そういう意味では外国は信仰に対して厳しすぎる」

「ウチもまあ、自制心を強めるために罰を与える側の側面持つてる神も居ますけどね。ウカ様なら荼吉尼さん、地藏さんには閻魔大王みたいに」

「が、やはり強制ではない。実際神を信じる者が減った今では犯罪に手をかける者も多
くいる。が、同様にそれを罰する人間の方も厳しくなっている。」

「人が育ち信仰が必要なくなる時代も何時かは来るでしょう。それでも、魂に罪を宿し
たまま転生しないようにするのが我等の役目です」

「なーんか鬼つて……まあ考えてみれば地獄は罪人を裁くところですよんね。昔の
鬼つて怖いモノのこと全般だったらしいですし」

「鬼のイメージのギャップに喰る桐生。まあどちらも怪力、角があるなど共通点はある
が。」

「そういえば地獄では死んでも復活してまた殺されたりするんですよ？しかも二千年
も落ちる地獄もあったり」

「良く知ってますね。そうですね」

「アレつてつまり、どういうこと？魂の状態で生きてるなら死もあるんじゃない……」

「f o t eの第三魔法みたいなもんだ。魂の物質化による真の不老不死」

「成る程わかりやすい」

柳の説明に納得する桐生。ひよつとしたら第三魔法のモデルってそれなのかもしれない。まあ知らんが。

「それより桐生さん、練習しなくて良いんですか？そろそろ練習の時間でしょう」

「あ、そうだった！にしても、久し振りの祭りなのに結構スムーズに進みますよね」

「この辺りの人間達も感じているんでしょう。土地神が戻ってきたことを。日本の神話は文字通り身近にいますからね。それこそ桐生さんの服には布の神や糸の神が」

「そう言われるとなんか守られてるって気がするなあ」

祭り

「祭りだー！」

「よっしやー！見ろ元浜、浴衣美人が沢山だ！」

松田の言葉にメガネを光らせ周囲を見回す元浜。とある神社で行われる数年ぶりの祭りだ。イツセーも誘ったが気分が悪いと言うことで来なかった。

「イツセーの分まで、俺達で楽しむぞ！あわよくば、ナンパに成功して林の中でぐへへへ」

と、イヤラしい視線を辺りに振りまく松田と元浜。救いようがない。

「待て、ていうかこの神社鬼火の神社じゃね？バレたらヤバイぞ」

「確かに……………つまり、バレなければ良いというわけか」

「……………お前、天才か？」

と、バカがバカな会話をしている中、祭りは始まる。

「イチヨウさん数年ぶりの祭事ですね。おめでとうございます」

「ありがとう木霊。この賑わい、人の気配、懐かしいわ」

小さな少年の言葉に目を細めるイチヨウ。人が神の領域に集い、神に感謝を表す日。それが祭りだ。

「……………先生、あの子は？」

「木霊さん。世界に木が存在した頃から居る神霊で、イチヨウよりずっと年上」

「え、あの見た目で!?!」

桐生は思わず木霊を見る。どう見ても子供にしか見えない。あれで本当に年上なのだろうか？木が存在した頃からって何億歳なのだろう。

「因みにイチヨウは500年ほどの神木だ。まあ絶対さば読んで500後半だろうが」

「喧しいー!」

柳の言葉に叫ぶイチヨウ。木でも女は女なのだろう。

「あ、どうも貴方が桐生さんですね。木霊と申します」

「あ、これはご丁寧に。桐生藍華です」

「本日はありがとうございます。神事など本当に何時以来か。いやまあ、私達からすれば本当はあつという間ではあるんですけど」

「そりゃ時間の感覚違いますからね」

「イチヨウさんにとってはまあ少し長いのかもかもしれませんがね。今日は舞、頑張ってく

下さい」

「はい。あれ、そういうえば木が存在した頃からって、神話以前の生まれなんじゃ………」

「そうですよ。ただ、あまり力はありませんしね。なので日本神話の神々の手伝いをしています。まあマザーコンピューターと端末みたいな関係ですよ」

良く解らないが多分、山の神とかに山の現状を伝えるための役目を担ったとかそういう言うことだろうか？

「因みに木霊さん以外にも日本の祭りをみたいって人が来てる」

と、柳が言うると二足歩行の黒い犬が現れた。

「やーやーどーもどーも。私こういう者です」

「すっごい良く解った!」

その犬人間が横向きになるとエジプトの壁画の完全再現になった。確か、死者を裁く裁判所で秤に心臓を乗せる神だ。名前は

「アヌビス……様でしたっけ」

「知っていてくれてありがとうございます日本のクレオパトラ!」

「く、クレ……?」

誉められているんだろうか？

「そう言えば以前行った神事では禪一丁の男達が百人で唐辛子を煮詰めて丸太に塗って山まで運ぶという事をしてましたが、ここではするんですか？」

「何その訳わかんないイベント」

「私もその土地神も首傾げてました」

「……………昔、村の中で特にながたいのいい男が十人ほど銀杏の実を体に塗りつけて踊るという悪夢のようなイベントが…………」

と、アヌビスと桐生の言葉にイチヨウはゲツソリした顔で呟くのがあった。

「銀杏と言えばお前もう実を付けないんだな」

「昔は喜んでくれたけど今は異臭騒ぎだし…………」

「時代もうつろうな…………」

柳はしみじみ呟いた。

「さて、私は祭りを回るとしよう。アヌビス殿も如何か？」

「では御一緒させていただきます！」

「え、その姿で!？」

「大丈夫、人間に化けるので！」

と、アヌビスが叫ぶと褐色肌のまあ人間に見えなくはない男に変身した。

「では行きましょう！私射的とかやってみたいです。前回は閻魔大王の意外な変装に度

肝を抜かれているウチに終わってしまいましたから」

「……………神様って、祭り楽しむんだ」

走り去っていくアヌビスを見て頭をかく桐生。とうかアヌビスって死の神では？
正確には死者を導く神なのだろうが。

「神が祭りを楽しむってのは昔からだ。人は神に扮して舞を踊り神に捧げ、神は人に扮してそれを見る。仮面はそれを隠すためのもの。だからほら、イチヨウも仮面して祭りに……………ドラ○もん？」

「何故そのチョイス……………」

手を振り屋台に向かつて歩き出したイチヨウを見て呆れる柳と桐生。まあ昨今の祭りのお面屋はキャラものも多いし、不思議ではないか。

「因みに彼処にいるのが鬼灯様」

「わー。すっごい満喫してる」

金魚が入った袋と水風船と林檎飴と綿飴と袋に入った焼きそばたこ焼きお好み焼き鯛焼きを持った鬼の仮面をした黒い和服の男、鬼灯を見て鬼も神も人もあんま変わらん
いんだなあ、と思つた桐生であつた。

「後、地獄のテレビ局が舞を放送したいってよ。どうする？」

「んー。まあどうせ仮面で顔を隠すわけだし別に良いけど」

「まあその後インタビュー来るだろうけど。現世も地獄も要するに顔の良い女だしてりや視聴率が上がるんだ」

「喜ぶべき、なのかな？」

「くそう！何故だ、何故誰も誘いに乗ってくれない！」

「俺達の何がいけないと言うんだ！」

「っ！待て松田、みろ！あの妖艶な美女を！」

「おお！」

松田と元浜は青い髪の美女を見つけ早速ナンパしようとする。が、先に数人の男達に絡まれていた。

「良いじゃん。ちょっと遊ぶだけだって」

「奢るからさ。ね？」

気安く肩に手をかけてくる男。美女は迷惑そうに顔をしかめる。

「……………松田」

「ああ、ここは助けて好感度を……………！」

と、言った時青い髪の美女が片手で男を投げ飛ばした。

「ごめんなさいね。私、しつこい男は嫌いな」

「……………帰るか」

「だな」

「あ、お香姐さん」

「あら柳ちゃん」

柳がステージの見渡せそうな所を探しているとお香に出会った。先程男が吹っ飛んでいたがお香をナンパでもしてたのだろう。

「そろそろね」

「ん。しかし、結構来てるな」

「数年ぶりの神社ですもの」

辺りを見渡せばこの地域に住んで居るであろう八百万の神々が来ていた。植物の神が治める神社だからか、花や木の精が多い。

「あ、始まるわよ」

お香が言うとうと仮面を付け銀髪のカツラを被った桐生がステージの中央に立つ。

「この神様は恵まれてるわねえ。キチンと本来の姿が伝わってるんだもの」

「伝わっていると言うより一部の人間と繋がりがあからすね。人の世にはもう姿を現さない神も少なくない」

「それだけ神を敬う人が減ったという事ですよ」

と、柳の言葉に鬼灯が付け足す。

「ま、でも俺や桐生みたいに、見える奴らが繋がりを保つてくれると思いますけどね」

「そうね。そうだと嬉しいわ」

「……………所で鬼灯様、それなんです?」

「先程木の上から降ってきて。別段怪我する高さでも無かったので避けたらその人達の連れが絡んできましたね。しつこかったので」

「あらごめんなさい」

「何故お香さんが謝るんです?」

運動会準備

『おっばいドラゴン、はっじまるよ……』

「……………何これ？」

「冥界の深夜番組『おっばいドラゴン』。女の胸をつついて変身する、子供番組予定だった番組だ。悪魔達が謝罪のつもりか日本神話の神社各地に贈り物をしていてな。その中であつた」

「嫌がらせか何かかな？ え、てか子供番組？」

一応酒とか金銀宝石アクセサリーなども贈られてきているが、何故その中にこれを混ぜたのだろうか？ 桐生の言うように嫌がらせとしか思えない。

「ていうかこれをよく子供番組として放送しようとしたわね。冥界は子供達をどうしたいの？」

「そりや皆おっばいおっばい笑顔で言つて、ずむずむいやーんと指を突き出す子供達になる未来だろ」

「何それ悪魔の未来は真つ暗ね。いや、まっピンク？」

「因みにこっちは子供向け番組。魔王戦隊サタンレンジャー」

と、戦隊モノのDVDパッケージを見せてくる柳。サタンレンジャーって、魔王戦隊って、まさかモデルは自分達なのだろうか？

「その後にルシファアライダーが放送する」

「魔法少女モノは？」

「魔法少女レヴィアたんつてのを放送する気だったらしいけど、出演する気だったレヴィアタンが外交の勉強するからと放送中止に。因みに他の魔王も混乱する貴族社会を治めるのに大忙しで、サタンレンジャーは休止中。代わりに等活戦隊ケモレンジャーとチャイニーズエンジェルを放送してる」

柳は桐生に三つのパッケージを見せる。

一つには赤いヘルメットを被った白い犬と、黄色いヘルメットを被った猿と、緑のヘルメットを被った雉と、茶色いヘルメットを被った雀と、ピンクのヘルメットを被った兎が並んで立っている。

「わあファンシー。って、動物映画じゃないのこれ」

「主演はシロ、柿助、ルリオ、葛、芥子ちゃんだ。ピンク以外はお笑い要因で主にピンクが敵をぶっ倒す。近々ブラック枠にリル君が入る予定。因みに隊長役は夜叉一」

「チャイニーズエンジェルは………アニメか。このルシファアライダーは？ 冥界の人？」

「地獄に身を置いてるおっさん。自由気ままをモットーにして、世界の破壊というつまらない目的を掲げた悪に立ち向かうおっさんライダーだ。奥様、子供の人気はケモレンジャーが圧倒的」

「でしようね」

「因みにケモレンジャーの敵役はパン吉君だ。あの子カンフー使えるからアクションが見応えあるんだよ」

「カンフー○ンダ？」

地獄は濃い連中が多いようだ。

「てかこのおっぱいドラゴンやけに兵藤に似てるわね」

「兵藤がモデルだしな」

「マジ？ 彼奴悪魔だったんだ。道理で欲望に忠実な訳ね。てことは松元も？」

「略すな略すな。兵藤、松田、元浜は悪魔関係なく変態だ。兵藤が悪魔になったのは今年からだしな」

「彼奴等あれで普通の人間なんだ。いや、普通じゃないけどさ………死んだら全員衆合地獄に堕ちるんじゃない？」

「そりゃ覗きに痴漢と、レイプこそしてないがこつちでも今まで逮捕されてないのがおかしい犯罪者だしな。次やったら俺は容赦なく警察に突き出す気だ」

まあ親にまで迷惑かけて今のところ落ち着いては居るが。

「そーいやこのおっぱいドラゴンって子供番組として放送しようとしてたのよね？ 何でやめたの？ さすがに冷静になった？」

「いや、鬼灯様が冥界のテレビ局で記者会見行った帰りに子供達に『おっぱーい！』と叫ばせている収録場所を見つけて、ぶち壊した。で、詳しい事情を聞いて子供にこんなの見せんなど……」

「まあ普通そーよね」

「えー。さて、体育祭も近くなってきた。放課後体育着に着替える場合も増えたわけだが兵藤、松田、元浜、覗きと盗みはするなよ」

「二学期も始まり運動会も近くなった今日この頃。柳の言葉にビクリと反応するエロ三人組。忠告してなかったらやっただ確率が高いだろう。」

「先生！ イッセーさんはそんな事しないですよ。下着姿や臭いなら家で私とリアス部長が」

「いや、んなことぶつちやけられても困るんだが……で、アルジエント。俺の目を見て、兵藤はそんな事をしないってはっきり言えるか？」

「……………」

柳の言葉にアーシアは気まずそうに目をそらした。

「と言うわけで男子諸君。仕事増やして悪いが放課後、休み時間、エロ三人組の監視を頼む。一人でも見失ったら即連絡くれ」

「先生！それは横暴であります！」

「そーだそーだ！我等に自由を！」

「俺達そんなに信用ないんですか！」

「当たり前じゃん何言ってるの？」

騒ぐ三人に寧ろ困惑して首を傾げる柳。クラスメートもうんうん頷いていた。

「あんまりだ！アンタには、生徒を信じる心がないのか！」

「若さ故に、男は過ちを繰り返す！」

「だが、その過ちを許し導くのが大人のつと——……め？」

三人の頬を何かが高速で通過し、発生した小型の鎌鼬が三人のもみあげを切り裂く。振り返れば砕け散ったチョコクの粉がサラサラと空調によって舞う。

「黙れ。そういう言葉を吐いて良いのは悔い改める気のある奴だけだ。何より生徒は金払って学びに来ている以上、教師の俺には生徒の尊厳、肉体、精神を守る義務がある」

「お、俺達は守られてない気が」

「他人の尊厳と精神傷付けて毎日毎日バカやってたお前等は生徒と呼ばん。犯罪者と言う。人並みの権利が保障されると思うな」

「「さ、サーイエツサー!」」

柳の睨みに三人は見事な動作で敬礼した。

「さて、体育祭だ。別にスタートの合図がバズーカな訳でも借り物競走のお題に『教頭の鬘』とか取りにくいモノが混じってるわけでも芥子入りパン食い競走させられるわけでも散々頑張った挙げ句りハだったりしたりもしない普通の体育祭だ。キチンと頑張るように」

「いや、そんな体育祭ある訳ないじゃないっすか」

「……………ふ」

生徒の誰かの言葉に柳は遠い目をして笑ったのだった。

体育祭

やってきた運動会当日。いまいちやる気になっていないクラスを見て柳はふむ、と顎に手を当てる。まあ体育祭なんて運動部に属してない限り、面倒な行事だ。柳なんて生前運動会は走ればブーイングが飛び綱引きは前の奴が腹に肘を入れてくるしで基本的にサボっていたし。

「まあ良いか……」

やるやらないは本人の自由だ。別に強制する気はない。と、その時

「センセー！優勝したらご褒美とかないんですか？」

「具体的には先生のお世話になってる神社の女神主さんの手料理とか！」

「是非誘ってください！三子ちゃんに会わせてください！」

「…………ハゲ、メガネ…………黙って参加するのと黙って帰る、好きな方選べ」

イツセーは流石に神社に近付けないからかバカなことは言わなかったがバカ言った松田と元浜はギロリと睨まれた。

「お前等は毎度毎度…………。女が好きなのは別にいい。年頃だもんな、仕方ない。が、欲が強すぎだ抑えろ」

「せ、先生だつて解るでしよう！俺達は若いんす！」

「次俺の前で若さを理由に犯罪を正当化しようとしたら教師生命と引き換えにテメエを下半身不随にしてやる」

要約すると訴えられ且つ後遺症が残るレベルの暴力を振るうと言われ大人しくなる松田と元浜。そして体育祭が始まった。

「すいませーん！こつちにも人手を！」

玉入れの後、大量に転がった玉を集める体育祭実行委員と生徒会、数名の教師。柳も手伝うことにした。

玉を拾うと即座に籠の中に向かって投げる。籠の中という取りやすい位置にある玉を他の者達が袋に詰めていく。あつという間に片付いた。

「先生、ありがとうございます」

と、玉を運んでいると不意にソーナが礼を言ってきた。

「手伝いなんて他の教師もしてるだろ？」

「いえ。学校の滞在を許してくれたこととか……」

「ああ。まあ匙なんかは妹と弟居るし、他の眷属にも家族が居るからな。事情は知らん

みたいだが」

「はい。彼等にも冥界に戻る際キチンと話してみます」

「そうか。まあ止めやしねーよ。で、ことと違ってことは他にもあんの？」

寧ろ本来知ってしかるべき事だ。親ならともかく弟や妹は、本来なら見送る側のはずが見送られる側になるのだし。

「もう一つは、お姉様です」

「あー……………」

「貴方のおかげで最近漸くまともになりました！本当に、本当にありがとうございます
！」

「ああ、うん」

別に外交の場での態度を改めさせるだけのつもりで、決して魔法少女から卒業させようと思っただけではないが、まあ良いだろう。別に。

「まあ今度は禍の団の旧魔王派が現れるたびにテロリスト殺す！って叫んで飛び出していくことが増えたんですが。最近ではお姉様『氷獄の殲滅鬼』と呼ばれていてこの前もクルゼレイ・アスモデウスが氷漬けにされ砕かれました」

「そーいや旧魔王派のトップの一人を討ったって報告あったな」

まあテロで苦勞してストレスがたまっているのだろう。それは柳のせいではない。

「後貴族とかもぶん殴って言うこと聞かせてます」

「魔王らしくていんじやね？」

「最近超越者の一人に数えられました」

「そうか」

「超越者の妹と言うことで婚約の申し込みも増えて………すいません。お礼を言いたかっただけなのに愚痴になってしまいました」

色々疲れているのだろう。まあ教師なので生徒の悩みぐらい聞いてやると言ったらお礼に今度お菓子作ると言ってきたので丁重にお断りしたが。

「まあ姉妹仲改善して良かったんじやねーの？俺は姉貴には数年は会ってなかったけどな」

「仲、悪いんですか？」

「俺が親父をぶちのめした年から会ってない。もし会ったら何何かかけいしよ奚処（炎で焼かれ鉄の鳥の群に食い尽くされる）に落としてやるがな」

「さて、体育祭も終わりか。あー疲れた疲れた」

借り物競走で尊敬する先生としてソーナに連れて行かれたり教員対抗100メートル

ル走で無難な順位を出したりして、少し疲れた。

柳は冷蔵庫を開け調理を始める。麺をゆでるとその間に胡瓜、ハム、トマトを切り、茹でたチキンを手頃な大きさに分け、麺を冷やし氷を乗せ野菜、ハム、肉を乗せ特製のツユを注ぐ。

「冷やし中華出来たぞー。飯だ飯、早く来い」

柳が呼ぶとテレビを見ていた三子と絵馬を確認していたイチヨウがテーブルにやってくる。

「「いただきます」」

と、冷やし中華を食べ始める三人。当然柳と三子は何回かお代わりしたが。

「そういえば北欧神話から観光したいからと案内と護衛を頼む手紙が来ておったぞ。天照大神様にも既に許可をもらったようだ」

「ああ、三大勢力、日本神話、北欧神話で会談だっけ。護衛に注文は」

「柳だとさ」

「……………了解。北欧神話からはやっぱりオーティン様か？」

「それとロキ様、ヘル様だ」

「……………そうか」

北歐の主神の来訪

「初めましてだなバラキエル」

「ああ、本日は宜しく頼む柳殿」

墮天使幹部バラキエルと閻魔大王第一補佐官補佐の柳が互いに遠慮ない言葉遣いで挨拶する。直にこの駅に北歐からの国賓が来る。

「悪魔側と天界側も直にくるだろう。誰が来るかは知らんが」

「初めましてデイハウザー・ベリアルと申します」

柳が言った丁度そのタイミングで灰色の髪を持つ男が現れた。

「……………デイハウザー？これは意外な人物が出てきたな」

「その様子だと私を知っているご様子。お察しの通り、皇帝エツペラのデイハウザーです」

そう名乗るとデイハウザーは柳の前に立ち頭を下げる。

「あなた方日本の地獄のおかげで、私は従姉妹の死の真実と、その犯人を知ることが出来ました。その者も権力を失い、先日大王派の残党と共に旧魔王派に鞍替えしようとしたところをぶち殺す事が出来ました」

「そ、そうか……………しかしお前ほどの奴が来るとは意外だな」

「日本から撤退した一部領主のおかげで禍の因、英雄派と名乗る連中の対応に余裕ができたのと、レーティングゲームの上位陣の殆どに不正が見つかり暫く開催出来なくなつた、二つの理由で空いていた私が」

成る程。バタフライ効果という奴か、と納得する柳。そういえば駒王は三大勢力の重要な地である前に日本神話の地だと天界に言つて、送つてこようとした連中を要らんと追いつ返したが誰が来るのだろうか。

「お久しぶりです！転生天使になつたイリナです！」

「同じく、ゼノヴィアだ」

ミカエルは天界で書類の整理をしていた。和平を結んだことによる教会の悪魔祓い達の不満、それを解消させる策を見つけなくては近い内に反乱が起きるかもしれない。と、その時電話が鳴る。こんな忙しい時に誰だと苛立ちながら電話をとる。

『お前舐めてんのか？』

「……………」

聞こえてきたのは苛立ったような聞き慣れない声。しかし聞き覚えがないわけではない。どこかで聞いたような……………

『北欧の主神の護衛が新米天使二人って何だ。あれか？どうせ狙われないから良いよねってか？それとも襲ってこられた時俺達日本神話に全部押しつける用意でも出来たか？』

思いついた。日本の、現在無限の龍神の保護者になっている鬼火柳だ。

「と、唐突に何でしょうか？」

『ああ、失礼しました。ミカエル様、オーティン様の護衛としてやってきた天界の者が転生天使二人というのは何の冗談でしょう？強いんだから自分で身を守れと？』

「彼女達は元聖剣使いでして、優秀な悪魔祓いです」

『そりゃあ悪魔の弱点を持っているんですからどんな奴でも悪魔祓いとしての結果は残せるでしょう。ですが今回は北欧の主神の護衛。来る可能性があるとしたら北欧の反対派。つまり悪魔ではない。もちろん旧魔王派の可能性もありますが、彼女達が本気で役に立つとでも？』

「い、いやしかし」

『良いからセラフの一人でも連れてこいって言うてんだよ。まさか純粋な天使が増えないから転生天使を送ってきたんじゃないでしょうね？』

「そんな事は！」

『ないのならさっさと転生天使に撤退命令だしてセラフ連れてこい。どのみち今までお

前ワンマンで回してたんだらう?』

「あのく、天界から新たに派遣されましたガブリエルです」

イリナとゼノヴィアを送り返した後やってきたのはガブリエル。これで天界、悪魔、墮天使、日本神話が揃った。

「あら、そちらの犬猿雉は……もしや柳様は桃から生まれた不可思議男、桃太郎様でしたか?」

「柳様が桃太郎? ソレはないよ。柳様あんな下膨れじゃないし」

「つーか桃太郎のお供には兎居ないしな」

猿の言うようにここには犬猿雉以外に兎も交じっていた。何故か權を背負っている。

「ヘル様の要望だね。葛は補佐官だから呼べなかつたけど」

「ああ、ケモレンジャーの……」

柳の連れてきた動物達を見て納得するディハウザー。冥界のテレビのCMを見た。

と、その時駅のホームからオーディン達が姿を現す。北欧側の護衛であろう銀髪の戦乙女も居る。

「おお、こりやまた豪勢な面子じゃのう」

「ふああああ。ケモレンジャーだあああ♡」

と、そのオーディンの横をすり抜けヘルがシロ達に抱きつく。

「かあいいようかあいいよう」

抑揚のない声でナデナデとシロ達を撫で回すヘル。どうやらケモレンジャーのファンらしい。

「確かに可愛いですね」

「可愛いなんてよしてください。これでも獄卒なのでくすよ」

ガブリエルも芥子の頭をなでると芥子は恥ずかしそうに前足をパタパタ振った。

「すまん。ウチの娘がどうしてもナマで会いたいと……まああの兎の実力なら護衛も果たせるだろうが」

「お気になさらずロキ様。それと、芥子ちゃんも悪いな。クロ君だっけ？ソイツとデートの約束あったんだろ？」

「もー。違いますよー。クロ君は武者修行の旅で出会った修行友達ですって」

柳の言葉に芥子はいやだなもう、と前足で両頬を押さえるのだった。

「クロ君？黒兎か？」

「さあ。俺も会ったことないんですよ」

「世間話はそれぐらいにしてはよ案内せい。俺は風俗店を回りたいな。日本のヤマトナデシコを見てみたい」

「おいこらジジイ、私の娘がいるのにとこ回る気だ貴様！」

「んー？ならその娘同士遊ばせておれば良いであろう？ほれ、早速仲良くなってる」

「我三子。お前は？」

「ヘル。ミキちゃん好き？」

「大好き」

「にゃー」

三子達を神社に預けオーデインの行きたがった風俗店に向かう一同。道中ラブホが立ち並ぶ場所で柳がオーデインに頼まれ自販機でコーヒーを買って戻ると兵藤一誠と姫島朱乃が居た。

何やらバラキエルと言いつている。

「とにかく、ここはお前にはまだ早い！それに、聞けば今代の赤龍帝は女の乳を糧にして……お前が卑猥な目にあつていないか心配なんだ」

「噂や風聞で人を判断するのね。最低だわ……やっぱり、貴方のことを許すなんて……それに、私が彼と何処にしようと関係ないでしょう！」

「噂や風聞は全て事実だし教師として俺には関係あるけどな」

と、柳が言うといッサーと朱乃が振り返りばつの悪そうな顔をした。

「不純異性交遊は禁止だ。お前等が正式につきあつてんなら、まあ目をつぶってやらなくもねーけどそうじゃねーしな。それと姫島。兵藤一誠は間違ひなくお前の父親よりずっと最低な男だ。女の着替えは覗くし階段下から下着を覗こうとするしプールで着替え盗もうとするし体育で痴漢するし……前任の校長が証拠消してなけりや即行でムシヨ送りにしてやるレベルの犯罪者だ」

「そんなの、彼の一面にすぎませんわ。彼は誰よりも優しく、勇敢で……」

「それこそ一側面だろ。やらかした数の方がずっと多い……ん？あれ、姫島……バラキエル……ああ、思い出した。すっかり忘れてた……あんた等どトすけ助兵衛熟女団ムス期待の新人姫島朱璃の家族か」

「……………へ？」

「いやだから、姫島朱璃の家族だろ？」

「し、朱璃を知っているのか!？」

「鬼灯様曰わく裁判が難しく、衆合地獄で働かせている亡者。良く旦那さんと再会した時の為にもと言つて鞭を振るつて亡者を真つ二つにする姿を見るたんびに何をとち狂っているんだろうと思つたけど、そうか。旦那が飛びつきり丈夫なド変態だったのか。そりゃあんな威力が必要なわけだ」

家族

「お茶よ」

「敬語使えよリアス・グレモリー……ん、櫛さんの四分の一ぐらい美味しい」

明らかに敵意むき出しのリアスに特に気にした様子もなくお茶を飲む柳。感想は……絶対苛立ってたわこれ。

「俺犬だからカフエイン駄目なんだよね、牛乳頂戴！」

「お前って遠慮ねーよな」

「まあ今回は客人なんだしいいんじゃね？」

元桃太郎のお供だという三匹の動物達を見てアーシアは恐る恐る手を伸ばす。が、ヘルが持つて行く。

「ああ！」

「むふふ」

アーシアが切なそうな声を出しヘルはやはり抑揚のない声で堪能する。楽しんでいいのだろうか？ちなみに芥子はガブリエルと女子トークをしていた。

「それで、妻は……朱璃は今地獄に？」

「貴方に夫を名乗る価値など……!」

「はいはいくだらねー喧嘩はやめろ」

「くだらないですって!?!」

バチバチと体から雷光を迸らせる朱乃に対し柳は面倒くさそうに雷封じの札を張り付ける。自分では剥がせないのか必死に剥がそうとする朱乃だが剥がれない。

「要するにあれだ。単身赴任の多い父が妻の死に際に間に合わなくて喚いているようなもんだろ。そんなありふれた事情なんて、地獄じゃありふれすぎて滅刑の対象にすらなりやしねー」

「そんなのと一緒にしないでください!母は、この男のせいで殺された!」

「バラキエル殿が墮天使だからか?ぶつちやけ言つちまえば、『姫島』の、五大宗家やらかし具合から考えても墮天使とさして変わらねーと思うが」

と、頭をかく柳。要するにたまたまバラキエル……墮天使を憎む者が狙ってきただけで、姫島朱璃個人を狙った者達も来た可能性はあるのだ。

「適当なことを仰らないでください!母が、誰に恨みを買ったと言うのですか!」

「何だっけ……ああ、そうそう。虚蝉うつせみ機関だ。五大宗家の追放者。無能の烙印を押され

て追放された彼奴等にとつちや、当主に目をかけられておきながら自ら家を抜けた姫島朱璃は憎くて仕方ないだろうよ。実際地獄で朱璃さんを見るなり殺そうとしてた奴も

いるしな」

因みに五大宗家も虚蟬機関も現世に来ていた鬼灯にうっかり攻撃して、五大宗家は約定違反で鬼灯にこつてり絞められ片方は組織再編不可能なほど壊滅的な被害を受けた。

「でも、それはつまり……………その男と駆け落ちしなければ……………」

「……………ああ、その場合は単純に姫島として虚蟬機関や妖怪に狙われただけだろうが」

「それ、でも……………」

「……………ああ、面倒くさ。やめだやめ、単刀直入に言うか」

柳はそう言う頭をかき、ギロリと朱乃を睨みつける。

「お前が親嫌いでもそこに関して言うことはねーよ。俺だって両親は憎いしな……………けどな、自分が生まれたことを否定するな。この世界にや産まれたくても産まれられない命だってあるんだぞ」

「別に、私は産まれたことを否定してなんて……………」

「してるだろ？両親が結ばれるべきじゃなかったなんてよ……………俺はあの両親を殺したいほど嫌いだけど、あの両親から産まれなくなかったと考えたことはない」

自分で自分を哀れと思うほど、柳は弱くない。それは鬼灯も同様だろう。孤児、余所者と蔑まれても、その事で差別されることには怒りを覚えても自分を哀れんだことはないだろう。

「……………柳君、妻には……………朱璃には会える、のか？」

「手続きさえしてくれるなら。ディハウザーも、クレーリアの恋人である八重垣さんに会いますか？」

「……………そうですね、是非。どのくらいの期間が必要ですか？」

「特例を除いたら最短でも一年だな。鬼灯様にも相談してみる」

話は終わりだと席から立ち上がる柳。と、その背中に朱乃が声をかけてきた。

「母は、元気でやっているのですか？」

「私も、その事について教えてほしい」

「……………また家族三人で暮らしたいとよ。羨ましいこつた」

「あれは嫉妬か、小僧？」

兵藤家から出て、不意にロキが話しかけてきた。

「愛されなかつた哀れな子が、愛されている者に羨望でも覚えたか」

「そりや誤解ですよロキ様。私は家族に愛されたいと思つたことはありません。それが羨ましいと思つたことも……………何せ姉は俺を愛しすぎて大変でしたから」

「ほう？ 姉がいるのか」

「ええ、重度のブラコンでしてね……………こんな話があります。正義感が強く、いじめに反

発していたとある上級生の女子が居て、その人は姉が拳を血に染めて戻ってきた次の日からこなくなつて転校しました」

「……………そうか。その、大変だな」

からかうつもりだったが予想外の闇に何も言えなくなるロキ。

「ほほう？ヤンデレと言う奴か？」

日本文化の間違つた覚え方をしているオーデインは興味深そうに話しかけてきた。

「ヤンデレと言うのは具体的にどんな事をしてくる？ほれ、言つてみい」

「そうですね。姉は確か、俺のことを暴力から救つてくれたヒーローとして見てきました。ただ単に俺に押しつけているという罪悪感から逃れたかつたんでしょうね。で、俺を手当したりする事でそのヒーローの特別であろうとした。いてーのに青痣や傷を舐めてくるしわりかし怪我がなくても舐めてくるし性知識が無い頃それを良いことに色々されたし……………思い出したら腹立ってきた」

柳の目が段々と鋭くなつていき殺気が漏れる。普通の動物達はあつという間に逃げだした。

「ふうむ。しかしヤンデレと言うのは世界を越えても好きな男の下に現れると言うらしいのう。いずれ来るかの？」

「そんな時は殺すし。まあ追つてこないでしょう。俺が親父をぶつ飛ばした時点で、か弱

くも身を張るヒーローから親父と同じ暴力を暴力で押さえつける恐ろしい男に変わったんで」

と、そこまで言つて柳は不意に足を止め振り返る。

「ふむふむにやるほど。柳の旦那の過去、掘れば掘るほど闇が深いと……」

「何してるクソネコ」

「……………あ」

メモを片手に頷く猫をヒョイと持ち上げる柳。猫又の小判。地獄に住む化け猫。おそらく柳がケモレンジャーを連れて現世に出るときこっそり紛れたのだろう。柳はニコリと笑うとヘルに向かって差し出す。

「好きだけ撫で回してどうぞ」

「……………良いの?」

「はい。小判、その方国竇だから。傷一つでも付けたら合法的に殺すからな」

英雄派

オーデイン達が来日して数日。オーデインの要望でキャバクラ行ったり遊園地や寿司屋に行ったり英雄派構成員を生け捕りにして地獄に連れて行ったり地獄の衆合花街にオーデインが行ったり秋葉原でヘルがオタク狩りに顔を隠す仮面を取られ半死人の顔を曝され気味悪がった所をロキがボコボコにしてそれからロキがヘルと手を繋いだら三子が柳をジツと見てきたので手を繋いだりそれをガブリエルが微笑ましそうに見てきたりと色々あつたがいよいよ日本神話との会談の日。

今回は時間を取れた鬼灯もいる。

「まあ、流石にこのメンツで襲ってくる奴は居ませんか」

「でしようね。ああ、そうだバラキエルさん」

暇そうに呟く柳とそれに返す鬼灯。不意に思い出したようにバラキエルに声をかける。

「姫島さんの件なのですが、三日後に面会できるよう手配しました。お会いになりますか?」

「いい、良いのですか!?!」

「彼女はそれなりに成果も残していますからね」

それぐらいのサービスは良いでしょう、と鬼灯が言った時目の前に魔法陣が現れる。
「人間の術式だな」

と、ロキが呟くと魔法陣が膨れ上がる。

「来ましたね。腕がなるで〜すよ」

パシパシ權を前足に当てる芥子。ちなみに他の面子は帰った。小判はストレスで少しハゲが出来ていたが柳も鬼灯も特に気にしていなかった。

「はじめまして異形の者達。我等は異形の者から人類を救うことを目的とした、英雄派」と、狸型の自立神器に乗った男が此方を見下したように言う。もう一度言おう、狸型の自立神器だ。

「これは挨拶代わりだ」

『グオオオオ！』

今回のリーダー格と思われる男の神器が腹を叩こうと大きく手を振り上げる。

「あ！タヌキだ！」

『グギャン!?!』

が、芥子に吹っ飛ばされた。しかしなかなかやる狸だったようでクルリと回転して着地する。

『グ、オオオオ！』

そして腹をポンと鳴らすと背中から炎が吹き出る。柳があちゃーと頭に手を当て鬼灯はもう仕事が終わったというように金棒を背に戻す。

「性懲りもなくまた現れおったか狸いいいいい！」

「少しは歯ごたえがあると思っただがな。強くなってから出直してこい！」

「芥子さん、強くなって出直してこられたら困ります」

ボコボコにされたリーダー格と哀れにも芥子に挑み返り討ちにされた構成員から、神器を抜き出し縛り付ける。本人は地獄のカラス天狗警察の元に送っておき、神器を調べると、神器の中に妙なモノを見つけた。

薄黒い蛇だ。

「……………三子、これ何か解るか？」

「……………これ、私の蛇じゃない。けど、似た力感じる。私の蛇を切り刻んでそれを核にした……………と、思う？」

数匹いることだし、一匹引きちぎってみる。小さな肉片を残して蛇は影のように消える。

「……その消え方、覚えがあるぞ。魔獣アナイアレイション・メーカー創造で生み出された魔獣の消え方だ。北欧

に現れる英雄派が連れてくる魔獣の消え方と同じだ」

「日本にも現れますね。今回のように人間だけの方が寧ろ珍しい」

数週間前、アザゼル総督より同盟勢力に通知されたのは、英雄派が神滅具で生み出された魔獣を使役しているというもの。この蛇もその応用で創られたものなのだろう。

「それより私はこの芥子ちゃんがあんなに怖くなつた狸さんに興味ありま〜すよ」

「ガブリエルさん口癖移つてる。芥子ちゃんは日本では意外と知れ渡っている昔話『かちかち山』の兎どんなんだよ。大好きなおばあさん殺されたから狸が嫌いなんだ。つっても芥子ちゃんよお、性懲りもなくつて言つてたがこの狸があつた狸とは限らね〜んじやねーの？ただの狸が神器の材料にされるとは思えないし」

「いえ恐らくあの狸は妖怪の類ですよ。喋つてましたし二足歩行でしたし。ほら、藁を背負つていたでしょう？船も漕いでましたし」

「……………そこは突つ込んで良いところなのか？」

芥子の言葉にロキは呆れながら尋ねる。

「そういえば、狸どんの魂地獄に来てませんでしたね。十分可能性はあります。と、なればこれは日本由来の神器。回収しましょう」

「魂をサルベージしたらばつこばつこにしてやるので〜すよ」

パシパシと櫂を前足で鳴らす芥子。と、その時エントランスの自動ドアが開き閻魔と天照大神、悪魔の外交担当魔王レヴィアタン、ミカエル、アザゼル達が出てくる。

「やーお待たせ。大丈夫だった?」

「はい。そちらは?」

「北歐と日本神話、三大勢力の協力体制は無事敷けたよ」

閻魔が良かった良かったと笑う中、ロキとロスヴァイセの北歐の護衛組はん?と出てきた一同を見る。

「おい、髭爺は何処へ行った?」

「え?ああ、オーディンさんならスレイプニルっていう馬が引く馬車に乗って帰ったよ。凄いやねアレ。ワシも欲しいよ」

「では閻魔大王用の籠車を……柳さん、馬の彫刻を茄子さんと一緒に造ってもらえますか?」

「りょーかい」

「馬にひかれる馬車が良いの!何でそんな外国のクリスマスで希に見かける変なバイクみたいな奴で行けると思ったの!」

「おい、待て………帰った?あの爺、勝手に帰りやがったのかファック!許せん、戻ったらスコルとハティに新しい世話係だよと騙してじゃれつかせてくれる!」

「ガラムも、貸す?」

「是非貸してくれヘル!」

と、オーデインモフモフ襲撃作戦を考える親子の横で戦乙女が膝を突く。

「帰っ、た……え、じゃあ私どうすれば……今から帰っても絶対間に合わないし『どの面下げて戻ってきたのかしら?』って絶対怒られる。う、うわあああん! 私の人生、お先真っ暗あああ!」

「先がないなら今こそ就職……ああ」

「君達息びつたりだね」

鬼灯と柳が同時に口を開き閻魔がプププと笑うと二つの拳が閻魔の両頬を殴る。逃げ場のない衝撃が閻魔の内部に直で伝わる。

「私としては霊力だの魔力だの言われる力さえあれば使える北欧の魔術は、禍の団を相手にする以上に今後地獄でも活用法がありそうなので欲しかったですよ。柳さんは?」

「俺は私情ですので其方を優先してもらっても。単に、変態三人組の相手をしてくれる人が後一人ぐらい欲しかっただけです」

「苦勞をかけてしまい申し訳ありません。それで、ロスヴァイセさんはどうします?」

「……………お給金は?」

「柳さんの手伝いの場合は、参拝者の祈願数によつてはこのぐらい。獄卒達に魔術を教えてくれるならこのぐらいですね……いえ、貴方は女性ですし、柳さんの手伝いとして教師もやると考えるならこのぐらいかと」

「是非柳さんのお手伝いを！」

セラフオールは書類を見る。目を擦り、再び書類を見る。

セラフオールは魔王を有無を言わさず召集するとその場から転移した。

「ねえねえサーゼクスちゃん。アジユカちゃん。これ、何？」

「ああ、うん。三大勢力の結束を強めるべきだと思つてね。運動会を開こうかと」

「うんうん。で、それなんで外交担当の私に一言もないの？」

「会談で忙しかつたら？ 安心してくれ、各勢力への通達は私がしておい——ぶへらあ
!？」

セラフオールの拳がサーゼクスの頬を抉るように捉える。というか氷の棘で実際頬の肉が少し抉れた。

「おつ前ふざげんなよ！ 今そんな暇あると思つてんのかマジで！」

「お、落ちていてくれセラフオール！ その辺は我々もキチンと考えた！ 領地から撤退し

て空いている元日本の領地持ちや、一般の悪魔から志願者を募っている」

「……………それ本当?」

「本当本当!」

「……………他の勢力には何て?」

「悪魔祓いの内暇している者達を優先するように、英雄派の襲撃に備えられるだけ、と……………堕天使も似たような感じに……………」

「……………そっか。なら、うん。まあ良いや。殴ってごめんね?確かに親睦を深めるのは必要なことだったね」

「いや、いいんだよ」

「もうこいつテロリストの内通者何じやねーの?殺そうかな、って思って本当ごめん」
「私こそ、まず相談するべき……………え、ごめん。今何て?」

地獄に住む母親

バラキエルと朱乃は隴車に乗り地獄に向かう。

小猫も途中まで乗っていたが、柳に連れられ降りていった。

「つきましたよ」

と、鬼灯が言う。バラキエルは朱乃を見るが朱乃は何も言わず無言で降りる。

衆合地獄。邪淫を犯した者が堕ちる地獄。鬼灯の後を無言でついて行くと、一人の女性が現れた。巫女服を着た、猫を模した仮面を被った女性。

「姫島さん仮面仮面」

「あ………」

鬼灯の言葉に慌てて仮面を外す女性。どうやら彼等の前で外そうとしていたのではなく単純に忘れていたらしい。

仮面を外すと現れたのは、朱乃に良く似た顔。それを見て、2人は駆け出しそうになり、しかし抑える。

「……………あ、し……………朱璃」

「はい、貴方」

名前を呼ばれ嬉しそうに微笑む朱璃は、そのままバラキエルに駆け寄り頬に触れる。

「少し老けたかしら？」

「私は墮天使だ。数年では老けんよ」

「じゃあ髭が伸びたのね？もう、私が居なくなってからキッチンと処理してないのね」

「……………ああ」

拗ねたような朱璃の言葉に頬をかくバラキエル。しかし朱璃はふつ、と優しい笑みを浮かべた。

「会いたかった」

「——ツ！私も、私もだ……………会いたかった。抱きしめたかった、ずっと！すまない、私の……………私がお前を選んでしまったから……！」

「悲しいことを言わないで。私は、貴方に出会えて幸せだったのよ？」

バラキエルが涙を流しながら叫ぶと、朱璃は悲しそうな顔をしてその言葉を否定した。バラキエルは朱璃を抱き締め、朱璃は微笑み腕をその背中に回す。

「……………して……………」

と、そんな光景を見て、朱乃がフルフルと首を横に振りながら後ずさる。

「どうして、そんな風に……………だって、その男が居なければ、墮天使なんかと結ばれなければ——」

「朱乃……………」

「違う。本当は、解ってた……私が居なければ良かった。私が産まなければならない、二人はまだ引き返せたかもしれない」

「朱乃！」

パン！と朱乃の頬を朱璃が叩く。

「そんな悲しいことを言わないで。私は……………」

「……………」

と、鬼灯が不意に手を挙げる。

「ここに来る前に言ったと思いますが今回は特例でそこまで時間がないので、手短に」

「鬼灯様、空気読みましょうよ……………」

と、朱璃が呆れたように呟く。

「朱乃、時間も少ないみたいだから端的に言うわね。私は、私たちは貴方が産まれてきて良かった。貴方を愛している」

「あれは何ですか？」

「お前の両親と姉」

小猫が見た先には爆走するバイクを満面の笑みで操る女性と、必死な顔でその女性の

腰にしがみつく黒髪の女性、バイクに引きずり回される鎖で繋がれた男性。

「あ、亡者に罰を与える獄卒ですね。姉様は見習いでしょうか？両親ということは父は？」

「あの罰を与えられている亡者。罪状は子を認知しない事と研究の際多くの犠牲を出したことと子供をいざという時実験材料になるという情報をお前の元主に流したことから……うん、まあ色々」

「……父と母は、愛し合っていて、父は事故で亡くなったと、姉様が」

「愛されてんだな。実際はお前等の事なんて気にせず研究ばかりかしてドカーン。しかも死後もお前等に迷惑をかけた……なんかショック受けねーみたいだから話しちまったけど、今から聞くな？大丈夫か？」

「あの光景見たら何かもう、割とどうでも良く……」

「ま、確かにな……」

目の前で母親と思わしき女性が目を回しそうな姉を乗せ、父と思われる男をバイクで引きずり回していたら、大抵の人間は思考停止することだろう。人間ではないが。

「行くわよ黒歌！音速のその先に——！」

「行くなつーの」

何時の間にかバイクの前方に移動した柳が前輪を踏みつけ地面にめり込ませる。黒

歌と女性が吹っ飛び、鎖に繋がれた男が柳に向かつてきたのではたき落とすと後輪に巻き込まれミンチになった。

「うっわ……」

小猫がどん引きしていたがどうせ死者はこの地獄では何度でも蘇る。

「そう言えば蘇るつてのは黄泉帰る。つまり黄泉から帰ることだ。黄泉である地獄の場合蘇るで良いのかね？」

「知りませんよ。それで、あの二人は平気なんですか？」

「いたた。あ、柳………様、と………白音!？」

「白音!?!あなたが白音なの?大きくなったわね!」

と、黒歌の言葉に振り返り飛びついてくる女性、藤舞。豊満な胸が小猫の顔に押し付けられムニユリと潰れ、小猫の額にビキリと青筋が浮かび、反応が遅れた小猫は岩だらけの地面に無防備に倒れる。

「あいつたー!」

戦車の力で藤舞を押ししのけ頭を押しさえゴロゴロ転がる小猫。黒歌はどこか遠い目でそれを見ていた。

「いたたた………えつと………母様、ですか?」

「………ええ」

「……………姉様も」

「……………にや」

「……………」

「……………」

「……………」

「因みに面会時間に限りはあるからな。塔城は日本勢力じゃねーし」

「「空気読め」」

と云うわけで面会時間終了間際まで、離れた場所で岩に腰掛け煙管から煙を吸う柳。ふう、と吐き出した煙はユラユラと昇り消えていく。

「そろそろ時間ですよ柳さん」

「と、鬼灯様。其方は終わったんですか？」

「ええ、まあ」

なら迎えに行くかと藤舞達の下に向かう二人と隴車。そこには抱き合う三人の化け猫が。

「で、久々の家族の再会はどうだった？」

柳が尋ねると三人は顔を見合わせる。

「朱璃は、変わらず綺麗だった。鞭の腕も冴え渡っていた……」

「……………ん？」

「公共の場で突然SMプレイを始めましてね。取り敢えず三人とも気絶させました」

「そ、そうですか……………三人？」

「娘さんも交じってました」

鬼灯の言葉に、娘と妻に鞭で打たれるバラキエルを想像する。此奴、頭可笑しいんじゃねーの？

「私は……………姉様と仲直りできました。ありがとうございます先生」

「ん」

「あと、母様も姉様も今代の赤龍帝だけはやめろ、と……」

「あら小猫ちゃんも？私もですわ」

地獄式運動会

パン！パン！パン！

運動会の花火が上がる。意外にも、来ているのはグリゴリ所属の神器使い、教会の悪魔祓い、一般悪魔と言った面子だ。

地獄、北欧はゲスト組として組んでいる。

「私一子」

「私二子」

「私ヘル」

早速仲良くなっている座敷ツインズとヘル。鬼灯はザザ、と雑音をならしながらマイクのスイッチを入れた。

『ではこれより、第1回勢力交流運動会を始めます。放送は私、実行委員の鬼灯がお送りします』

その言葉に、非番のため運動会に参加することになった獄卒達は顔を青くしたのだった。

「奇跡の子」ことテオドロ・レグレンツィ、そして数名の悪魔エックスシスト祓い達は此度の運動会に参加していた。

各々、悪魔や吸血鬼に家族を、友を殺され不満を持つ者達が殆どだ。ここで騒ぎを起こせば、あるいは和平など簡単に消えるだろう。が、ヴァスコ・ストラータとエヴァルド・クリスタルデイが顔を青くして止めた。

特にストラータなど、普段は心優しい老人だが強敵との戦いを誰よりも望んでいるはずなのに、日本の鬼神だけは敵に回したくないと顔を青くして言っていた。

そして、丁度良い機会とも言っていた。それが何を意味するのかは解らない。

「それじゃ皆ー！騒ぎ起こしたら……テロリスト認定で殺す」

キラキラした笑顔で、しかし唐突に無表情になりドスの利いた声で悪魔達を睨み付ける魔王。その横で紅髪の魔王が苦笑していた。

「まあまあセラフォル、そんな脅さなくても皆解っているさ」

「あん？」

「すいませんでした」

「本当にねー。こうでも脅し……言つとかなないとみーんな何かしそうだからさ……あ、ちょっと待ってて」

そうやって墮天使陣営と天界陣営からそれぞれ演説していたミカエルとアザゼルを休憩用テントの裏に連れて行くセラフォル。ドゴシャア!と何かを殴る音が二度聞こえ、腹を押さえたアザゼルとミカエル、すつきりした顔のセラフォルが出て来た。

○障害物競争

地獄側からは一見子供の鬼、小鬼の唐瓜と茄子が参加することになった。悪魔側からはイツセーが出ている。

『位置について、よーい……………』

ドゴオオオオオン!!

スタート位置にいた鬼灯の金棒と三子の拳がぶつかり合い、とんでもない衝撃波と爆音を響かせる。何名か吹っ飛ばされた。

『さあ、全員出遅れましたが現在トップを走るのは悪魔の赤龍帝。落ちたら強制足つぼマッサージの平均台を越え、粘着性はないけど何か生臭い汁が塗られたネットを潜り、地獄の亡者を蹴り進みながら最後の関門に近づく』

『何で全部地味に嫌な奴……………最後の子供の教育に悪いんじゃない?』

『ですから子供は参加させてません。良いですか子供の皆さん。悪いことをすればその蹴られている亡者達のように酷い目に遭うことになるんですからね。おっと、そう言っ

ている間に最終関門！『ふれあい☆どーぶつゾーン』です！』

そこには、フェンリル、炎獅子、巨大象、スコル&ハティ、ガルム、量産型ヨルムンガンド、デインノスクス、Tレックス、スピノサウルス、デインノスクス、インドミナスレックス、サーベルタイガー等が涎を垂らしながらグルルルと唸っていた。

『さあ皆さん遠慮せずに触れ合ってください』

「ふ、ふざけんなああおー！」

イツセーが叫ぶ中、唐瓜と茄子は蹴ってきた亡者を餌にすることで何とか抜けた。流石獄卒、亡者に対して慈悲はない。

「はい、しゅーりょー」

柳がパンパン手を叩くと、もう少しでイツセーのアソコを嘔みそうになっていたデインノスクスを含めた恐竜達がピタリと止まり、全員大人しく観客席に向かった。というか観客なの彼奴等。

○借り物競争

「……………」

ヘルは内容を確認するとフェンリルを呼び、その背に乗りゴールした。

「『一番好きな家族』……はい、OKです」

父親がうなだれていた。参加者のみにダメージがあるわけではないようだ。

『嫌いな人』………本当にこの人ですか？』

「はい。私の、子を殺した人ですのぞ」

悪魔の男性がストライダーダを連れながら言う。何も家族を奪われた恨みは人間だけの特権ではない。

『苦勞させてくる同僚』………』

「うん☆」

セラフオールの満面の笑みにサーゼクスは何も言えなかった。

『妬んでいる人』『ぶつちやけ調子乗ってる上司』………連れてこなかった天界はゼロポイントです」

「いや、だって………」

「連れてこれるわけ、ないじゃん」

○全員参加玉入れ競争

『ただの玉入れ等生ぬるい！妨害行為ありです！』

その言葉に子供たちを庇いながら構える悪魔達。天界陣営には子供はテオドロシがいなかったが、反射的に悪魔祓い達が囲んで守っていて、その光景に差を見つけること

が出来なかった。

因みに柳がピツピツと笛を吹くとスピノサウルスやTレックスの背中を玉を唾えた小型の恐竜が駆け、籠に入れていく。

「良かった、今回の玉普通で……」

『なお、うっかり玉を落とすと三日は消えない悪臭を放つ液が放たれるのでご注意を』
『俺様が手伝ったんだぜ!』

○騎馬戦

「――洋服破壊………って、あれ?」
ドレスブレイク

一向に洋服が破壊されない。一瞬だけキラキラと何かが光っていたが。イツセーは首を傾げる。

「……………おい」

ヒヤリ、どころではない寒気を背後から感じる。振り返ればサーゼクス(セクス)の肩と頭に足をかけて立つセラフォールの姿が。

「赤龍帝君。言ったよね☆? 騒ぎ起こしたら殺すって」

ニッコリ可愛らしい笑みを浮かべながら首を傾げるセラフォール。何だろう、とても寒い。

「こ、これは悪魔が勝つためなんです！それに、俺はエロい墮天使のお姉さんの裸も可憐で清純な天使のお姉さんの裸も……否、おっぱいを見たい！たとえ邪魔をするのが魔王であろうと！」

「邪魔」

イツセーが放ったエネルギー弾を蚊でも払うかのように片手で弾くセラフォル。ドラゴンショットは空中で砕けキラキラと散る。

「……………へ？」

《信じられんこの悪魔、相棒の魔力を凍らせたぞ！》

「同盟関係に亀裂を入れる悪い子には……………お仕置き」

パキン、とイツセーが凍り付く。木場、ギヤスパーは完全にとぼちりだった。

「よし馬、次は元凶に決まってるアザゼルを封印しに行こつか」

「……………アザゼル、君は良い奴だったよ。あ、ごめんなさい嘘です頭踏む力込めないで」

○最終種目 地獄式大玉転がし

『今回の人質役は魔王レヴィアタン様から提供された氷人形の、「魔王君」、「赤龍君」、「ゴミクス総督」、「考えなし長」です』

『何か氷の人形の中にうつすら人影が』

『気のせいでしょう』

『絶対確信犯だこの子!』

『大玉は柳さんが最近覚えた龍の炎で温められています。さあ、人形手前で止めてその炎の熱で中の人を救いましょう!』

『やっぱり中にいるんじゃないか!』

「ドツと疲れた」

『リハーサルはこれにて終了。明日は本番ですので、キチンとやっってくださいね』

「……………え?」

「じゃあこの変態は明日の夜まで封印しとかなきゃ」

柳の日曜日

「ミルたんを魔法少女にして欲しいによおおお!!」

「「こよ!」」

もはや日曜の恒例になりつつある巨漢の来襲。未だ慣れない三子と遊びに来ていた一子と二子は三人仲良くひっくり返した玩具箱の中に隠れる。

「……………また来たな」

「うむ。信心深くはあるのだがなあ…………」

ふう、と煙を吐き出し白い犬と兔に変えると、玩具箱と床の隙間から辺りを見回す一子、二子、三子が追いかけて始める。

「とうか何あれ、せめて魔法少女になった夢でも見れるようにと高天原に頼んだけど弾かれたらしいのだが」

「……………少なくとも三子が怯える存在であるのは間違いないな」

煙の動物を追いかけろ三子達を見る柳。三子が、世界で二番目に強い龍がビビるってどんな存在なのだろうかアレ。グレートレッド? いや、あれならグレートレッドにすら勝てるのでは無いだろうか?

「捕まえた」

「モフモフ……あれ？」

「消えた」

「煙だからな」

檜から暇つぶしに習った術だ。狐ほどではないが子供をあやすぐらいなら出来る。

「柳様、パチモンの映画連れてって〜」

「連れてって〜」

「連れてって〜」

煙の動物を見て思い出したのか映画のチラシを見せてくる三人。一子と二子は普通の人間には見えないし、天井にでも座って見る気だろう。

「んー。ま、いっか暇だし………」

「センサー。お客様よー」

と、柳が立ち上がろうとした時、巫女服姿の桐生が入ってくる。その後ろには如何にもなお嬢様と言ったいでたちの少女。見覚えがある、三年の安部清芽だ。

「彼氏役？」

「はい。悪魔の兵藤君と契約しようと思いましたが、日本での契約行為は既に禁止されたと聞いたので」

「俺を通して契約の許可をもらいに来たが、いつそつてことか……」

柳は地獄所属だ。裏の事情を知る安部は当然その事も知っており、地獄に住まう獣達と共に力を貸して欲しいそうさ。

「私はまだ結婚したくありませんの。どうか、頼まれていただけませんか？」

「これって現世の過干渉にならねー？」

「寿命に関係するわけでもなし。それに、日の本の民だ……何より柳は生者。問題はなれどと思うぞ？」

となると後は柳の意思次第。こういう家族関係は柳にはさっぱりだ。何せ元の家族が暴力親父に葉中母、変態ブラコン逃避ヤンデレの姉。姉だけキャラの濃さが群を抜いてるな。

「よしこうしよう。俺は彼氏ではなく、単なる魔獣使いで、お前の教師。娘さんを結婚させたくば俺を倒してからにしろ、つて感じで」

「まあ、最終的に結婚させられずに済むのでしたら……それと、おそらく魔獣勝負になるかと」

「魔獣勝負！」

「パチモンバトルみたいに!？」

「我見たい」

「私も見たい。連れてって〜」

『さあ始まりました安部清芽の自由恋愛をかけた勝負。実況・解説は座敷ツイنزこと座敷童子の一子と』

『二子でお送りします』

最近妙なスキルが増えてきたな、と実況席の座敷ツイنزを見る柳。目の前には馬に乗った世紀末覇者……ではなく安部父がいた。

「一つ聞こう。貴様は、本当に我が娘の恋人ではないのだな？」

「ええ」

「では、何故邪魔をするか！」

「担任でなくとも、私は教師ですので。生徒が夢を見たいと憧れるならそれを叶えるまです」

「ふっ。良からう!では、第一試合だ!ステファニイイイ!」

「ホキョオオオオオ!!」

ドラミングしながら現れたのは白いゴリラだった。一子と二子が安部から借りた魔

物凶鑑を開く。

『あれは雪女。イエティの雌ですね。人に惚れる程度の、人に近い知能と冷凍プレスが武器です』

『対する柳選手。いったいどんな獣を用意したのか』

「……………この子達ノリノリね」

審判役の桐生は座敷ツインズを見て呆れたように呟くのだった。

「よし、芥子ちゃん。頼む」

「はいはい。頑張るでーすよ」

『柳選手、出したのはニホンノウサギ芥子ちゃん。地獄屈指の実力派兎ですね』

『かちかち山の狸を倒したその実力や如何に…………』

フスーと息を吐く芥子を見てフフン、と馬鹿にしたように笑うステファニー。桐生は片手上げ叫ぶ。

「はじめ！」

「ステファニー！まずはドラミングだ！」

「ホッキョオオオオオ!!」

ドンドンドン！と胸をたたくステファニー。ちなみにゴリラのドラミングはパーで行いポコポコとなる。

どうでもいいね
閑話休題。

『雪女のドラミングには攻撃力を、高める……』

「効果だよ二子ちゃん」

『高める効果があるそうです』

……和む。が、今は放置。

「芥子ちゃん！影分身！」

「フス！フスフスフス！」

ダダダダダダ！とステファアニーの周りを高速で回転し始める芥子。心なしか増えた気がする。

「ステファアニー！冷凍撲殺棒だ！」

ステファアニーは身につけていたバッグからバナナを取り出し凍らせると空高く投げ。首を傾げる柳。芥子は無視して回り続ける。

「……………芥子ちゃん！タヌキアタック！」

「おのれ狸いいいい！」

技名を聞いた瞬間芥子の目が充血し赤く染まると全身から黒いオーラを放ち、ステファアニーに体当たりする。ステファアニーは吹っ飛び気絶した。

「ステファアニー、戦闘不能！勝者、柳先生！」

『芥子ちゃんは狸という単語を聞くと興奮状態になりステータスが大幅に上昇するそうです』

『相手を一時的に狸と思いこみ、しかしすぐに平静を取り戻す。主人との信頼を深く感じさせられる技でしたね』

「この子たちの解説スキルは何なのかな?」

続いて海の魔物対決。

柳は転移用魔法陣を開く。

「はい! 弥泥魚!」

赤銅弥泥魚旋処しゃくどうみでいぎよせんじょ(高熱の銅汁の海に鉄の魚がおり、溺れる罪人の上半身を噛む。下半

身は銅の海で焼かれ、また海中の悪虫に食いつかれる地獄)に住む巨大な肉食魚。ガチガチと歯を鳴らしながらプールに落ち、プールの中でガチガチと更に激しく歯を鳴らし、やがて歯を打ち鳴らすのを止めると浮かんだ。

「……………」

「あ、普通の水温だと凍死するんだったコイツ」

「え……………えっと、勝者安部先輩のお父さん」

最後は空中戦。お互い魔物の背に乗り戦うと言うものだ。

安部父は巨大な怪鳥に乗る。柳は、黒い蛇のような巨大なドラゴン。途轍もない力

を、最近神社の外でも女の霊のスリーサイズがぼんやり見える程度に霊力が上がってきた桐生も感じる。

「え、えつと……最終試合、始め！」

「勘弁してください」

桐生の開戦の合図と同時に安部父は怪鳥の上の馬の上で土下座した。

「我、サイキョー！」

「……………」

無表情でビシツと決めポーズを取る三子と拍手を送る一子と二子。何あの人形の館じみた空間怖い。

「正体は分からぬが、まさかあれほど強大なドラゴンを連れてくるとは。それだけ娘のことを考えているという事か」

「それは貴方もでしょう？安部、この人も、お前に幸せになつて欲しくて相手を捜したんだ。結婚はしなくても、せめて会つてやれ」

「……………はい。わがままばかりで申し訳ありませんが、面会をセッティングしてもらつてもっ！」

「うむ！ではな、先生……いや、我が友よ！また会おう！」

「所でなんで三子ちゃん私サイキョー！とか言ってたの？」

「あの黒いドラゴン三子だから。相手が戦わずしてビビったからじゃないか？」

閑話2

——くそ！何だその目はクソガキがあ！——

——あの子に関わっちゃ駄目よ。良いわね？——

——給食費が盗まれたって。どうせあの子の仕業でしょう？——

——学校くんな！皆怖がってるんだよ！——

——ああ、こんなに傷ついて。大丈夫、お姉ちゃんは味方だよ——

——動物とばっか仲良くして、気味悪い！——

——良くもウチの子に怪我させたわね！猫の腕を折ったからって腕折るなんて、頭おかしいの!!——

——ご、ごめ……こべんなざい、許して——

——ああ、アナタ……父親になんて事をするのよ！——

——ひっ！いや、こないで！あ、貴方も……結局お父さんと同じじゃない！——

——か、軽い冗談じゃん！別に、怪我してないんだし許してくれよお！——

——人を何だと思ってるんだ！お前みたいな奴はな、将来人を殺すんだよ！——

——何よそんなにムキになって！——

——子供のしたことだろ！このぐらいの年頃にはあることだ！——

——貴方だって暴力振るって、酷い怪我負わせる分質が悪いわ！——

「……………どこだん」

ムクリと起き上がる少年。その目はとても気怠げで、濁っている。

「あれ、貴方は生者ですか？何でこんな所に」

「……………兎が喋った」

妙な少年だと芥子は思った。昔は極々希に、生者が生身で迷い込むことがあったらしい。篋なんかもその一人。しかし今は現世と地獄を物理的に繋げる場所は無いはずだ。少なくとも芥子のいた地獄には。

山とかには残っているらしいが、そこを通ると神に見つかる。そして対処されるはず。しかし撫でるのがとても上手い。おばあさんとおじいさんを思い出しつつい道案内を忘れてしまう。

——ほら、あれが…………——

——やだやだ、余所者。しかも孤児なんでしょ？——

——ほら、しっかり働け！——

——何時も能面みたいな顔でさ、気味悪いよ——

——丁、なんだお前その姿！——

——鬼になったのか!?——

——生贄にならなかつたのか!——

——ああ、そうか。だからか……村が滅んだのは——

——お前のせいだ!——

——この人でなし!——

——良くも村を!——

朝から嫌な夢を見た鬼灯は、三割増しで逃げようとする亡者への攻撃の威力が上がったが、そもそも逃げようとする亡者が悪い。

「鬼灯様鬼灯様」

と、そこへピョンピョンと跳ねながら芥子がやってきた。芥子についてくるように現れたのはどう見ても生者。しかも生き霊などではなく、肉体を持った。

ふと、目があった。既視感を感じた。あの目には、覚えがある。

「この子どうも地獄に迷い込んでしまったらしくって……………」

調べてみたところ、俱生神は憑いておらず記録課にも記録は無い。浄玻璃の鏡で調べても芥子と出会う少し前までしか映らず、彼を連れ現世に行っても彼の知る名の町はあつても彼が言うには時代が違うとか。

「ええー。帰る場所無いの?」

「はい。地獄の嘘発見機総出で調べましたが嘘はありません」

どこぞの馬鹿のせいで人が簡単に異能を振るえる世界だ。時間移動能力を持っている者がいて、その暴走に巻き込まれた可能性もないと言いつれれない。

「どうする、鬼灯君……………」

「地獄に送れば良いんじゃないかねーの?等活か衆合。少なくとも俺はそれに当てはまることはしたぜ?」

「……………まあ、暫く保護しましょう」

「何かすることくれ」

「……………」

聞けば今まで、自分の趣味を優先できるような時間を長期間持ったことがないらしく、何もしていないと落ち着かないのだとか。

取り敢えず等活の手伝いをするように言ってから気づいた。彼は人間だ。罪人とは言え人間を傷つけるのに躊躇いがあるのでは？

「痛い痛いごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「あ？うるせーな。ほらそこの殺された子猫達も今石で削って剥き出しになった肉をザラザラの舌で舐めろ」

「……………」

そんな事は別段無かった。

「コイツの動機は潔癖症による動物嫌い……………その毛の長い犬、蚤多そうな犬、のし掛かりながら嘔みつけ。こっちは、夜中吠えるのがうるさくてチワワを……………耳元で吠えまくれ。大型犬達はフオロー」

しかも的確に指示してる。

一年で等活地獄主任になった。異例の昇進だが不満は現れない。それだけの功績を残していたから。

この頃から妖気を纏うようになっていた。地獄産の妖怪の肉などを食っているからだろう。

嘗て人であり、世に恨みを持ち、地獄へ来て亡者にその鬱憤をぶつけ、今や人をやめようとしている。共通点、探せば案外見つかるものだ。

戦い方を教えることにした。筋がいいのか無意識に妖気を使い身体能力の強化などを行っていた。

薬学について学びたいと言い出した時は自分で教えたかったが多忙のため、腕だけは信用できる神獣に仕方なく預けた。性格が似なくて良かった。

十年ほど経つ。妖気を得た結果か、見た目は若々しい。当初出会った頃は年を偽っているんじゃないかと思うほど小さかったが、それは栄養を摂れていなかったから。よく食べるようになってからはスクスク育った。微笑ましい。

その特殊とも言える縁故か、未だ妖気は安定しない。

ある日から龍の気を放つようになっていた。

原因は連れている龍。彼女が少年に力を与えたのだろう。おかげで力も安定した。

希に思う。子というのはこのような感じなのかと。自分と同じ、鬼灯印の服をオーダメイドしてわざわざ着てきた時にはつい頭を撫でてしまった。笑った閻魔はぶん殴った。

見た目成人とも言える年齢になった年に、出会った時と同じ日に煙管をプレゼントし酒に誘った。ちなみにかなりいける口。

そんな柳は現在……

「……………重い」

「柳ちゃん。無理しちゃ駄目よ？今、貴方子供なんだから」

縮んでいた。出会った当初よりもずっと。

三子の蛇を食うことで少しずつ体型は戻ってきてるが……………。

「取り敢えず、英雄派は必ず落とし前付けさせる」

これはもう決定事項だ。さて、何があったか時を戻そう

目指せ京都

「松田、元浜、兵藤。喜べ朗報だ」

朝のホームルーム、柳は唐突に三人を名指した。

「朗報？まさか、可愛い転校生ですか!？」

「んなわけねーだろ。修学旅行、お前等は班決めしなくて良いって報告だよ。良かったな、こう言うのって人間関係の亀裂生んだりするんだろ?」

「え?何で……」

どうせならアジアと班を組もうと思っていたのにと、イツセーは勿論可愛い女の子と親密度を上げたかった松田と元浜は不満そうだ。

「覗きのための穴作り、その穴を使った覗き行為、スカート捲り、胸に触る、エ……エツチなDVD………これを聞いてどう思いますか?」

と、副担任の新任先生ロスヴァイセがイツセー達に顔を赤くしながら尋ねる。

「青春です!」

「死ね」

ロスヴァイセはずっこけ柳は反射的に眩く。

「すまん間違えた。殺すぞ」

「あんま変わんねー!」

叫ぶイツセーに柳ははあ、と疲れたように溜息を吐き頭を押さえる。

「本来ならお前等修学旅行への参加すら怪しかつたんだぞ。主に女子生徒を持つ保護者達の願いでな、参加させるなつて」

「な、何ですか!」

「てめーらの青春が原因だよ」

柳はそういうとガリガリ頭をかく。

「けど人生で一度きりの修学旅行で、お前等の親からも懇願があつた。だから泊まる場所と班を女子から離すことに決定した」

「なっ!?!そんなの、学園側の横暴だ!」

「俺達は平等を希望する!」

「じゃあ覗きをしねーか?」

「……………」

三人はピタリと口を噤む。覗くつもりだったようだ。女子から冷たい視線が飛ぶ。

「文句はねーな?」

「……………はい」

「桐生、修学旅行には巫女服を持ってけ」

「ほえ、何で？」

と、首を傾げる桐生。三子と一緒に羊羹を食べていた。

「イチヨウは世界ユグドラシル連盟に入ってるからな。植物系の妖精、神が集まってる……」

「世界世界樹連盟ユグドラシルって……重複してるし……それで、何か関係あるの？」

「ウカ様……宇迦御魂様ウカノミタマは稲穂の、植物の神だから参加してて、その関係で……」

「神事を行った私に会いたい、と？」

「そういうこと」

宇迦御魂といえば素戔嗚尊の娘で、稲荷大神だ。そんなに大物に目をかけられるとかある意味凄い事だ。

「神だつて人間とさして変わらないからな。ブスって理由で振られて美人嫌いになった奴もいるし。ウカ様の場合は、人々から離れ祭事も行われなかった友人に久方ぶりの祭事を行った者へのお礼、とさ」

「んー……わかりやすくー！」

「遠くに引つ越した友達が転校先で友達でできなかった所に歓迎会を開いてくれたお礼がしたいとき」

「すっごい分かり易い」

そして修学旅行。柳は車両の端の席に座っていた。生徒達が見渡せる位置だ。問題行動を起こされても直ぐに対処出きる。

「京都は初めてかロスヴァイセ?」

「はい! 日本文化を調べて、まず最初に行ってみたくまりました!」

アザゼルの言葉にロスヴァイセが京都案内を見ながら言う。

「まあ楽しめよ……お、すっげえ美人」

「……………ん?」

不意にアザゼルが隣の車両と繋がる通路を見て鼻の下をのばす。柳は柳で覚えのあ
る気配に振り返る。

「(くん)には柳」

「……………姐己様? 何で現世に…………?」

そこにいたのは現世に合わせてか、洋装というかなりレアな格好をした姐己。

いや、しかし何故ここにいる? 姐己は移住してきた妖怪ではなく死後地獄に堕ちた魂

だ。現世にほいほい来れるはずがない。

「ああ、そういや他勢力との会合も増えて、現世に赴くことも多くなつたから意外と緩くなつたんだっけ」

「ええ。勉強して許可証もらえば後はお金で券を買つて現世まで……簡単だつたわ」

流石ぼつたくり妓楼の経営者にして才女。この程度のことはお手の物のようだ。

「座つて良いかしら？」

「どーぞ」

柳が言う。と姐己はストンと腰を下ろした。柳の膝の上に。

国が傾きそうなほどの美人、というか実際に過去国を傾けた傾国の美女の登場に色めき立っていた男子達は嫉妬の籠もつた目を柳に向けてくる。

「……………動きにくいんだけど」

「あらつまらない」

柳の対応に姐己は肩をすくめ隣の空席に座る。ロスヴァイセがムムムと姐己を見る。

柳と仲が良さそうだが、どんな関係何だろう。

「おいおい姐己って言ったか？傾国の大妖とお前、どんな関係だよ」

「私は妓楼をやつてるの。柳はその常連よ」

「や、柳先生そんな店に行くんですか!？」

姐己の言葉にロスヴァイセは慌てる。聞き耳を立てていた者達は妓楼の意味が分からなかったのか首を傾げている。

「ん？ああ、まあ……結構気持ちいいんだぞ」

「き、気持ち——!?!」

「姐己様の毛並み」

「……………へ？け、けな……………え？」

「姐己つていやあ……………九尾の狐か。そういや柳、いつも放課後動物撫でてたな」

「……………」

ロスヴァイセが姐己を見ると不機嫌そうにふん、と窓の外を見る。同性ながら可愛いと思ってしまう。

「うおおおお！おっぱいいい！」

「!?ぬお、やめろ松田！何故いきなり俺の胸を揉む！男の胸などもんで何が楽しい！」

と、不意にそんな声が聞こえてきた。見れば松田が元浜の胸をもんでいる。おぞましい光景だ。吐き気がする。

「おいおい松田、何してやがる。おっぱい欠乏症か？イツセーみたいな奴だな…………」

と、あきれた様子でアザゼルが諫めにいった。おっぱい欠乏症って何だ病気みたいに。いや、ある意味病気ではあるが。

「全く最近の子は……」

「そう？衆道なんて昔からあったのよお？中国でも日本でもね……」

「……………」

「あら、どうしたの柳。考え事？」

と、姐己は顎に手を当て考え込む柳を見る。柳はいや、と首を振りロスヴァイセと姐己の顔……より少し下を見る。

「何故か急に胸を揉みたく………あ、思い出した。よつと」

柳は唐突に自分の腹を殴る。うぶ、と頬を膨らませ口の中から宝玉をペツと吐き出した。

「なあにそれ？」

「人から人へと渡り歩き寄生した人を胸を揉む痴漢に変える宝玉」

「ええ!?そ、そんな恐ろしいものが………知ってますよ。痴漢は冤罪だけでもその人の人生を狂わせるって……それを、実際に行わせるなんて——!!」

ロスヴァイセが戦慄する中、柳はその宝玉を握りつぶすのだった。

京都到着

悪意地獄と敵意をに触みれたた。

暴力地獄と罵声をを浴みびせられたた。

理不地獄尽をに痛みめつけられたた。

偏見地獄と偽善をを味みわつたた。

一地獄方的をに悪をとされみ蔑みまられたた。

死後の地獄など生温い。魂の浄化という理由を以てして行われる裁きとは違う、理由など無い、強いて言うなら苛立ちの解消や排他による仲間作りという悪意による行為。本当の地獄はどちらか、時折考える。

故に少年は、正義の味方に、英雄に憧れていたんだと思う。なりたいと願ったわけではない。救われたいと願った。

少年が本を好む理由の一つは、そういった弱きを助けるヒーローが好きだったから。だからこそ、ある小説の英雄気取り達はとにかく嫌いだった。記憶から消し去りたいほどに。

「ついたな」

ピリリリという電子音に目を覚ます柳。何時の間にか寝ていたらしく、しかしヤケに気持ちのいい枕に頭を預けていた。

「……姐己様？」

その枕とは姐己の膝。要するに、膝枕されていた。

「ついたわよ柳」

ムクリと上半身を起こし腰を伸ばす。ポキポキ音が鳴る。

「それにしても京もだいぶ有り様を変えたわねえ。風水を以て邪を払う結界が、今やその邪なる者に力を与えるようにしてあるんですから」

「そのの原点作つたの姐己様だろ？」

「あらバレた？」

「だって昔ここに住んでたんだろ？対策を立てないはずがない」

帝を誘惑し墮落させ権力を乗っ取つた姐己は国を傾けたし、崩壊させかけた。しかし決して無能ではない。一部の者に甘い汁を吸わせ味方に引き入れた。ある意味では用心深い姐己が大人しく結界の中で弱体化し続けるとは思えない。

「私の子供達は私より弱くても九尾の狐よ？人間よりずっと頑丈で大きな器。それが本来邪なる者を寄せ付けけない結界を、それこそ永遠に発揮できる龍脈の力を振るえる。利

用しない手は無いでしょうね」

「本当はそのまま子孫を器に復活しようとも考えてた？」

「ええ。でも補佐官様の目をかいくぐるのも、かいくぐつたとしても見つかつて罰を受けるのもごめんだつたしねえ。補佐官様を本気で怒らせる奴がいるとしたらきつと自殺志願者だわあ」

ケラケラ笑う姐己もまさかこの時、そんな大馬鹿が現れるなんて思っていなかった。

「おおおお。すつげえええー！」

と、松田が叫ぶ。そこは老舗旅館。他の二年生達が泊まるサーゼクスホテルとはまた違った趣の高級感漂う旅館だ。

露天風呂付き。

「センセーよくこんな旅館見つけたな！」

「やつすい所に押し込まれるかと思つたぜ」

「おう、見直したぜ！」

「てめー等に見直される筋合いはねー」

三人の言葉に柳は若干不機嫌そうに答える。

「神社ってのはお前等が思う以上に横の繋がりがあるんだ。そのコネで急遽用意しても

らったんだよ」

「ほほう………ん？おい、二人とも！」

と、不意に元浜が松田とイツセーを呼び寄せる。

コソコソと柳に聞こえないように声を潜めながら露天風呂の案内図を見る。そこには、こう書かれていた。『混浴あり』と。

ニヤリと三人はイヤらしい笑みを浮かべる。混浴なら合法だ。本来なら柳が止めるだろうが、それならわざわざこんな旅館を選ぶはずがない。知り合いに頼んだので調べが甘かったのだろう。

三人はピンク色の妄想を広げるあまり柳がイツセー達に負けず劣らず邪悪な笑みを浮かべイツセー達を見ている事に気付けなかった。

「センサー、ここに本当にいるの？って、いるか。稲荷大社だもんねここ」

巫女服に着替えた桐生は柳の後に続きながら千本鳥居を歩く。柳の背には三子がい
た。

「てか三子ちゃん連れてきて良かったの？」

「今回は留守番してもらおうつもりだったが、京料理が食いたいって何時の間にか俺の鞆

に入ってたんだよ」

柳が荷物を出そうとバッグを開けたらよつと片手を上げる三子の姿。中に入れておいた着替えについて聞いたらバレないように隠したとか。グリグリした柳を誰が責められようか。

「と、此処だな……」

不意に柳は鳥居と鳥居の隙間に入る。桐生が首を傾げていると違和感に気付いた。何時まで経っても反対側から現れない。不思議に思い飛び込むと妙な空間にでた。どこかの部屋だ。

なにが妙つて頬杖を付き煎餅を食いながらテレビのチャンネルを変える少女が居たことだ。

「……………ウカ様」

「ぬわっひゃい!?!」

柳の言葉に少女はビクリと身体を跳ねさせ慌てて振り返る。そして柳達の姿を確認するとパンパン手を鳴らし何処からか大量の白狐を呼び出し部屋を片づけさせる。

「コホン……………久し振りじゃの」

「お久しぶりです」

この人がウカ様なのか。神社の中だから薄ぼんやり見える。スリーサイズはハツキ

りと。駒王のマスコットと言われる塔城と良い勝負だ。

「おお、お主が桐生藍華か？……何故だろう。何か、あまり見られたくない気がする」と、自分の身体を隠すように抱きしめるウカ。

「お、お来たか柳！いや、これは違うぞ!? わらわは別に普段からこんな生活を送っているわけでは……」

「あ、ウカ様お客様ですか？うわ、見違えるほど綺麗になってる。毎日これくらいはしてくれると助かるんですけど。あ、ちようどお煎餅を持ってきたんです。お茶を持ってくるので待っててください」

不意にやってきた巫女が柳達を見ると頭を下げ煎餅を置いていった。恐らく見える者なのだろう。その口から、先程までの光景が彼女の日常だと言う事実が発せられた。

「……………何か言いたいことがあるならばつきり言え」

「ウカ様って茶吉尼の側面やつてるのに色気無いですよね」

「今更か！つーかうっさいわ！閻魔大王も地藏菩薩と似とらんじやろうが！」

ポカポカ殴るウカにケラケラ笑う柳。ボリボリ煎餅を食べる三子に三子の口元に煎餅を持って行く桐生。茶を持ってやってきた巫女が見たのはそんな光景だった。

「すまん取り乱した」

「構いませんよ故意犯ですし」

「ぬう。補佐官殿と違いお主は相変わらず、親しげに揶揄ってくるからやりにくい……」
 例えば鬼灯なら、彼のドSは基本的に亡者をいたぶる事に発揮されるだろう。しかし柳は親しい間柄にもSが向く。揶揄うだけだが、本気で怒られないギリギリを見計らつてくるから質が悪い。鬼灯と違い十数年、人から忌避された故か、人との繋がりを求めかつ、微妙に歪んだやり方でやりとりする。こいつの恋人絶対苦労するなど何度か思った。ていうか10回目辺りから少し楽しくなってきた。揶揄われることと言うより、その後のやりとりが。

ウカははあ、とため息を吐き素戔嗚尊の子を揶揄ってくる友人を見た。

「さて、改めて数年ぶりだな。其方が？」

「あ、ども……」

「うむ。我が友の神事を行ってくれて感謝する。神事は神が人に紛れる数少ない行事、特にそれが自分のモノとなれば……もつと言えばイチヨウのように人と触れ合えるモノとなればな……」

イチヨウは木霊と違い若い若い樹木だ。故に人に見えるように姿を現すこともあった。だからこそ、神の中で割と人と関わるのが好きなのだ。楽しそうに話していた。

「本当に、ありがとう人の子よ」

「あ、えつと……………どうも?」

神性EXのウカの微笑みにたじろぐ桐生。と、その時一匹の白狐が現れウカに耳打ちする。

「何じゃと!」

「どうしたんですか?」

「う、うむ……………実は当代の九尾の狐……………八坂……………の娘九重が攫われたらしい」

「……………娘?」

「うむ。最初は八坂が襲われたそうじゃが、護衛についていた補佐官殿が……………金棒で霧を払ったらしい。この霧つて恐らく神滅具だと思っただが、補佐官殿の金棒つて何じゃったつけ?」

「数々の拷問器具を圧縮した金棒です。持ち主と認められないと棘を踏む呪いがかかった……………まあ考えてみればアレ、日常的に地獄の最高神叩いてるので何らかの力に目覚めてる可能性も」

「日常的なのか……………てか今更じゃが神滅具が神を討ったという話聞いたこと無いぞ」
「それより、情報を交換しに行きましょう。相手はロリペド、ウカ様も狙われるかも」
「そうじゃな……………認めたくないが、わらわ幼児体型だし……………」

あれ、元々は母親の方狙ってたんじゃないの?と桐生は首を傾げたがまあ実際娘が攫

われてるし母親の方は陽動の可能性もある。業の深いテロリストもいるな。あつたらエロリストと呼んでやろう。

「今残ってる派閥だと旧魔王派のシャルバ・ベルゼブブ、それと英雄派だな……………今回は恐らく英雄派」

「シャルバ・ロリゼブブとa u派？私はd o k o d e m o派」

「態とか？」

「うん」

「……………似た者師弟だな」

今代の九尾

桐生は所詮霊力があるだけの一般人。ホテルに戻らせ、柳はウカの使い狐の案内の下裏京都に入る。

「うきやきやきや！」

「……………古い。二点」

柳の言葉にお化け提灯はしょんぼり帰って行った。

最初は次は俺が、などと騒いでいた妖怪達も神の使いである稲荷狐に睨まれ大人しくなった。しばらく進むと屋敷が見えてきた。

「と、言うわけです」

鬼灯が締め、柳は一度情報を纏める。元々柳は何かが起こることは覚えており、それを鬼灯に報告していたのだ。その結果護衛に鬼灯が加わった妖怪達に、一応英雄派が襲ってきたらしい。

日本神話は既に協力関係を築いていたが、妖怪達は日本神話の配下、と呼ぶには少し違う。故に改めて協力関係を結びに須弥山の使者と会談しに行ったのだ。

その道中霧が現れ、鬼灯が金棒を振るうとチリチリに吹き飛んだ。

その後使者である孫悟空と協力関係を結ぶ署名をして帰ってみれば騒がしい屋敷。聞けば八坂の娘九重くわのうが霧に包まれ消えたと。

「恐らく黒歌さんの報告にもあつた絶ディメンション・ロスト霧でしよう」

「そうか……あれが彼の神殺しの………ん？ 鬼灯殿、それ金棒一つで払ってなかつたか？」

鬼灯の言葉に神妙な顔をした八坂は、神滅具の霧のおぞましさを思い出しながらそれを埃でも払うかのように打ち払った鬼灯を思い出し、顔をひきつらせた。

「八坂さんに九重さん。二人の共通点は九尾……つまりこの地の恩恵を受ける存在であるということ」

「——っ！まさか、わらわを使つて行はずだった儀式を九重で行おうというのか!? 九重はまだ子供じゃぞ、そんな事をすれば！」

と、顔色を変えて立ち上がる八坂。

柳は顎に手を当て思考する。原作ではそう、確か八坂が捕まり九重が暴走、そこでイツセー達とあつていた。その後は、どうだったか？ 取り敢えず八坂を使い実験を行おうとしたのは覚えている。八坂は……苦しんでいたような気もする。成熟した八坂でそれなら、幼い未成熟な九重で行うと……。まあ、下手すれば壊れるだろう。良くて後

遺症が残るかもしれない。が……

「どうでもいい、のか………」

「……………何だど？」

ギロリと縦に避けた瞳孔で柳を睨み付ける八坂。娘が死ぬかもしれないのにどうでもいいと言われ気が立っているのだろう。

「いや、英雄派に取って九重姫の命が。多分人外だから……人じゃないから何してもいいって思ってるんじゃないですか？ 実際そう言った理由で等活は何時の時代も大忙しですし……人の形をしてようと、というか同じ人間でも周りと違うってだけで平気で傷つけられるのが人間ですしね」

それには鬼灯も同意だ。大多数と異なっていればそれを理由に悪とし自分達を正当化する人間の醜さは、鬼灯も柳も良く知っている。

「で、ではどうすれば！」

「まあ自分から英雄を名乗る奴等ですからね。英雄の子孫だとか生まれ変わりだとか、その辺にプライドを持つてるなら向こうから接触してくる可能性が高いですね」

「何故ですか？」

「英雄ってのは名乗るものじゃないですよ。名乗るのは、自分スゲーって言いたい自己主張の強い奴」

「確かに当初の桃太郎さんもそんな感じでしたね」

柳の言葉に過去を思い出し納得する鬼灯。鬼灯の同意も得られたことだしそのまま続けることにした。

「だからきつとこう思う。俺達なら何でも出来る。何が来たつて対処できる……そう
いう奴等は敢えて相手を挑発してくる。陰でこそこそやって表では味方面する奴より
よっぽどわかりやすい」

「つまり、私達という強敵を倒して目的を達成し、自分達はこんなに凄いんだぞ、と叫び
たがっている？」

「その可能性が高いですね」

「……………餓鬼のおふぎけか。神になるとか大層な目的を持っていたならともかく……………頭
痛くなつてきました」

はあ、と頭を押さえる鬼灯。何気に英雄派は、柳が知りうる限りチュンを除いて初め
て鬼灯に痛みを覚えさせた存在だったりする。これは警戒した方がいいかもしれない。
「とはいえ私は一度神滅具を無効化した身。もう一度来るとは思えない……………それに、
まず狙うとしたらやはり本命だった八坂さんの可能性が高い」

「ふむ。わらわが囷になれば釣れるかもしれん、と？」

八坂の言葉に妖怪達がざわめき次々と危険だからやめろと叫ぶ。

「危険は承知の上。しかしわらわ以上に、九重が危険かもしれないぬのじゃ。ただ待つなど、出来ぬ」

「では柳さん。護衛をお願いできますか？ 本当なら後数人欲しいところですが……三子さんは気ままに行動しそうですし」

「あ、なら元々龍王クラスで、京都に来て数倍強くなってる知り合いがいました」

「そういえば彼女、現世に来てましたね。まさかいきなりここに来るとは……解りました。頼んでみてください」

「了解です。ところで……そこにいるのは悪霊の類ですか？」

「テロリスト殺すテロリスト殺すテロリスト殺すテロリスト殺すテロリスト殺すテロリスト殺すテロリスト殺す……折角、漸く、数日羽が伸ばせると思つたのに……」

柳の視線の先には、部屋の隅で体育座りしてブツブツと呪詛を吐きながら周囲の空気中の水分を凍らせている着物姿の黒髪の女性がいた。

「ああ、レヴィアタン様ですよ。彼女も護衛につけましょうか」

「う、うむ。魔王殿……わらわは囿になるため京を回る。案内してやるから元気出せ、な？」

と、八坂がセラフオールに話しかける。セラフオールはコクリと頷くと冷気を取めた。

「ところで柳さん、三子さんは……」

「え？ああつ、いない!？」

英雄派達が拠点にしているアパート。その一室には霧による結界が張られ、何者も術者の許可なく出入りすることは出来ない。

「はあい、お姫様。ご飯よ。実験のためにキッチンと精を付けてね。あれ?」

入ってきた金髪の女性は買ってきた弁当を見て首を傾げる。

「……………ねえ曹操」

女性はダサ……………変わった格好をしている男に話しかける。

「ん?何だジャンヌ……………それより決め台詞どれが良いと思う?」

「うん。どーでも良い」

見せてきたノートを片手で払うジャンヌ。

「一つ聞きたいんだけど、九尾の狐の娘って双子だったっけ?」

「どうでも良くはないだろう。俺達は英雄なんだ」

「……………」

ジャンヌはふと周りを見回す。鏡の前でポーシングを取る剣士、自分の前世だという英雄の物語を見てニヤニヤしている筋肉と祖先自慢を下っ端にしているメガネ。

かく言う自分も聖人の魂を受け継いでいる………らしい。正直言ってあんま自覚ない。昔なら喜んだかもしれないが、異能がバレ両親に捨てられる前に日本に来た時に会ったある人物の言葉を思い出すと、どうにも………

——落しましたよ。ああ、桃太郎。好きなんですか？——

——ヒーロー物は大好きです——

——まあヒーローモノと言えばヒーローモノか。とはいえ、英雄なんて死んでしまえばそれまでですけどね——

あの時の目つきの悪いお兄さんの言葉が頭から離れず、ぶっちゃけ前世や祖先が英雄だから何だっと思考になっている。特に周りの連中見ると。

「……………退職しようかな」

幸い彼女は才能があり、禁手に目覚めたのは禍の団が行動を起こす前。各勢力を襲ったりしてないし、情報吐けばきつと罪の軽減が出来るはず。

自室に向かいながら、チラリと霧の結界の中を見る。

「……………うん。やっぱり双子に見える」

金髪狐耳をはやした幼女とその幼女と瓜二つすぎて狐に化かされてる気もする黒髪目の焦点があつてない幼女。結界の中には誰も入れないとかメガネが自慢げに言つてたし、多分最初から居たのだろう。

年の近いレオナルドとカルタしてた。ちなみに読むのは金髪狐。黒髪狐がカルタを取ろうとするたんびに壁にカルタが突き刺さる。

「……………ん？」

ヒュツ！と頬の横を何かが通り抜け振り返れば、カルタが壁に半分ほど刺さっていた。誰も出入りできない結界とはいったい。

露天風呂

柳が用意した旅館の風呂は男、混、女と並んでいる。一番広い混浴は真ん中で、故に女湯を覗くにはまず混浴に入る必要がある。

昼間は柳が気づいていないと思っていたが、恐らく混浴に入らせないことで覗きを防ごうとしたのだろう。しかし、今柳はいない。何故か時間になっても戻ってこなかった。

「行くぞ、松田、元浜」

「ああ」

無駄にキリツとした三人は混浴に入る。

そこに居たのは、筋肉。

温泉に塗れテカテカ輝く大きな筋肉。

右を見ても筋肉。左を見ても筋肉。奥を見ても筋肉。鋼のような肉体美を持った漢達。

「……………」

呆然としたイツセー達は、正気を取り戻すと踵を返そうとする。が……………

「三人とも来てたによ？」

ポン、と松田と元浜の肩に人の顔を握り潰せそうな程大きな手が置かれる。イツセーは後ずさると壁にぶつかった。否、それもまた筋肉。

「……………み、ミルたん……………」

それはイツセーが悪魔として活動している時のお得意さまの一人で、松田と元浜に紹介した相手。

「ちようどよかつたによ。一緒に背中を流すによ」

「な、何でここに……………」

「ポストにこの旅館の無料券が来てたんだによ。毎週神様にお祈りしてるご褒美に」
怪しめよと思ったがミルたんは常識は通用しない。

「あれ、松田君と元浜君にや？」

「来てたんだみ？」

「一緒に入ろうよん」

「それ良いにえ」

と、イツセー達に気付いた筋肉達が一斉にこちらを向いて、親しげな笑み浮かべて寄ってきた。裏も下心もない、純粹に旅先で友人に会えて喜んでる笑顔。少なくとも先程までイツセー達が浮かべていた笑顔より百億倍はましたが、彼等には何よりおぞま

しく見えた。

「馬鹿な奴等だ。お前等の行動なんて予測済みなんだよ……」

貸し切りにした男湯で巨大な狐を洗う柳は、聞こえてくる悲鳴にふん、と鼻を鳴らす。今度、この地獄を提案してみよう。きつと効果があるはずだ。

「面倒な世の中になったわねえ。ちよつと昔なら女を襲うなんて珍しくもなかったのに」

「まあそしたら結局地獄行きだけだな」

ブラシでシャツシャツと毛を撫で、ごつそり取れた毛を排水溝に詰まらないように燃やす柳。狐……姐己はブルルと身体を振るわせ水気を一度払う。身体に張り付く毛が不快だったのだろう。そして湯船につかる。

「現世の湯も久し振り。そういえば、西洋じゃ若い女の子の血で満たされた浴槽に漬かった子が居たらしいわね」

「ああ、カーミラか。吸血鬼の真祖の一人……やらせないからな？」

「冗談よ」

姐己はそう言つてクスクス笑う。柳も湯船に入ると姐己は人型に戻り柳にしなだれかかつてきた。

「火照ってしまったわ。ねえ、慰めてくれないかしら？」

「……………水風呂で冷ましてくれ」

「……………」

柳の言葉に不機嫌そうに顔をしかめる姐己。

「つまらないわね。あなた性欲無いの？」

「ある。ただ、興味ないだけだ」

「ならどつちでも良いじゃない」

と、顔を近づける姐己。柳はそれを止める。

「そーだね。これがそこの女なら、まあ良いかですませたんだろうけど……………姐己様は特別だから」

「……………特別？」

「俺は基本的に他人はどうでも良いか嫌い。自分のことを優先してらつて解る奴は特に嫌い……………でも特別な奴等もいる。唐瓜とか茄子、お香姐さんに……………鬼灯様。そして姐己様……………後一子、二子、三子」

指を折りながら数えていく柳。その中にミキだのマキだの茶吉尼だの女の名前が少し入っていたのは不愉快だが、まあ同僚以外で最初に出た名だから良しとしよう。

「でも俺はこの特別がどういった特別なのか解らない。何せ誰かを好きになったことな

なんて生前無かったんだ。いや、一度だけ……多分初恋はしたけど、クソ姉のせいで叶わなかった」

「解らない？」

「親愛なのか友愛なのか、或いは恋愛なのか……だから、姐己様達は抱けない。俺自身、この気持ちは何なのかはつきりしないかぎりはな……」

「……………」

姐己ははあ、とため息を吐くと立ち上がる。艶めかしい体に雫が伝うが隠そうともせず湯船からあがる。

「姐己様？」

「夜風に当たってくる。興が冷めちゃった……………」

姐己はそう言うのと風呂から出て行った。

「……………今、良いか？」

「お、また九尾……………」

入れ違いで八坂が入ってきた。尻尾と耳は出ている。あの尻尾触って良いのだろうか？

「明日は頼むでな柳殿」

「ああ。とっつかまえてあんたの娘の居場所を吐かせる」

「うむ。ありがたい……」

「ところでここ男湯なんだが」

と、柳が言うのと八坂はニヤリと妖艶に笑う。

「かたいことを言うでない。明日は、互いに命を預けるかもしれぬのだ。それに、この濃密な龍の気配……雌に放っておけと言うのがどうかしておる。どうじゃ？ 今晚、わらわと共に……」

と、その時だった。

「わはは！ 私が一着だ！」

ドボンと金髪の少女が湯船に飛び込む。続いて瓜二つの黒髪の少女が……最後に褐色肌の白髪の少年が。

「こら九重！ 風呂に飛び込むな！ 先に体を洗え！ 何時もいつておろう……」

「う、申し訳ありません母上」

「うむ。わかれば良い……ん、九重？」

「はい？」

「九重」

「はい」

「九重！」

「はいー」

その頃、金髪の女性は混浴に向かっていた。

タオルさえ巻いてれば、よほどの視線にさらされない限り羞恥心はない。

「ふんふん、やっぱり入るなら一番広い混浴よねえ」

ガラツと戸を開ける女性。目に映ったのは筋肉。

ストレッチする筋肉。背中をあわせお互い伸ばす筋肉。細い三人をストレッチさせる筋肉。女性は無言で戸を閉める。

「女湯いこつと」

自首する聖女

ジャンヌは周囲の馬鹿どもを見渡す。

「うん。辞めた」

決心した。子供の悪影響になる前に子供たちと抜け出そう。そうと決まれば早速行動。

「やつほー。いい子にしてる？」

「いたんだよ、誰も知らない女の子」

「はい！」

スパーンとレオナルドがカルタを弾く。飛んできたそれを人差し指と中指で止めるジャンヌ。

「くるしいよ、どこから聞こえる謎の声」

「えい」

黒髪狐がカルタを弾く。硬さ重視の聖剣を生み出し盾にするとカルタが三分の二ほど食い込んだ。

「……………何そのカルタ」

「ホラーカルタ。三子ちゃんの……」

レオナルドはそう言うのと黒髪狐を指さす。彼女が三子か。どっから持ってきたんだこんなの。

「ねえねえ三人とも。観光したくない？」

「観光？我はこの京都のことなら何でも知っておるぞ！」

えっへんと小さな胸を張る九重。レオナルドと三子はパチパチと拍手する。無表情だから結構怖い。

「じゃあさ、お姉さんとレオナルドを案内してくれない？ レオナルドも、見てみたいよね？」

「……………良いの？」

「うん♪」

レオナルドはジャンヌの服の裾をつかむ。そして……

「行く」

と小さく呟いた。

「ゲオルク、ちよつと狐のお姫様お風呂に入れて上げたいから結界解いて。ほら、獣臭いお姫様連れてても格好つかないでしょ？」

「それもそうか。よし、結界は解いたよ……先に洗脳だけでもしておくか？」

「それより話の途中だったんでしょ？ 偉大な先祖様のお話もつとしてあげなよ」
「む、そうだな」

助かったと言いたげな顔をした構成員達は一転して絶望顔になった。

「ここの景色は絶景じゃ。何せ世界遺産じゃからな」

「これは雲龍図。どこから見ても睨んでいるように見える『八方睨み』じゃ」

「ほら、ここの湯豆腐は絶品じゃ」

一頻り案内した後九重のお薦めの湯豆腐屋で食事をとる四人。

「ところで今更だが、私にそっくりなお主は誰だ？」

「え、姉妹じゃないの？」

「姉妹……？ もしや、妹か弟が欲しいという私の願いがついに叶ったのか!? よし、名は九美だ！」

「違う。我三子……こつちがやな……柳様ったら、迷子」

無表情のまま仕方ないと言いたげに嘆息する三子。迷子はこの子だろうに……。

「仕方ない。柳様探す」

「探すたってどうやって……」

「我柳様センサーある……」

そう言つて人差し指を虚空に向ける三子。三子の案内の下に老舗旅館についた。

「あ、露天風呂あるんだ。皆、ちよつと入つてから会いに行こうよ」

「……と、言うわけです」

「ほつほつう?」

ジャンヌの告白にセラフオルーは笑顔で片手に氷の塊を作る。

「うんうん出頭するのは解つたよ。じゃあ早速構成員の情報と潜伏先を言おつか? それとも体の中から氷柱で貫かれる? それとも胃の中から少しずつ凍つてみる?」

「何この人怖い!」

ジャンヌの口に向かって蒼く輝く氷の塊を近付けるセラフオルー。目が正気じゃない。コイツは(頭が)ヤバいと判断したジャンヌは知りうる限りの英雄派の情報、そしてリーダーである曹操が冥府の王ハーデスと手を結びサマエルを使用していることを教えた。

「ふーんなるほど。よし、冥府を滅ぼそう!あのアインズ擬きめ、長生きして偏屈になりすぎたみたいだし年貢を納めさせてやる!」

「いやー魔王ちゃん。それはまずいでしょ、他の魔王達とも相談してさ……」

「……………他の魔王?」

ギロンと光のない瞳がジャンヌを見る。あ、これ地雷踏んだわ。と判断したジャンヌは周囲に助けを求めるも母親に抱きしめられる九重、抱きしめる八坂。柳に叱られ耳を押さえ「聞こくえくなくい」と無表情で騒ぐ先程と姿を変えた三子。

一本角の鬼に巨神兵を出せないか尋ねられているレオナルド。これ味方いいわ。

「他の、魔王……………たとえ冥界に巨大怪物が現れ暴れたとしてもゲームのシステム弄りに専念しそうな奴や基本的に寝てる奴やこんな現状でも未来の弟のためにコスプレしようとか言ってくる奴が……………やだああああ! 疲れたよおおお! 魔王の仕事疲れたよおおお! 誰か代わってよう!」

「え、ええ!? ちよ、な、泣かないで魔王ちゃん! いや漫画のタイトルじゃなくてね!? ああ、もう! 落ち着け私!」

「……………ふむ。これはどういった状況だ?」

と、そこへ一人の大男が入ってくる。先程ジャンヌが見た悪夢のような光景を作り上げていた男達よりも一回り大きな巖のような男だ。

「ああ、来ましたか」

と、鬼灯が顔を上げる。

「今晚は。急な呼び出し申し訳ありません」

「何。英雄を名乗る者達が現れたと聞いたのでな、先人として、見ておきたいのだ」
「……………鬼灯様、この方は？」

三子の頭をグリグリしていた柳は圧倒的な存在感を放つ男を見て固まる。強い。少なくとも今の柳よりは遙かに。魔王、下手したらそれ以上の実力者だ。

「ヘラクレスだ。よろしく頼む」

「あ、どうも……………え、ヘラクレス？」

「うむ。人の部分を切り捨て、神になっただしが無い男だ。世間では英雄などと持て囃されてしまったが」

「……………は、はあ」

「その少女よ」

「は、はい！」

「我が半身の同胞だったと聞く。我が半身は、どのような人物だ？」

「バカです」

英雄派が泊まるホテル。貸し切りにしたそこで各々明日の準備をしていると、不意に一階で硝子が割れる音が響いた。が、それだけ。下から感じる気配は、あがつてこない。

「……………これは、つまりそういうことか」

「どういうことだ曹操」

曹操の呟きにゲオルクが尋ねる。

「俺達の生み出した疑似京都に場を移せと言っているのさ。そこで存分に戦おう、と……………大した自信だ。相当な実力者が来たと見える。良いだろう、俺達が英雄となる足掛かりに相応しい相手だ」

ふつ、と笑う曹操。それに続いて幹部達も笑みを浮かべる。

「ひよつとしたら、俺はここで禁手を使うことになるかもしれないな」

「そんなにかい?」

「ああ。俺の禁手なら相当の手練れ相手でも善戦できるだろう。所でジャンヌとレオナルドはまだ風呂かい?」

「子供と女性の風呂は長いからね」

ゲオルクが肩をすくめ霧を展開する。その霧は階層を駆け抜け一階にいる者達も一緒に偽りの京都に転移させる。決戦の場は、二条城。

英雄の子孫、生まれ変わりたちに相對するは……………

目がヤバイ魔王（かなりの手練れ）に今代の九尾（人質となりそうなのが居ないのでかなりの手練れ）、初代九尾（超手練れ）無限の龍神の眷属（かなりの手練れ）と神格化

したヘラクレス（規格外）、無限の龍神（規格外）、そして……常世の闇鬼神（規格外）。
英雄派の未来や如何に。

ヘラクレス対アルケイデス

「では、初手は私からやろう……」

ヘラクレスがそう言うのと膝を曲げ地面に指を沈める。まるでゼリーに指でも沈めるかのような何気ない動作で地面にピシリと亀裂が走る。

「ぬんー」

瞬間、地面が文字通りめくれあがり英雄派達を飲み込んだ。

嘗て大陸を二つに分けたその力は健在。いや、神代から今の時代。その力はより強大なモノとなっているだろう。

「ふむ。やはりこの程度では無意味か」

圧倒的な光景とはいえ、ひっくり返したのは神滅具で形作られたとはいえ所詮地面は地面。烏澁がましくも神殺しを騙る霧に防がれた。

「いきなり、やってくれるね……と……ところでそれは新手の冥界生物かい？」

「殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス」

学ランに漢服という妙な格好をした男は、黒いオーラを放ちながら足元を凍らせていくセラフオーラを見て尋ねる。が、気にせず槍でトントン肩を叩く。敵を前に何してる

んだらう？攻撃して良いのだらうか？

まあ今回こちらには英雄と呼ばれる者の先人として様子を見に来たと言うヘラクレスが居るので少し待つが。

「曹操と名乗っている。三国志で有名な曹操の子孫さ——一応ね」

「でも知名度じゃ劉備に劣るよな」

「僕はジーク、仲間はジークフリートって呼ぶけどね。彼の有名なシグルドの末裔さ」

「知ってるぞお前。魔剣と三刀流なきやアーサーに全然勝てないんだろ？」

「俺はゲオルク。ゲオルク・ファウストの子孫だ」

「誰それ？」

「俺はヘラクレス！大英雄ヘラクレスの生まれ変わりだ！」

「お前は、思ったよりひよろいなとしか」

英雄派幹部は全員その場でうなだれた。やって良いのだらうか？こっちのヘラクレスも困惑している。セラフォルは今にも飛び出しそうだ。

「お前、少しは手加減しろよ！この人達変にプライド高いからそういう反応に傷つくんだぞー！」

「知らんてそんなの」

英雄派構成員の台詞をバツサリ切り捨てる柳。ヘラクレス（神）はふむ、と顎に手を

当てる。

「若き英雄を目指す者達よ。君達は何を以て英雄へと至る？」

「……………貴方は？」

「そうだな。では……………アルケイデスと名乗らせてもらおう」

ヘラクレス、否……………アルケイデスはそう名乗ると改めて英雄派達を見る。

「再び聞こう。君達は、何を以て英雄へと至る」

「……………シンプルさ。『人間』としてどこまでやれるか知りたい。そこに挑戦したいんだ。それに悪魔、堕天使、ドラゴン、それ以外の超常の存在。それらを倒すのは何時だった人間だった。人間でなくてはならない」

「……………」

「よわつちい人間のささやかな挑戦だ。人間のままだどこまでいけるか、やってみたくなっただけさ」

「そうか……………」

アルケイデスは腕を組み、数秒上を向くとはい、と下げる。

「若いな」

「何？」

「私も嘗て、自分の特異性を知り、何が出来るのか、何をやれるのか知りたくなった。そ

の果てに残ったのは破壊だ……後に英雄などと称えられても、私がやったことは敵を殺すだけ」

「ほう？もしやどこぞの英雄か？しかしアルケイデス……知らぬ名だ。そうだ、英雄と言えば柳、君もうちに入らないかい？龍の血肉を食らい力にするのは、まさに英雄の卵と呼ぶにふさわしい行いだと思うんだがね」

「え、ダサイからやだ」

即答。顔をひきつらせる英雄派だが、曹操だけはふつ、と笑い肩を竦める。

「仕方ないな。では、人ならざる者として、俺たちに滅ぼされると良い」

「……もう良い。口を閉じろ若造」

アルケイデスはそう言うのと拳を構える。

「守る者無き拳に一体何が乗るといふのか、見せてみる」

「へっ！殴りあいがお望みか？なら、俺の拳でバラバラに吹っ飛ばしてやんぜ！」

「ぬん！」

真つ先に飛び出してきたヘラクレスに対し迎え撃つように拳を振るうアルケイデス。次の瞬間、一瞬にして細かい肉片に変わる。

……ヘラクレスが。

「な!?!馬鹿な——!」

「開戦だ。行つて良いですよレヴィアタン様」

「ヒヤツハー！」

柳の言葉に飛び出すセラフオール。余程心労がたまっていたのだろう。壊れかけてる。

「覚悟しろ魔王め！」

「正義の刃に切り裂かれるが良い！」

「邪魔☆」

迫りくる構成員にセラフオールは蒼い氷の弾丸を撃ち込む。小さなそれは皮膚を突き破るも貫通するほどの威力はなく、当たり所によつては我慢できなくもない。英雄派構成員達は無視して突き進もうとしたが、次の瞬間体内から生えた氷柱の群に貫かれる。

「へえ、やるねえ……」

と、魔剣を持った白髪の少年が微笑む。

「では僕の魔帝剣グ——」

剣を掲げて笑みを浮かべる優男はその姿のまま凍りついた。その滑稽な姿を永遠に保つのかと思いきや氷が砕ける。もちろん中身ごと。

セラフオールは残った魔剣のうち一本の剣を掴む。

『五月蠅い黙れ』
『!!』

セラフオールに触れられた瞬間拒絶するように震える魔剣だったが、セラフオールの恫喝にピタリと止まる。背後から迫った英雄派を斬り殺したセラフオールはうん、と満足そうに頷く。

「あのバカ達もちゃんと斬れそう。良いもの拾っちゃった♪」

「狐火」

八坂と姐己が放った炎が英雄派構成員達を灰すら残さず焼き尽くす。

「てめえええ！よくも！」

「下品でいやん」

焼き尽くされた構成員の中に恋人でもいたのか激昂して迫ってきた男に向かって、姐己は尻尾の一本を振るう。男が持っていた斧が碎け、男の臓物が舞う。

「……………そのお姿、やはり初代……………なのですか？」

「まーね。ところで貴方、昨日柳を誘惑してなかった？」

「え？」

「アレは私が狙ってるの。次出し抜いて唾付けようとしたら喰い殺すぞ」

「——っ！肝に、銘じます」

「てりやー」

三子が拳を振るうと、それだけで暴風が発生し京の街並みが吹き飛ばされていく。

「てーい」

龍殺しの特性を持った神器を禁手化させて後ろから襲ってくる英雄派構成員達も、纏めて吹き飛ばす。むふん、と無表情で胸を張る。

「あまり油断するなよ？向こうはまだサマエルを使ってない」

そんな三子に迫った一団を蹴り飛ばした柳は周囲に警戒する。

「……………つか、どこ行つたゲ……………ゲ——」

「ゲゲゲのゲ」

「ふむ……………」

蹂躪されていく英雄派を目の前にして、しかし曹操は慌てずその光景を眺める。

「……………うん。やるね……………流石流石」

「ずいぶん余裕ですね」

鬼灯は一見すると隙だらけにも見える曹操を警戒しながら睨む。馬鹿の集まりとはいえ……まあそれなりの戦力を集めていた男だ。それにこの余裕な態度、何か企んでいるのだろうか？

「兵数は力なり。ここで幾らか失っても代えは利く……だから皆、ここで死ぬ」

曹操の言葉に数人の構成員達が一斉に各々に向かつてくる。とはいえ禁手も使っていない……いや、使えない下つ端のようだ。一瞬で死んだ。が、その一瞬のうちに禁手に至った者達が首筋に何かを打ち込む。

「が、あああ！」

「うぐうう！」

「は、はは！来たぜ、力がみなぎってきたあああ！」

「二「カオス・ドラ——」二」

「ここにきて強化とか面倒なことはやめてください」

鬼灯が金棒を振るい、身体変化が現れていた数十人の構成員の七割を吹っ飛ばした。

ハーデスの隠れ兜

流石に距離があつたため殺しきれなかつた残りの三割。

異形へと変じた英雄派構成員を見てアルケイデス……ヘラクレスは目を細める。

「人の身でどこまでいけるか、やってみたくなつたのではなかつたのか？人を捨てて……その夢すら叶えられんぞ」

『それがどうした！クソみたいな人生を変えてくれた、俺達の力が役に立つと言つてくれた！そいつのために死ねるなら本望だ！』

と、影の獣が吠える。鬼灯が金棒を振るうとすり抜ける。

『はっ！無駄だ、今の俺に——』

「透過……いや、通過か。なら、入りきらない威力をくれてやる」

そう言つて再び金棒を叩きつける鬼灯。金棒の棘が僅かにめり込んだ瞬間影の獣は大爆発した。

「少し強すぎましたか」

パンパンと埃を払う鬼灯。そこにドラゴン系神器と融合しドラゴンのような姿になつた英雄派が迫る。

「ふん！」

と、ヘラクレスが電柱を引っこ抜き振り下ろす。空気摩擦で表面が赤く溶け、ドラゴンを地面に押し潰した瞬間砕け散る。

『ゴアアアアア！』

『くたばれえええ！』

「野蛮ねえ」

獣と怪人へと変じた英雄派の攻撃を何処からか取り出した扇子で受け流し、その扇子で首を切る。女性の構成員の生首を掴むとその血をペロリと舐める。

「酷い味。蛇と混じってたから美味しいと思ったのに」

ペツと赤く染まった唾を吐き出す姐己。その影から現れた蜥蜴のような怪人も尾に頭を吹き飛ばされた。

「……………妙だな」

柳はタコ怪人になった英雄派の首を締め付け足を千切りながら首を傾げる。

「むぐむぐ……………何が？」

「ペツしなさいそんなもん。何って……………気配だよ。ゲゲゲの何とかを探してんのに見

つからねー。この世界を作ってるのは彼奴だし、気配を消しきれるとは思えねーんだが」

「サマエル使うならアレ借りたのかも、ハーデスの………：鍬形虫」

「は？ハーデスの鍬形虫？何、ハーデス様虫好きなの？今度鬼灯様に、訪問する時ムシ王者のゲーム台持つてくと良いって教えるか……」

と、裏拳で甲冑と融合した英雄派の頭を吹き飛ばす。カランと音を立て落ちる兜を見て、柳は目を見開く。

「カプトかよー！」

「？我黄金虫が好き——っ!？」

柳が周囲を睨みだした瞬間三子はチリリと肌に痛みを感じる。次の瞬間、視界が大きく移り変わる。投げられた。誰に？もちろん柳だ。

三子が柳の居た場所を見るとそこには影も形もなかった。

「偽物か………」

グシヤリと頭を踏みつぶされ命を絶たれ男は全く別の服装と体つきに変わる。変身系の神器。それも、自分達の前に平然と立つという命を捨てる覚悟のある構成員。

『その通り。いやいや備えあれば憂いなしだね』

反響するように様々な方向から聞こえてくる声。それは曹操の声だった。気配は、追えない。

「……………ハーデスの隠れ兜ですか」

『その通り。冥府のオリジナルと、レプリカを幾つか。幹部に持たせていたけど二つほど破壊されてしまったよ』

そう言つて笑う曹操。この声だつて下手したら遠くから魔法で話している可能性も、それどころか偽京都の外から話している可能性すらある。

「しかし、どちらにしろ戦力を失つただけだな」

鬼灯と同じ判断をしたのかヘラクレスは虚空を睨みつける。これだけ兵を失つておきながら、大将は高みの見物と来た。これでこちらに被害があるならまだ解る。作戦として割り切ろう。が、無駄死にさせることを作戦とは呼ばない。

『まあ今回の目的はとあるドラゴンだからね。でも、本当は実験。最終的な目標が向こうから来てくれた。今、ゲオルクが発動したようだ』

「……………三子さんか……………」

鬼灯はその言葉で全てを察しビルの上に向かって飛ぶ。高いところから探す気なのだろう。残されたヘラクレスの鼓膜を曹操の馬鹿にしたような声が震わせる。

『無駄なことを。オリジナルの隠れ兜はサマエルに使つた。サマエルが何をしようと君

達は気付くことも……ん？何だゲオルク、え？失敗？サマエルの頭がはじけたあ！？
だ、誰に！？は、オーフィス！？捕まえたんじや——』

「……………」

ヘラクレスが頭を押さえていると、慌てた様子の三子が子供を抱えて走ってきた。慌てた様子と言つても無表情だが。

「柳、様が……サマエルの毒食らつて、消えちやつて……柳様センサーで探したら柳様の中の蛇の力食べたサマエルで、殴り殺したけど柳様弱つて……小さくなった」

「『何がどうしてそうなった！？』」

曹操とヘラクレスの言葉が重なる。仕方ないだろう。何せサマエルの毒を食らつた半人半龍が小さくなったなど訳が解らない。

『え？ていうか、サマエル殺した？オーフィスが？』

「我三子。サマエルの竜殺し、我より格下の奴の呪い。直接食らつて力を不安定にさせられなければ指一本で勝てる。ちよつと火傷した……………」

よく見ると三子の手は皮膚が無くなり肉がむき出しになっていた。シユウシユウと黒い煙を上げている。本来なら一瞬で治る筈の傷がまだあるのは龍殺しの呪いの影響なのだろう。

「……………見つけたぞ」

『——ッ！』

と、不意に鬼灯がビルの一つに向かって鉄骨をぶん投げた。

「鬼灯殿、見えるのか!？」

「見えませんよ。が、感じます。日本の崇り神をなめるなよ大陸の人間。呪いたい対象はたとえ地の果てに逃げようと見つけてみせる。ましてやたかだかレプリカなど」

「——ッ！どうする曹操!」

「引くぞ、撤退だ!」

「逃がさん」

と、鬼灯は金棒を投げつける。完全に転移しきる前に人間二人など破壊する一撃が、突如発生した濃密な霧が速度を削ぐ。

「……………一人逃がしたか。しかし今の霧……………先程までは加減していたのか?」

「いや、よく見る鬼灯殿。肉体が霧に溶けて消滅していつている。おそらくあの薬を使ったのだろう」

しかも手元に注射器がないということは恐らく曹操に打たれたのだろう。そして、神器と違い神滅具のドーピングには身体が耐えられなかったのか、既に息絶えている。

「絶霧は日本神話が回収してくれてかまわない」

「助かります……………」

ハーデス

《と、止まれ！ここが何処だか解っているのか！》

「うん解ってるよ。だからどけ……………」

そう言つて女は剣を水平に構える。禍々しい魔力が女の持つ凍える魔力と混じり合
い、増幅し周囲の、冥府の気温が下がっていく。

「私はねえ、怒ってるんだよ。あんなもの使わせてまで私達に嫌がらせしてくるし、冥界
を見直す機会を与えてくれた恩人にあんな事するから……………」

カチカチと死神たちの歯が鳴る。それは決して寒さからではない。ただ純粋な恐怖
だ。

《あまり配下をいじめんな、小娘…………》

「……………」

その言葉に女、セラフォルは逆る魔力を収め魔剣を異空間にしまう。

現れたのは骸骨。冥府の王、ギリシヤの死後の世界を司る神ハーデスだ。

《して、何用かな？アポも無しに無粋な輩め》

「現場処理を行っている日本神話の鬼灯殿に代わり、その場に居合わせた私が禍カオス・ブリゲードの団

によるサマエル使用の件について詰問しに來ました」

《え、なにそれ聞いてない》

最初は、二天龍に使うのかと思っていた。英雄派の連中が名譽欲に酔っただけの集まりであることには気付いていた。近いうちに破局することも想像できた。

とはいえ、三大勢力への嫌がらせにはなった。そこに加えギリシヤに小うるさい雑兵を送るのをやめるからサマエルを貸してくれと言ってきた。

イヤだつてさあ、人間の限界に挑戦するとか言つてたけど、仮にも英雄名乗つてんじゃん？まさか人に何の迷惑もかけてない日本神話に喧嘩売るとか思わなかつたんだつて。

《つまりワシもまた被害者》

「言いたいことはそれだけかホラーマン」

《ホラーマン？》

ハーデスはあれ、こいつこんなキャラだつて？と首を傾げる。集めた情報ではキャピキャピした格好でおちやらけていると聞いていたのだが……とんでもない殺気放つてマフィアの女ボスみたいなんだが。と言うかホラーマンつてなんだ？

《貴様！ハーデス様をよりによつて赤い小悪魔キャラ取りにベタぼれの骸骨扱いだと

「確かに映画なんかじゃたまに格好良くなるけど、許せん！せめてブルツクにしろ！」
 「はあああ!?一番ねーよ！何？この人バイオリンが趣味なの？それともギター？あの世に住んでるソウルキングってか!？」

《ハーデス様を馬鹿にするか！この人は、無理矢理さらってきたペルセポネー様との距離感が掴めず楽器に手を出し全て失敗したという過去も持つが、それでも何度も挑もうとしたお方だ！ギターもバイオリンも聴いてると吐き気がこみ上げてくるが音は出る！》

《おいプルート黙れ》

こいつはいきなり何ぶつちやけてくれるのだろうか？腹心だと思っていたが実は嫌われてるのだろうか？

「まあ大方二天龍のエロガキの方にも使おうと思ってたんでしょね。彼奴なら寧ろ死んでよし！というか死ぬ、何だよ人を痴漢に変える可能性の固まりって………馬鹿なの？死ぬの？殺されたいの？殺して良いの？」

《……………》

何だろう。基本的に悪魔と天使と墮天使が嫌いなハーデスも思わず同情してしまい
 そうな哀愁がセラフオルから漂った。

「まあサマエルも死んじゃったらしいし、もう借りられないか」

《……何?》

「ん?」

サマエルが帰還していなかった。恐らく使用後の転移中に盗まれたのだろう。

「これ、大失態じゃないのハーデス殿」

《あつるえー?》

空っぽの氷の固まりを見て顎に手をやるハーデス。

本来なら居るはずのサマエルは影も形もない。

《く、こうなったら盗まれたことにして……》

「ちなみに発言は録音済み」

《ならば奪うまでよ!》

と、プルートの駆ける。が、気がつくやうにプルートが倒れていた。

《がは——ツ!な、何が……》

「時間を凍結させた」

《……》

ハーデスにも何が起きたか見えなかった。つまりハーデスの時も凍り付いていたの

だろう。何こいつ。何で魔王最強はサーゼクスかアジュカって噂が流れてたの？

「それじゃあ私はこれで……被害を受けたのは日本神話。私はその事に関して報告しに来ただけですので」

《あ、うむ……》

「後でくる鬼灯殿、そして今回の件に関する各勢力からの抗議、対応頑張ってください。外交って本当大変なんですから」

《………》

「あ、鬼灯様お帰りなさい。冥府はどうでした？」

「行つて早々土下座されたので、取り敢えず賠償金と城の半壊と全治5ヶ月で勘弁しました」

「………勘弁したんですか……それで……」

鬼灯のやらかした事に、頬に手を当てあらあらとため息を吐くお香。まあ日本国内でサマエルが使用されるなんて暴挙が行われれば仕方ないことだろう。

「それで、柳さんは？」

「呼吸は安定してますけど……意識は、まだ」

「……そうですか」

サマエルの攻撃を受けた柳は何故か縮んでおり、未だ目を覚まさない。最強の龍殺しの呪いを半龍の身でくらったのだ。生きていられるだけでも喜ぶべきなのかもしれない。

「少し、見てきます」

「ご一緒します」

病室の扉を開ける鬼灯。目があった。

「あ、柳ちゃん起きたの?」

と、お香が安心したように言うが、柳は反応せずジツと此方を見ている。いや、睨んでいるのだろうか?

「柳さん、意識ははっきりしてます——」

ガブリと柳に伸ばされた手が咬まれる。しかも鬼にとってはどうってことないが、柳の表情からして本気で。

「……………」

「ぎゃん!」

鬼灯は迷わず柳の頭を叩いた。

「ええ!? コレは普通『怖くない、怖くない』をする場面では!?」

「ナウシカは好きですよ。ただ私はきちんと罰を与えます。それで、いきなりどういうつもりですか柳さん」

「や、なぎ………」

名を呼ばれ不思議そうに首を傾げる柳。鬼灯はふむ、と顎に手を当てる。

「貴方の名前は？」

「人十。ジントクソ親父の知る限り十人目の子供」

その名を、鬼灯は出会った当初にも聞いた。名の由来も。兄弟八人はおろされたか、孕んだ女から父が逃げたので顔も知らないらしい。

人十

その女は言う事をよく聞いたし金も持っていた。

他の女に手を出しても文句を言わず、ただ戻ってきてくれればそれで良いと言う。都合が良かった。だから同棲してやった。食い物も、温かい風呂もある。

娘が生まれたが世話も一人でやっていた。偶に夜泣き出して五月蠅い時は黙らせるのを手伝ってやった。

名前は美九。確か以前子を孕んだとか言ってきた女が8人ほど居たからだ。金も持つてなくせに偉そうに責任云々言ってきたので無理矢理墮ろさせるか、無理なら逃げてた。

二人目の子が産まれた。十人目なので人十ジントと名付けた。

此奴は駄目だ。そう思ったのは五歳の時。此奴は何時か自分に反抗する。そう思った男は押入や浴槽に閉じこめるのをやめ徹底的に痛めつけた。恐怖を与え、逆らう気を無くさせるために。

が、その努力は徒労に終わった。

「柳様の昔の名前って人十だったんだ」

「ええ。流石にそれではと思い、私が名付けました。人と十を重ねて木、そして最初に彼と地獄で出会った芥子さんの卵。これをあわせて柳」

因みにその時柳が言った言葉は『採用』だった。

「因みに今の柳様は？」

「未だ幼くなつたままです。原因は、癩ですが神獣に血と髪を渡して調べてもらつてます」

「直接診せなかつたんですか？」

『酒と女の匂いがする、あの親父と同じだ！』と嘯みつきました」

警戒心が相当強いようだ。特に大人、それも頭にダメながつくタイプが。

唐瓜は哀れな神獣の普段を思い返し納得してしまった。

「今はお香さんに診せてますが……」

と、病室の扉を開けるとお香の腕に嘯みつく人十の姿が。

「うおおお！お香姐さん！」

と、人十を引きはがそうとする唐瓜。が、お香が止める。

「大丈夫よ唐瓜ちゃん。ねえ柳ちゃん……じゃなかつたわね。人十ちゃん、何もしないから離して」

「うるせい！大人なんか大っ嫌いだ」

「あら、私何か嫌われるようなことしちやったかしら？それなら謝るけど……」
「え、う……」

お香の言葉に戸惑うように狼狽え後ずさる人十。その人十に視線を合わせるように屈み顔を近づけるお香。

「してた？」

「……………してない」

「あら、じゃあ悪いのは人十ちゃんね。この前も鬼灯様に噛みついてたし……悪い子」

「——ッ！」

ビクリと人十の肩が震える。その人十の額をペシリと叩く。

「悪いことしたら言うことがあるわよね？」

「……………ごめん、なさい……」

「はい。良くなりました。さ、次は鬼灯様に……」

と、幼い人十の身体を抱えるお香。漸く鬼灯達の存在に気付いたようだ。

「あら鬼灯様。ちようど良かったです……ほら、人十ちゃん」

「……………昨日は、噛みついてごめん」

「いえ……しかしお香さん、手慣れてますね」

「あら、手慣れるも何もキチンと向き合つて接して上げればいいだけです。亡者じゃないんだから、直ぐに手を上げるのは駄目です」

お香はそう言うのと抱えた人十を近付ける。

「ほら、子供はこんな可愛いんですから」

「……………」

にこりと笑うお香に人十を見つめる鬼灯。その姿はまるで……………そこまで考え唐瓜は吐血した。シヨックがデカすぎたようだ。

『結論から言うとな、柳君は若返つた訳じゃない』

と、白澤は言う。

小さくなつた柳は幼くなつたのではなく、龍の力が、龍の細胞が無くなり、本来なら体の殆どを失い死ぬか死にかけになるはずだつたのだとか。

しかしそこは縁によつて形作られる人間。しかも強い縁があるのが筆頭は無限の龍神、それに加え地獄の主神やその補佐官の鬼神。初代九尾に八岐大蛇と言つた規格外の面々だ。そこに柳の龍になりかけという曖昧な状態だつたのが幸いし、残つた龍の力を以て身体を柳として再構築した。

縮んだのは残された細胞で再現できる年齢がそれだったからだ。

『記憶の方は過去が原因だろうね。弱くて、まだ父に逆らえなかった時の体型。そのトラウマで記憶を本格的な虐待が行われる前に戻して、周囲に対する嫌悪感だけが残ったんじゃないかな?』

「……………成る程。で、治す方法は?」

『取り敢えず失った分だけの龍の力の龍の細胞を与えることだね』

「それだけで?」

『後は本人の意思次第だよ。何せ、少なくとも今は本来その見た目だった頃より幸せだろうからね。そのまま新しい人生進むって可能性もある』

そうならないようにするには、記憶でも刺激してみるんだね、と笑う白澤。記憶を刺激するとは、つまりそういうことだ。出来ないと解つていての言葉だろう。

『僕はこのままで良いと思うけどなく。忘れない記憶は忘れたままで…………』

「……………柳さんは、そこまで弱くありませんよ」

と、鬼灯が通話を切るとほぼ同時に扉が開け放たれる。

「ほ、鬼灯様大変です!や、人十さんが、亡者に…………!」

人十はここが地獄だと知り驚いた。死んだのかと思えばそうではないらしく、自分はここで働いているのだとか。

「ここが、俺の造った地獄？」

「はい。人が人を傷つけても若気の至りですませちやう者達が落ちる地獄で、すよ」

未来の自分は何を思つてこんな地獄を造ったのだろうか？と、そこまで考え頭痛がする。吐き気もする。と、芥子が心配そうにのぞき込んだ瞬間亡者の一人が人十を捕らえる。

「あ、貴様！」

「ああ！人十君を離すで、すよ！」

「う、うるせえ！近づくな！」

鋭い石の先端を人十の目に突きつけ叫ぶ亡者。年は30代ほど、病気が事故で亡くなったのだろう。

「何で俺が地獄に落ちなきやなんねーんだ！何で、俺だけ！むしろ殺された俺は被害者だろうがよお！」

「殺された？」

「そうだよ、あの女……許さねえ、その他大勢のくせしやがつて、何が子供の責任をとれだ、さっさと墮ろせば良いのに墮ろせなくなつただとか……」

その男は生前多くの女と関係を持っていた。妻が居る身でありながら、だ。そして浮気相手が身ごもり、墮ろせなくなるまで腹の子が育ち、関係を切ろうとして刺された。「浮気なんて誰でもしてるだろうが！まだ結婚したばかりで、こんなやつて当然なんだよ！」

「……………当然？」

ミシリ、と男の骨が軋む。見れば人十が男の腕を掴んでおり、男の腕が消えた。人十が触れていた場所が、抉れるように無くなった。

「が、あああ!？」

「お前は、人の命を、産まれてくる者を何だと思ってるんだ？誰でもしている？なら、そいつ等全員地獄に落とせば満足か？」

「ひぎ、ひあああ!？」

黒いオーラを纏い自分を放り投げた男に近づくと人十。魂すら犯しそうなどす黒いオーラは男に恐怖を与えるには十分すぎた。

「人十さん！」

「……………鬼灯？」

と、その声に振り返り、人十は倒れた。

「……………呪いだね。それも強力な……………これ、サマエルの呪いだよ」

「何故それが柳さんに？」

診断した白澤の言葉に鬼灯が首を傾げる。サマエルの呪いと言えば神の呪いだけあり最高クラスの呪いだ。何故それを人十は操っていたのだろうか？

「呪術つてのは呪いに形を与える術だけど、呪いつてのは元来恨み辛みから生まれるものだ。残っていた呪いの残滓を取り込んだらうね……………」

故にあれは龍殺しの呪いではない。恨みの対象を消し去る純粹な呪い。呪術でないので返しも出来なければ防ぐには純粹な力押しでなければならぬ。並みの結界など浸食して破壊する。

「なかなか戻らなかつたのはこれも原因の一つだろうね。三子ちゃんの力を殺してたんだ。でも、これで戻る可能性はぐっと増えたと思うよ」

後はきつかけだね、と白澤は笑った。

「……………これはこれで食べ応えはありそうねえ」

見舞いに来た姐己は眠っている人十を見て笑う。

幼い子供というのはそれだけで妖怪にとってはごちそうだ。白魚のような手が伸び、その頬にそっと触れる。

「でも、普段の貴方程じゃない。早く起きなさいよお、柳……？」

「……………つ、頭いつてえ」

ムクリと起き上がり頭をガシガシ搔く。時間と日にちを確認をする。

「……………マジか、結構寝てたな」

そう呟くと起き上がる。

そして、不意に頬に触れる。

「……………何か、忘れたくないことを忘れたような」

柳はそう呟くと、寝ている間にたまったであろう仕事をするために鬼灯の元に向かった。

日本の呪いの執念深さ

英雄派の拠点の一つ、曹操は残った構成員達に待機を命じて今後の作戦を練る。幹部連中は軒並み全滅。いや、ジャンヌとレオナルドは単なる行方不明だが。

取り敢えず、使えそうな奴等を幹部に引き上げてやるか、と書類を見つめる曹操。と、その時――

――見いつけたあ

「!?!」

不意に悪寒が走る。とつさに槍を顕現させ振り返りながら構える。壁を突き破り現れた漆黒の黒龍が槍と当たり神々しいオーラと禍々しいオーラが空間を走り拠点を吹き飛ばす。

「シャアアアアッ!!」

「!!」

黒い炎にも見える黒龍の力が増す。地面に激突し、地面を何度も転がる曹操。フェニックスの涙を使い傷を癒すと黒龍のやってきた方向を睨みつける。

「鏡面世界……顕現」

そこにいたのは見覚えのある男。常闇の鬼神と共にいた、オーフィスの肉を喰らった地獄所属の男だ。名は確か、鬼火柳……………しかし、あの黒い龍は何だ？

混乱する曹操の前で指を鳴らす柳。空間が歪む。この感覚、知っている。ゲオルクの絶霧で創った世界に入る感覚によく似ている。

「空間魔法か？」

「悪魔のレーティングゲームステージの技術をな……………ここなら存分に暴れられる」

「……………どうしてここが解った」

結界を張っていた筈だ。事実これまで襲撃はなかった。なのに、何故……………

「俺はお前を殺したくて仕方ない。だから、日本でも有名なストーカーの清姫さんに呪いたい相手の居場所を探す方法を学んで、後はこの呪いを利用した」

そう言つて黒龍の頬を撫でる柳。あれが件の呪いなのだろう。少なくとも神滅具と打ち合えるレベルにはヤバイようだ。

「此奴は俺に残つたサマエルの呪いの残滓に俺の持つ無限の龍神のオーラを混ぜ、俺自身の敵意を加えた呪い。対象を何処までも追う……………日本神話らしいだろ？」

「サマエルの、呪いを……………成る程、どうりでこの槍と打ち合えるわけだ」

「打ち合える？お前まさか、今のが本気だとも？」

ズルリと呪いで形成された龍の大きさが増す。感じる力の量も明らかに増えた。槍

が怯えるように震える。と、その時――

「曹操様はやらせはせん！」

「人類の未来のために、ここで散れ！」

英雄派生き残りたちが柳に向かって己の神器を振るう。全方位からの攻撃。これなら多少時間を稼げるはず。今は撤退し、再び戦力を、と曹操が転移魔法を使おうとした瞬間、魔法陣に光り輝く聖剣が突き刺さり魔法陣が碎ける。

「――な!？」

「指揮官が部下おいて逃げるなんてあんまりじゃない？」

見覚えのある短剣。そして聞き覚えのある声。顔を上げると呆れた様子のジャンヌが立っていた。その手には聖剣。片手で投げてはキャッチするという芸当をやっている。

「ジャンヌ、何のつもりだい？」

「――辞める」

『辞表』と書かれた封筒を取り出し曹操に向かって飛ばすジャンヌ。反射的に受け取ろうとした瞬間封筒を突き破り刃が姿を現す。

「くっ!？」

慌てて槍で弾く。ジャンヌの姿は既がない。が、後ろから感じた殺気に振り向き槍か

ら極大の光線を放つ。

「いてえな、火傷するだろうが」

と、その光を突き破り腕が伸びてくる。槍を掴んだ腕から黒い小さな蛇を放ち絡みついてくる。咄嗟に腕を放し、距離を取る。直ぐに槍の実体化を解きもう一度召喚する。

「ふっ、成る程。出し惜しみする余裕はないようだな………禁手化！パランス・ブレイク『極夜なる天輪』ポーターナイトロンギ

——

「隙だらけだ」

何やら長い名を教えようとしてきた曹操を思い切り蹴り飛ばす柳。当然だ。待つてやる道理など無いのだから。

「必殺技を名乗りたいならな、名乗れるだけの強さを持つとか、名乗ってる途中に近づけなくなるだけのエネルギーを周囲に放つとかやれよ。こんな風に——」

ゴウー！と大気が柳を中心にうねる。禍々しい呪いのオーラと荒々しいドラゴンのオーラが顕れ、どちらも黒い龍の姿を取る。

「これは俺の師匠の一人からの伝言だ。『英雄になると言ってるくせに洗脳とか駄目ですよね。それはもう英雄になる気は絶対にはありません。つまり嘘吐きです。塵一つ残さず消えなさい』だとは——ぞうとつくりゆ葬討黒龍」

「ぐ、や、槍よ、神を射抜く真な——うわ！」

宣言通り塵一つ残らず消え去った曹操。最期の言葉は「うわ!」だった。

カラン、と地面に槍が落ちる。新たな持ち主を求めて転移しそうになった槍を、柳が掴み取った。ついでに曹操の魂をお迎え課に引き渡しておく。

「あー、中に何かあるな。ほい消去つと——」

呪いを流し込み中に残った意識を消し去る柳はそのまま槍を、聖槍をジツと眺める。

「というわけで、新たな術式を組んでみました」

と、鬼灯に聖槍を見せる柳。柳曰わく神の子の心臓を突き刺しその死を確認した槍。

元々カインの血をひく鍛冶トバル・カインが天から落ちてきた金属により作ったとされる槍であり、ただの槍ではないのだが、神を殺すような槍ではない。だって実際は殺してないんだから。

「だけど神の子の死を確認したという逸話を下に、例え神であろうと死を決定づける槍に改造してみました」

「そうですか。破棄してください」

「了解………つて、天界と一悶着ありません?」

「元々神仏に傷を与えられる、下級神なら殺せるなんて道具を造った向こうが悪いんで

すよ。管理も杜撰ですし……それに此方の神剣を勝手に盗み神滅具に組み込んだり折ったりしたのは向こうが先ですから」

「成る程」

と、腕と膝を使い槍をへし折る柳。後で夜叉一の子供たちの遊び道具にでもするかと更に細かくへし折る。

「そう言えば柳さん、明日から現世に復帰でしたね」

「まあ、また彼奴等の面倒を見ると思うと気が滅入りそうですよ」

「そうですか……明日に響かない程度に、飲みに行きませんか？奢りますよ。もう少しで仕事も終わりますし」

「そうですか？じゃあ、外で待っています」

翌日。

「戻った。一人に押しつけて悪いなロスヴァイセ」

「いえ、お元氣そうで何よりです」

「何か変わったことは？」

「はい。報告書に纏めてあります」

と、ロスヴァイセから受け取った報告書に目を通す柳。どうもルキフグス家の生き残りや魔法使いが侵入しかけたりと色々あったらしい。魔法使い達は雑魚だがルキフグス家は仮にも上級悪魔。失礼だが、報告の強さをみる限りロスヴァイセでは勝てると思えないのだが……

「妙なことを言つて去つていきました」

「妙なこと？」

「はい、なんでも……『私の姉になつてください』と……」

「……………なんだそれ。ん？」

報告書を見ていき、最後の報告を見た柳の眉間がピクリと動く。ロスヴァイセは気まぐすそうに目を逸らした。

「……………ルーマニアに向かった？ いや、ルーマニアの貴族吸血鬼からの申し出だ。リアス・グレモリーが向かうのは良い。けど、要経過監視対象である封印候補者のギヤスパー・ヴラディイも……」

「すいません、お止めしたんですが……どうも先に向かった主人が心配だったらしく、服を無理矢理脱がされて、その際に——」

「……………」

「塔城さんと姫島さんは前回お母様方と再会させた時の礼なのか味方してくれましたけ

ど、主の意向には逆らえず……あ、ヴラディ君は普通に行きたがってました……あ、天界側は残ってます。アザゼルさんは、向かいました」

「……彼奴等、帰ってきたらマジ覚えてろよ」

流石に既にルーマニアに行った相手を追うことは日本神話にはできない。帰ってきたらぶちのめそうと決める柳。

「あの、それがですね。どうも吸血鬼のツエペシユ派に、『禍の団』カオス・ブリゲードが関わっているらしく、向かう理由は十分かと」

「つつても俺吸血鬼共に恨まれてるからなあ……エルメンヒルデにお願いしてみるか」

「吸血鬼に知り合いが？」

「と、出るかな……向こう何時だ？お、出た」

『やや、やややや柳様あ!?ほ、本日はお日柄も良く——ど、どうしたのでしょうか？な、何か気に入らないことが？大丈夫です！吸血鬼共を潰すというならこのエルメンヒルデ、誠心誠意を以てお手伝いいたします！いたしますから、どうかお慈悲を——!』

「何かそつちで『禍の団』カオス・ブリゲードが干渉してるらしいから、潰すの手伝わせろ」

手伝ってあげるでも、手伝おうか？でもなく、手伝わせる……命令形だった。

『は、はひーお待ちしておりますー!』

「……………何したんですか？」

「他の吸血鬼にしたのと同じく、調子に乗って襲ってきたからぶちのめした」

イツセーは困惑していた。マリウスとかいういいけ好かない、ギヤスパアの親友であるヴァレリーを利用する屑野郎が紹介した護衛。途轍もない悪寒を感じる。絶対に勝てないとすら思えてくる。だが、その姿は……………黒い左目と金の右目というオツドアイの……………黒兎だった。

ヒクヒク鼻を動かしバナナをモグモグ食べている。

吸血鬼の国

ルーマニアに向かうために飛行機のチケットを大人用2つと子供用1つを買う柳。

ルーマニアにつくと吸血鬼たちに出迎えられた。とはいえ、わざわざ人間ごときを迎えるのは癪なのか明らかに不機嫌そうな連中が混じっていたが。

そのまま彼等に案内され、吸血鬼の隠れ里ならぬ隠れ国にやってくる。

「百均はあるんでしようか？」

「知らん。と、見えてきたぞ。エルメンヒルデの屋敷だ」

「お、お久しぶりです柳様……………」

カタカタと青白い顔で出迎えた吸血鬼の美少女。ただでさえ白い吸血鬼の肌から血の気が引いて、もう本当に死体にしか見えない。

「成る程、聖杯ね……………それでツエペシユ派でクーデターが起きたわけか」

「はぐはぐうまうま」

「は、はい……どうもヴァレリー・ツエペシユに宿つたらしく、それを使い弱点を克服し………そ、その………柳様に、復讐、すると………」

まあた神器だ。しかも聖遺物の神滅具。三大勢力は本当にいい加減にしてほしい。膝の上に座り茶菓子を食う三子の頭を撫で落ち着くと、取り敢えず話を変えることにする。

「取り敢えず停止能力持ちのハーフ吸血鬼は現在俺の管轄だ。返してもらおう」

「し、しかし！その………来るべき戦いに」

「別にいらんだろう？散々使えない、無能、なり損ないと見下していた相手を使うほど落ちぶれたかと言えば上はあっさり返してくれると思うがな」

「ま、まあ確かに返しそうです………その、ギヤスパー・ヴラディ自身も残りたがって。何でもヴァレリー・ツエペシユとは親友だったらしく………」

だからこそ本人も残りたがっているらしい。

「初代カーミラとツエペシユは別段敵対して居なかつたはずだが、今から交友を結ぶとかしねーの？」

「今更出来ませんわ………それに、向こうの目的は吸血鬼が人間を家畜化することです」

「吸血鬼って、実際は死者なんだよなあ。それが、人間を支配？仕方ない、潰すか」

「もー!？」

よっこいしょ、と立ち上がる柳。柳の隣で滅多に食べられない高級品を味わっていたロスヴァイセが慌てて後を追おうとする。

「まあ、まずは交渉が先だな。後生徒たちにも会わねーと」

「生徒？」

「リアス・グレモリーとその眷属達は俺の学校の生徒なんだよ」

「……………へ？」

結構失礼な態度をとったのを思い出しさあ、と顔を青くする。何せ自分は和平に応じてやるから力を貸せと——いや、寄越せと言ったのだ。

「しかし何故今更ギヤスパー・ヴラデイを？ 所詮時間を止めるだけだろ」

「……………ギヤスパー・ヴラデイは、特別なのです。彼の出生をご存知ですか？」

「いや」

エルメンヒルデの話によれば、ギヤスパーは生まれた時、人の形をしていなかったらしい。黒く蠢く不気味な物体で、産婆を含めた出産の際に近くにいた者達を呪い殺したとか……………ようするにそちらの力を期待しているのだろう。

「呪い、ねえ…………」

柳はつい最近手にした新たな力を僅かに身体から滲み出させる。怨霊大国日本の大怨霊や怨みから妖怪となった清姫、怨みから地獄最強の鬼神を召喚することだけなら出

来る巻物を神より授かった滝夜叉姫などから呪いの使い方は学んだが、西洋の呪いとどちらが強いのだろうか。

「まあ良いか。取り敢えず俺は勝手に無断欠席して旅行したバカ共を持って帰りに行くか。彼奴等今何処に行んの？」

「ツエペシユ領に……………」

「また面倒なところに……………」

ツエペシユ領と言えば、その昔殆どを血の池漬けにした連中の住処だ。素直に入れるとは思えない。復讐の機会をうかがってるらしい……………。

「し、侵入ルートならあります。一緒にしましょう」

「現カーミラの許可はいいのか？」

「カーミラ派上層部で貴方に逆らうものなど居ませんよ」

この人吸血鬼に何したんだろう、という目で柳をみるロスヴァイセ。取り敢えずツエペシユ領に移動することにする一同。

ツエペシユ領の城下町、クーデターがあったというのに静かなものだ。静かに現政権を追い出したのだろう。

街並みはカーミラ領とさして変わらない。街づくりを下つ端、吸血鬼にした元人間にやらせているのだから当たり前だが。

「さて、バカ共を探すか」

「おー」

柳の言葉に肩に乗った三子が両手をあげる。ロスヴァイセは安いお土産をジツと見ている。エルメンヒルデはカタカタ涙目になりながらも、客人のため目を離すわけにも行かず付いてくる。

「ん？」

「む？」

と、その時。不意に柳と三子が同じ方向に、何かに気づいたように振り返る。そこには一人の少女がいた。オーフィスに良く似た少女。その頬には鱗、頭には角。手も鋭い爪が生えており、服は背中が大きく開いて一対の翼が生えていた。

尻尾がゆらゆら揺れていた。

「……………」

ジーツと柳を見つめていた少女はテトテト駆け寄ってくる。

「パ。パ」

「……………ふあ？」

ぎゅつと腰に抱きついてきた少女は柳を父と呼ぶ。ロスヴァイセが目を見開きエルメンヒルデも口を大きくあげる。

「えつと……俺がパパ？」

「ん。パパ……上のはおばあちゃん」

「我おばあちゃん？」

「や、柳さんお子さんがいたんですか!?し、しかも三子ちゃんが柳さんのお母さんだったなんて——！」

「やー、まてまてロスヴァイセ。俺に子なんて居るはずねえだろ。それにこの子、かなり大量の龍の気があるな。これ、邪龍か？」

「パパー」

「パパじゃないパパじゃない、離れろ」

腰に抱きついた少女はぎゅーつと抱きついたまま離れようとしない。三子の蛇を食って力を取り戻しつつあるとは言え全盛期には程遠い柳より少女の力の方が強いようだ。

「む……」

と、三子が肩から飛び降りると少女を引き剥がそうとする。

「柳様から離れて」

「やだ」

その光景は父を取り合う姉妹喧嘩。しかし柳の腰からメキメキ音が鳴る。と、その時だった――

城を覆うように光の壁が浮かび上がる。

「……何だ？」

「ん。ラゼヴァンが動いた」

「ラゼヴァン？」

「どうやらマリウス・ツエペシユ一派が聖杯を用いた一連の行動の、最終段階に移行するようですわね。ヴァレリー・ツエペシユから聖杯を抜き出しこの城下町の住民全てを作り替える気でしよう」

と、エルメンヒルデがキリツとした表情で説明し、柳の視線が向くとひう、と涙目になりロスヴァイセの後ろに隠れる。

「さ、さあ行きましょう！案内します！」

「そうだな。取り敢えずぶち殺しに行くか」

「私も頑張る」

「リリースもパパと戦う」

「え、お前も？」

闇の獣

俺達は部長と共に城の中を走る。マリウスのクソ野郎をぶっ飛ばしてヴァレリーを助けるために。

「あの、今更ですが……良いんですかね、これ」

と、不意に小猫ちゃんが何かに怯えたように顔を青くして呟く。

「小猫？それに朱乃まで、どうしたのよ？」

良く見ると朱乃さんまで青い顔をしている。良く気づいたな、さすが部長。皆を良く見てる。

「クーデターって、完全に政治的なものですよね。一介の悪魔でしかない私達が関わって良い事件なんでしょうか」

「何言ってるんだよ小猫ちゃん！このままだと、ヴァレリーが殺されちゃうんだぞ!?それに、奴らはテロリストと繋がってる。放置なんて出来ねー!」

「ですが、小猫ちゃんの言うように私達は一介の悪魔。テロリスト対策チームと言うわけでもない。これは、外交問題になるのでは？」

小猫ちゃんの言葉に俺が叫ぶ。が、朱乃さんが窘めるように言う。

? どう言うことだ、ちつとも解らん。

「別に、かまわないでしょう。誰に怒られる訳でもないのだし。むしろ、今回の功績で日本神話のせいで下がった名声を取り戻せるわ!」

と、部長。

「何より、私の可愛い眷属を悲しませるなんて真似絶対にさせないわ!」

小猫ちゃんと朱乃さんは顔を見合わせる。と、その時開けた場所に出る。そこにはずらりと並ぶ人影。鎧を着込んだ吸血鬼達だ。

「足止めのようなね。力を温存したいところだけど……」

「あ、じゃあ私はここに残ります」

「ずるいですわ小猫ちゃん。私も残りますわ」

部長が眉をしかめた時、小猫ちゃんと朱乃さんが一歩前に出る。この人数を相手にするつもりのようなのだ。

「……………幸い、それほど地位があるようには見えませんね」

「ええ、それに向こうから攻撃してきてくれそうですね……………言い訳、できるだけでしょうか?」

何やらひそひそ話し合ってるけど作戦会議だろうか? 邪魔しちや悪いよな。

「小猫ちゃん、朱乃さん、先に行く! 後で、絶対会いましょう!」

『グハハハッ！この間ぶりだなあ、ドライブグちゃんよおおおっ!!』

と、その階層で現れたのは黒い鱗を持つ巨大なドラゴングレンデルだった。ロスヴァイセ先生に姉になってほしいとか言つてたユークリッドの連れていた邪龍だ！

「グレンデル!!」

『そうだぜえ、お前等をぶっ殺したくてたまんねえグレンデルさまだぜえええっ！ちよつとだけなら遊んでいいっつーからよお!』

最悪だ！こんな時に、こんな強い敵に！前回だつて全く歯が立たず、向こうが去つてくれただけなのに。どうする？と、その時だった。

「弱点は脛」

ボキイイ！

『グギャアアアアア——!?!』

突如現れたドラゴンの特徴を持った幼女がグレンデルの脛にドロップキックを放つ。鱗があつさり砕け中の骨が折れる。

「そして爪と指の隙間」

『ガアアアアア!?! イツデエエツ!!』

そして足の小指の爪の隙間に鋭い尻尾の先端を突き刺す。ウワ、痛そう！ん？ていう

かあの子、ヴァーリの親父のラゼヴァンのボディガードのリリスじゃね？

『リ、リリスうう!?! てめえ、何しやがんだああ!!』

「五月蠅い」

『げぶう!?!』

ペチンと頭をたたけばドゴオ!とグレンデルの頭が床にめり込む。

「お、お前……………こんな所で、何して」

「それはこつちの台詞だ」

と、その声に振り返ると此方をにらみつけてくる柳とその後ろで気まずそうな顔をした小猫ちゃんと朱乃さんがいた。二人とも、無事だったのか!ん?てか何でここに柳が?

「てめえ等なに無断で学校休んでやがる。しかもクーデターの起きた直後の国の城に乗り込むとか、立場つてもん弁えろよ」

「何言ってるのよ!これは『禍の団』カオス・ブリゲードが関わっているのよ!?!なら、放置できる問題じゃない…………後から出てきて何も知らないくせに命令しないでくれないかしら?」

おお、さすが部長!物怖じしないぜ!と、今気づいたが柳の後ろにロスヴァイセさんとエルメンヒルデもいた。エルメンヒルデがなんか此奴マジかつて顔で部長を見ている。

「アホかてめえら。一介の悪魔如きがテロリスト刺激すんな。聞けば吸血鬼側からの救援要請があつたそうだな……………日本神話に何の連絡もなしとか、吸血鬼側も悪魔側も何考えてんだといたいだがそこは我慢してやる……………が、封印候補の要注意対象の吸血鬼を三大勢力および三大勢力監視勢力の領域外に持つてくのは許さん。今すぐ日本に戻れ」

封印候補？ 要注意対象？ ギヤスパの事か？ 持つてくとか、戻せとか、まるで物みたいに！ ふざけやがって！

「まあ落ち着けよ。今はそれ所じや——」

「アザゼル、墮天使にもキチンと抗議するからな。それ所？ 知るか。神器が抜かれて吸血鬼が死のうが俺達の気にする事じやねえ。攻めてきたら潰すだけだ」

「死のうが、つて……………ヴァレリーを、そんな風に言うな！」

「知るかボケ。実際あつたこともない奴のために怒れるほど俺は優しくないんだよ。まあ、テロリスト共が関わってんなら俺ら大人の仕事だ。ガキは帰れ」

「絶対イヤだ！ ヴアレリーを助けるまで、帰らない！」

「……………男になつたじやねえかギヤスパ。ここは俺にまかせええええ!!」

「イツセーさああん?!」

頬に激痛が走った瞬間、ものすごい浮遊感に襲われ、アーシアの絶叫を聞きながら意

識を失った。

「……………はあ」

柳は一誠を壁まで蹴り飛ばし気絶させた後飛んできた滅びの魔力に向き直る。ためてたのか少し引つ張られる感覚あるな。まあこの程度なら——と、滅びの魔力を一本の剣が貫く。

「……………魔帝剣グラム？」

ストーン、と床に突き刺さった剣の柄に降り立つ人影。後頭部でひとまとめにした髪が揺らめき眼鏡の奥には隈が刻まれた目が見える。

「やっと思つたよこの問題児共」

魔王レヴィアタンはギロリとリアス達を睨みつける。

「何勝手に余所の、しかも同盟結んでない吸血鬼の領域に行つてんの？死にたいの？殺していいの？しかも日本神話の地獄のお偉いさんに攻撃とか……………リアスちゃん、サーゼクスちゃんの妹じゃなかったらその首かつきるぞ♪」

徹夜でテンションがいろいろ可笑しいセラフオール。床に降りるとグラムを抜き構える。

「さっさと自分の領に戻れ。直ぐ戻れ。これは魔王としての命令だよ……あ、領って駒王じゃないよ？ 彼処日本神話のものだから。グレモリー領に軟禁されろって言ってるからあしからず」

「ま、まっつてください魔王様！ このままじゃ、ヴァレリーが！」

と、ギヤスパーが叫ぶ。彼としてはどうしてもヴァレリーを救いたいのだ。と、その時——

「その心配はない。既に終わった」

そんな声とともに新たな吸血鬼が現れる。その手には金色に輝く杯。パチンと指を鳴らすと床に女性が現れる。

「ヴァレリー！」

ギヤスパーが駆け寄る。彼女がヴァレリーなのだろう。

「無駄だよ。聖杯は抜いた。彼女はもう、死んだ」

泣き叫んでいたギヤスパーの声が消える。次々現れる吸血鬼達が何か言っているが、彼にはもう聞こえていないだろう。彼はただ一言、命じる。

「——死ね」

瞬間、闇色の獣が吸血鬼達と柳とセラフオールに向かって飛び出した。

「断る」

そして漆黒の龍と極寒の吹雪に飲まれ消えた。目を見開くギヤスパーをセラフオルーが頭を踏みつけ気絶させる。

「これは後で再封印するとして――」

と、セラフオルーは何人か死んだ吸血鬼を見る。

「此度の件。我々の末端がそちらに迷惑をかけたことを謝罪いたします。申し訳ありません」

「いえいえかまいませんよ」

余裕ぶって答えるのはマリウスだ。マリウスの態度に他の貴族吸血鬼達も平静を取り戻す。

「ただ一つだけ。どうやらあなた方は、地上を支配するおつもりだとか……：……：……：そうなれば他の神話も、ひいては我々も動くことになります。その上でまだ行動に移されますか？」

「ふん。卑しいコウモリ風情が、貴様等や神々が何か言ってきたところで、進化した我々に何の問題もない」

「……：……：つまり敵対すると？」

「敵対ではない。一方的な虐殺になるだけだ」

「そうですか……じゃあ——」

と、グラムを水平に掲げるセラフォル。グラムを冷気と魔力が覆う。

「——殺す」

魔王の怒り

吸血鬼を超越したと自称する貴族吸血鬼達と対面するのは黒いオーラを放つ魔王の一角。元テロリストの所持していた魔剣であり、北欧から同盟の証として進呈された魔帝剣グラムを持つ魔王は吸血鬼を睨みつける。

「ふ。来るが良い、小娘」

「500も生きてないクソガキどもがナマ言うな」

一人の吸血鬼がセラフオールを挑発する。瞬間上半身が砕け散った。が、直ぐに上半身が生えてくる。

「おお、すばらしい。まるでフェニックスのようだ」

「ふふ。これぞ吸血鬼のあるべき姿よ」

「これでようやく、耐え難き家畜の時代が終わりますな」

「家畜?」

首を傾げるセラフオールに貴族吸血鬼がふふん、と誇らしげに今回の目的を語る。人間より優れたはずの吸血鬼は、しかし弱点が余りに多いため領土を広げることが出来なかった。しかしようやくその弱点も消え、今から人間達を支配しに行くらしい。

「それって、まさか日本も含んでますの?」

「カーミラ派の女か……当然であろう? 極東の島国といえど家畜が我が物顔で生存する土地。それに、聞けば地獄に身の程を弁えない家畜が居ると聞く」

「ああ………貴方達は、何も知らないのですね」

「ん? 何だ、そのハムに加工された子豚を見る目は」

途轍もない哀れみに満ちたエルメンヒルデの目に狼狽える吸血鬼達。何だろ、あの目は。吸血鬼のくせに聖母を名乗れそうな程慈愛に満ちている。

「どーでも良いけどさあ。人間を家畜化って、全勢力敵に回すの解ってる?」

「ふん。やはり見た目と同じく、中身も若い。今の不死性を見たでしょう? 我々を殺せるものなどもうこの世には——」

パキン、と凍り付き砕け散る吸血鬼。再生は、しない。

「そんなの聖杯の力と細胞を凍結させれば済む話でしょ?」

「——な!?!」

砕け散り再生しない仲間を見て目を見開く吸血鬼達。セラフオールは形の残っていた頭を踏みつづす。

「私さあ………最近とおつてもイライラしてるの。力が強いつて理由だけで魔王にされて、そのくせ王としての仕事を果たせと言われて………なのにどいつもこいつも問題をポ

ンポンポンポンポンポンポンポンポンポンポンポンポンポンポン………
「挙げ句の果てには何でこんなガキどもに小娘扱いされなきや何ねーんだよおお！」

「ゴウ!と魔力が突風になり吹き荒れる。キラキラと氷の結晶が宙を舞う。」

「ダイヤモンドダストだな。溢れる冷気に空気中の水分が凍り付いたんだ」

「この辺りではたまに見る光景ですね。月に照らされたそれはもう大変綺麗です」

「私は朝何度か。それも綺麗ですよ……」

「きれい」

「……ん」

と、マイペースに防塵マスクをかぶり事の成り行きを見る五人。ふとエルメンヒルデは気になったことを尋ねる。若干怯えながら。

「あの、柳様は今何もしないのですか?家畜扱いされ、柳様が何もしないなど少し怖

——ふ、不思議なのですが」

「あん?愉快なわけねーだろ一々口に出すな」

「ひえ!も、ももも、申し訳ありません!」

「ただまあ、セラフォル様ストレス発散相手にされると思うとなあ」

「そうですね。あれは、初めてあった時の柳様に通ずるものがあります」

と、エルメンヒルデは、体内に入った氷の欠片を媒体に吸血鬼達を内側から氷の剣で

貫くセラフオルーを見る。スツ、とロスヴァイセの後ろに隠れた。

「そんな、バカな……いや、私は聖杯を持つもの！叔父上達のようには」

「うっさい死ね」

セラフオルーは氷像から聖杯を引つたくると軽く押す。倒れた氷像が粉々に砕け散った。

「お、おお……すげえなセラフオルー！神滅具をこうもあつさり」

「…………アザゼル総督ってさ……墮天使だよねー？」

「お、おう……どした？」

「何で墮天使がうちの悪魔達の保護者面して同盟結んでない吸血鬼領に連れてきてんだ殺すぞおい」

「お、落ち着けセラフオルー！お前どうした!?!何かに憑かれてんのか!?!」

アザゼルの襟をつかみ持ち上げるセラフオルー。ピキピキ音を立て凍り始める服を見て顔を青ざめさせるアザゼル。

「せ、セラフオルー様！冷静に、冷静になってください！」

「ギャーギャーピーピーうるせえよ！冷静になれ？冷静になって物事見たからこうなつてんだよ！落ち着け？落ち着いたらためえら暴走するだろ！疲れてる？疲れてるに決まってるだろうがあああ！」

「うおおおお!!」

ドゴオ!と壁に向かってぶん投げられるアザゼル。セラフオールはギロリとリアスを睨みつける。

「だいたいお前もさあ!何なの!?!まともに領地経営も出来ない、大王派の罪の秘匿のために担ぎ上げられたら評価に満足して、調子に乗って魔王で外交官の私になんの相談もしないし!何なの!?!私のこと嫌いなのだ!?!私を困らせて楽しいのだ!?!」

「ええ!?!ち、ちが——!」

「もーやだよー!疲れるよお!魔王なんて疲れるよお!辞めたいよおお!なのは何で他の魔王はバカと怠惰とゲーム脳しかいないのよおおお!うわああああん!!」

とうとうへたり込みギャン泣きしだすセラフオール。と、そこへジャンヌが現れる。

「あー、やつぱりこうなった。ほらほら泣かないの魔王ちゃん。飴食べる?」

「食べりゆ」

ジャンヌが差し出した飴をころころ口の中で転がすセラフオール。スンスン泣きながらも、とりあえず落ち着いたようだ。

「な、何だか闇の深い方ですわね」

「まああんな連中の王なんてやってりやなあ」

「あら、まるで私たちがセラフオール様の手を煩わせているみたいない方はやめても

「らえるかしら?」

「ねえね、ねえね、現在進行形で困らせてたのにあれ何?」

「名指しされてたのに……どーいう頭してる?」

「じゃあ魔王ちゃん、とりあえずグレモリー達連れて冥界に帰ろっか」

「帰って寝たい」

「だーめ。仕事残ってるんだから……私も手伝うから、ね?」

よしよしとセラフォルの頭を撫でるジャンヌ。よくよく探れば彼女から悪魔の気配がする。魔力量からして僧侶の可能性が高い。

「せめて後一人ぐらい仕事できる奴がいればなあ」

と、その時だった。

「んひやひや!セラフォルーったらずいぶんおつかない娘になったねえー!」

「……………お父さんの物真似?そんな事しても小物なのは変わらないよ……………えっと、お前……………何だっけ名前」

「ラゼヴァンだ!忘れるな!」

そういつて現れたのは銀髪の男二人。セラフォルは面倒くさそうにその二人を睨みつける。

「雑魚に用はないよ。お前等どうせ何も出来ないんだから、帰った帰った」

「ふん。そんな口が利けるのも今のうちだ」

「あん？」

「私は邪龍達を復活させた！トライヘキサも居場所が分かった。じきに手に入れる！そうしてこの世界全てを支配してやるのだ！父でもなく、祖父でもなく、このラゼヴァン・ルシファーが！」

「あつそ。じゃあ死ぬ」

と、セラフオールがラゼヴァンに向かって氷を放つ。しかしそれは複数のグレンデルによって防がれた。

「量産品とはいえ邪龍の中でも特に堅牢な鱗を持つグレンデルの群だ。貴様如きで貫けまい。そして、追加だ！」

「「——！！」」

ドクン！と吸血鬼達の死体が蠢く。やがてそれは巨大な黒いドラゴンへと姿を変え、セラフオール達に襲いかかってくる。

セラフオールはチツ、と舌打ちして凍り付けにして砕く。その隙にラゼヴァン達は逃げたようだ。

「——はああああ」

ズウン、と重いため息をはくセラフオール。天井を突き破り地上まで一気に飛ぶ。

ツエペシユ領だけではない。カーミラ領でも火の手が上がるのが見えた。

「何奴も此奴も何奴も此奴も何奴も……いい加減にしろつてんだよ畜生め——」

セラフォルーを相手するように命じられていたのかセラフォルー向かって襲いかかる量産型グレンデル。と、セラフォルーの肌と髪が白く染まる。気にせず殴りかかった量産型グレンデルの拳が凍り付き砕ける。

「凍れ」

「——」

「ピシリと凍り付く量産型グレンデル。その氷像の一つの頭にグラムを突き刺すセラフォルー。グラムから龍殺しのオーラが流れ込みピシピシひび割れていく。」

「砕ける」

次の瞬間、量産型グレンデルがはじけ周囲に龍殺しの冷気が放たれる。それはカーミラ領まで覆い全ての邪龍を一瞬にして凍り付かせた。

「あいつ殺す。絶対殺す。何時か殺す。必ず殺す——ん？」

と、セラフォルーは視線を感じて振り返る。グラムが反応している。ドラゴンだ。邪龍に討ち漏らしが居たのかと振り返るとそこには——

「……………兎？」

オツドアイの黒兎がドラゴンの翼をはやしパタパタと飛んでいた。

最強の邪竜

え……………何これ？

此方をつぶらな瞳で見つめてくる羽黒兎を見て、セラフオルーが思った事はそれだ。

「現魔王のレヴィアタンか……………超越者と呼ばれるルシファーとベルゼブブには劣ると聞いていたが、事実なら楽しみだな」

しかもなんかイケボだし。

「あー、えつと……………私も最近超越者って呼ばれるようになったよ？」

「そうなのか？確かに悪魔にしては強い力を持っているな……………いや、そもそも今の前は悪魔なのか？」

「んー、どうだろ？サーゼクスちゃんがやってたように自分の肉体を私自身の魔力属性に合わせて変質させただけだし」

「うむ。もの凄い冷気だ。迂闊に近づけば白兔になってしまう」

と、そういう黒兎の全面の黒い毛に霜が張り、確かに白く染まったように見える。

「えつと、兎ちゃんは、何者なの？」

「俺か？俺はクロウ・クルワツハ」

「え、ごめんちよつともう一回言つて」

「うむ。もの凄い冷気だ。迂闊に近づけば白兔になってしまう」

「いやそこじゃなくて」

「俺か？俺はクロウ・クルワツハ」

「……………」

え、この兎、邪龍の中でも特に力を持っていた奴の一匹なの？ヒクヒク鼻を動かす兎は何処からともなく取り出したバナナを食べ始める。

「……………何で兎？」

「修行仲間が兎だったからな」

「……………」

どんな兎だそれは、と思いつつ。なんか頭に引つかかるような？

「もしかして、芥子ちゃん関係？」

「知っていたか。丁度いい」

ウンウンと頷くとバナナの皮を燃やす。火はいたぞこの兎。いや実際は邪龍なんだろうけど。

「日本地獄に就職したい。紹介してくれ」

「……………それは、芥子ちゃんに頼めばいいんじゃない……………」

「サブライズだ。彼奴を驚かせたい」

「何で？」

「……………」

コテンと首を傾げるクロウ・クルワツハ。見た目は兎。大変かわいい。

「何故、だろうな？あの女とは、強くなるために鍛錬してるさなか出会った。彼奴もまた強さを求める者だった……………」だから、俺は彼奴のそういつた顔しか知らぬ。驚いた顔も、見てみたい……………」む？しかし、何故見たいのかは解らぬな」

「あく、ははあん。芥子ちゃんも罪な兎……………」

「？あの女が罪を犯したのか？罪を裁く側だろう」

「いや、言葉のあや。そういう事なら、今は下の方に日本地獄の偉人が来てるよ。一番強い男の人」

「そうか、感謝する」

「おかえりなさい柳さん……………行くより増えてませんか？」

地獄に帰ってきた柳。その肩には三子が乗っており、その頭には黒い兎。柳の腕の中には三子に良く似た龍の特徴を持つ幼女。柳の顎の下にグリグリと頭を押し付けてい

る。何かに似てる。ああ、トーマムポールだ。

「一番上のはクロウ・クルワツハ。地獄に就職したいって事です」

「クロ……………その姿、もしや芥子さんのご友人の？お話がかねがね。あなた程の実力者が入ってくれるのはこちらとしても助かります。手続きが終わるまでは、どうぞ閻魔殿で」

「うむ」

クロウ・クルワツハは案内の金魚草に付いていく。あの金魚草、根っこが2つに分かれて歩いてるんだがまた変異種だろうか？

「そちらの子は？」

「新しくできた娘の四子よっしです」

「パパの娘……………」

「……………なるほど。複数の邪竜の気配が混じっています、核は三子さん……………いえ、柳さんの中に取り込まれていた力ですか」

なるほど、だから娘なんですとねと四子の頭を撫でる鬼灯。四子はジツと鬼灯を眺める。

「……………おじいちゃん」

「おい、鬼灯様に失礼だろ」

「ビシ、と指差し老人発言。鬼灯はふむ、と顎に手を当てる。

「どうやら私を柳さんの父親と勘違いしているようですね」

「あれ、柳君おかえりー」

「ひいおじいちゃん」

「……………閻魔様が鬼灯様の父親と思ったようですね」